



江戸名所圖會
十八

西垣文庫
文庫10
6556
18



東覚寺 新編

香取太神宮

寶蓮寺

常光寺 六阿彌陀六番目

蓮發太子堂

慈光院

吾孀權現社

押上最教寺

蒙古退治日比丸旌曼荼羅起英皇

法恩寺 番神堂

大法寺 番神堂

靈山寺 善空法師王寺廟

第六天祠

中の郷尾の宮

業平天神社

本久寺

多田薬師堂

遠州秋高山古寺

牛瀨神社

太子堂

妙源寺

牛瀨王子権現社

寺瀨蓮華寺

大川橋の圖

福寺 佛殿 本屏 天王殿

梅若丸塚 同縁起

長命寺 牛瀨安女天 長命の推 自在庵回址

須田の河系

丹頂ヶ池

白髻の神社

須田の河系

鐘ヶ澤

隅田の宿

都多

本母寺 松若山王 権現社

寺瀨蓮華寺 太子

牛田薬師堂

内川

沙茶載烟

丹頂ヶ池

治江福光寺

関屋の里

綾瀬川

鐘ヶ澤

本下川薬師堂

若宮八幡宮

関屋天満文 元春林

葛西花田社

平井聖天宮

法重稲荷社

青研養徳之旧跡

古製山葵掛の巻

普賢寺

葛西六郎墳墓

立石 毎々天祠 本堂 形造之来由

中川 同約魚の巻

一の江妙音寺

二の江妙音寺

善通寺

徳野権現祠

今井渡

鎌田妙福寺

淨無寺 琴深松

小糸氏康小齋の巻

新宿渡に

夕顔観音堂

松戸堤

宋又村帝釈天社

本田稻荷社

松戸の津

辨財天祠 和具宮

相模巻

小弓曹子墓

神明宮

合別院廢址

若照寺什寶古鈴

乃法八幡宮

神明宮

合別院廢址

法願寺 同魔巻

長崎湊

市河城址

國府臺

玉府城址

鏡石

真弓浦

真弓鐘櫓

葛飾八幡文

安房湊神社

妙正池

勝呂田池

同進電圖

新利根川

根本橋

全光明寺

持玉坂

志間濱

志間子鬼名田跡

八幡不知森

正中山法華經寺

妙正大明神祠

洗川

甲宮

迦羅瑪起瀨

總寧寺

同進電圖

志間法華寺

真間入江

志間の井

曾谷妙見堂

葛飾神社

阿須波神社

圓光大師湊沙弥

市川渡江

鐘ヶ淵

内孫山

志間法華寺

志間於湊比

梨園

高石神社

若宮八幡文

石茅

意富日神社初詣座地

天道念佛

九月廿日祭禮圖

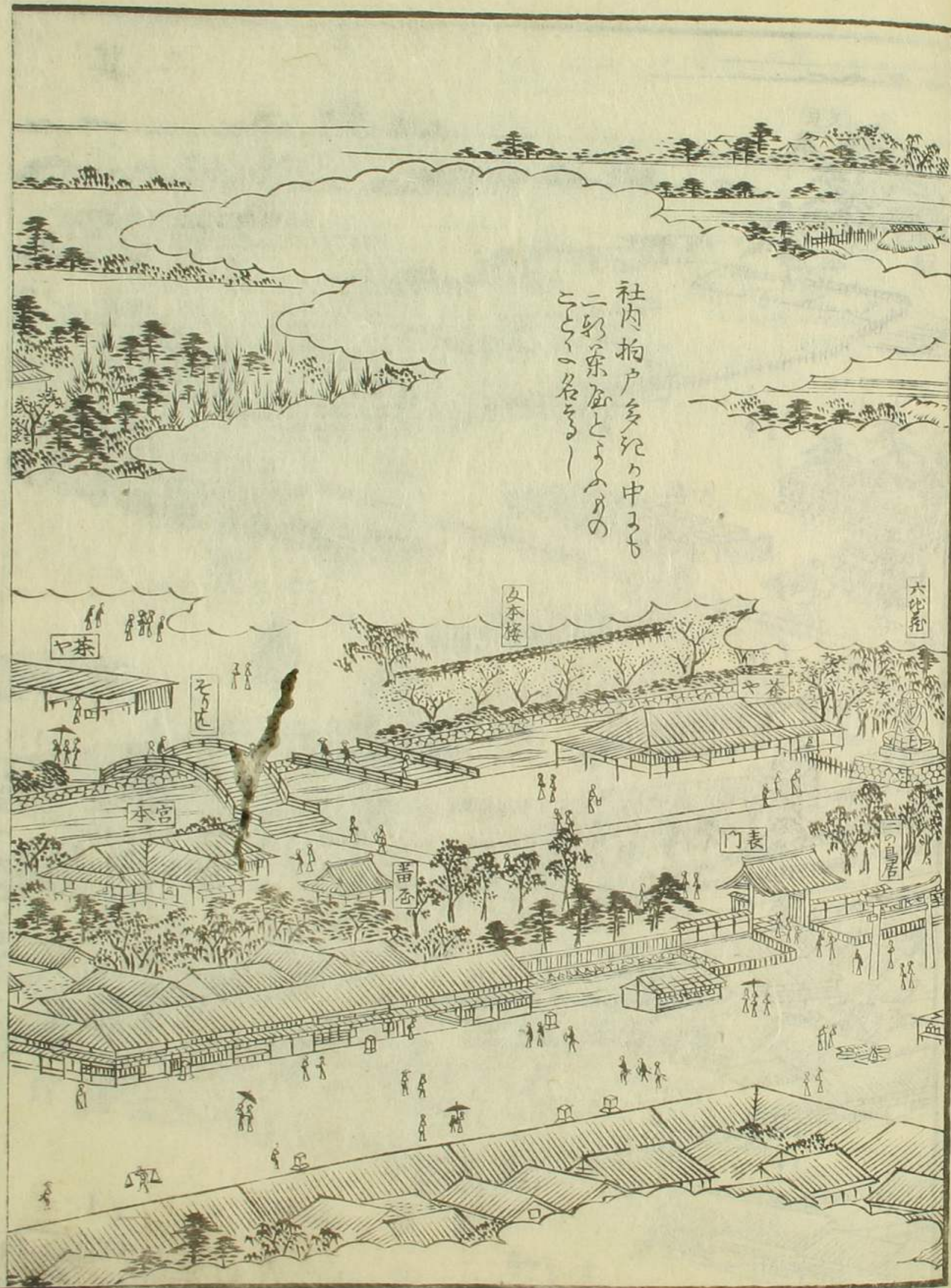
夏見厨

慈雲寺

茂侶神社

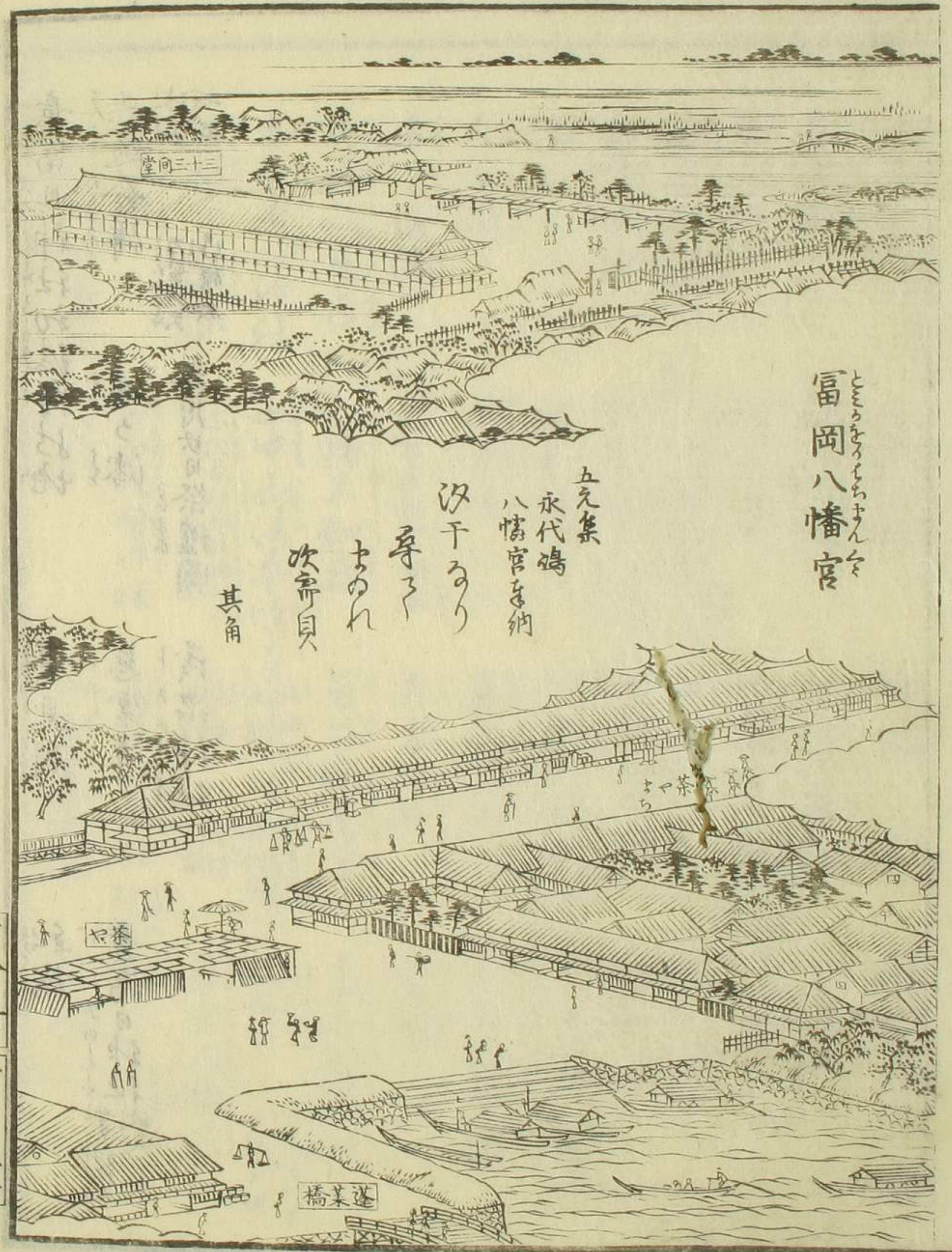
船橋

意富日神社



社内拍戸多紀り申すも
二軒(東屋と西屋)あり
こゝろ(名)なり

六沙塔
表門
本宮
番倉
茶
茶
茶

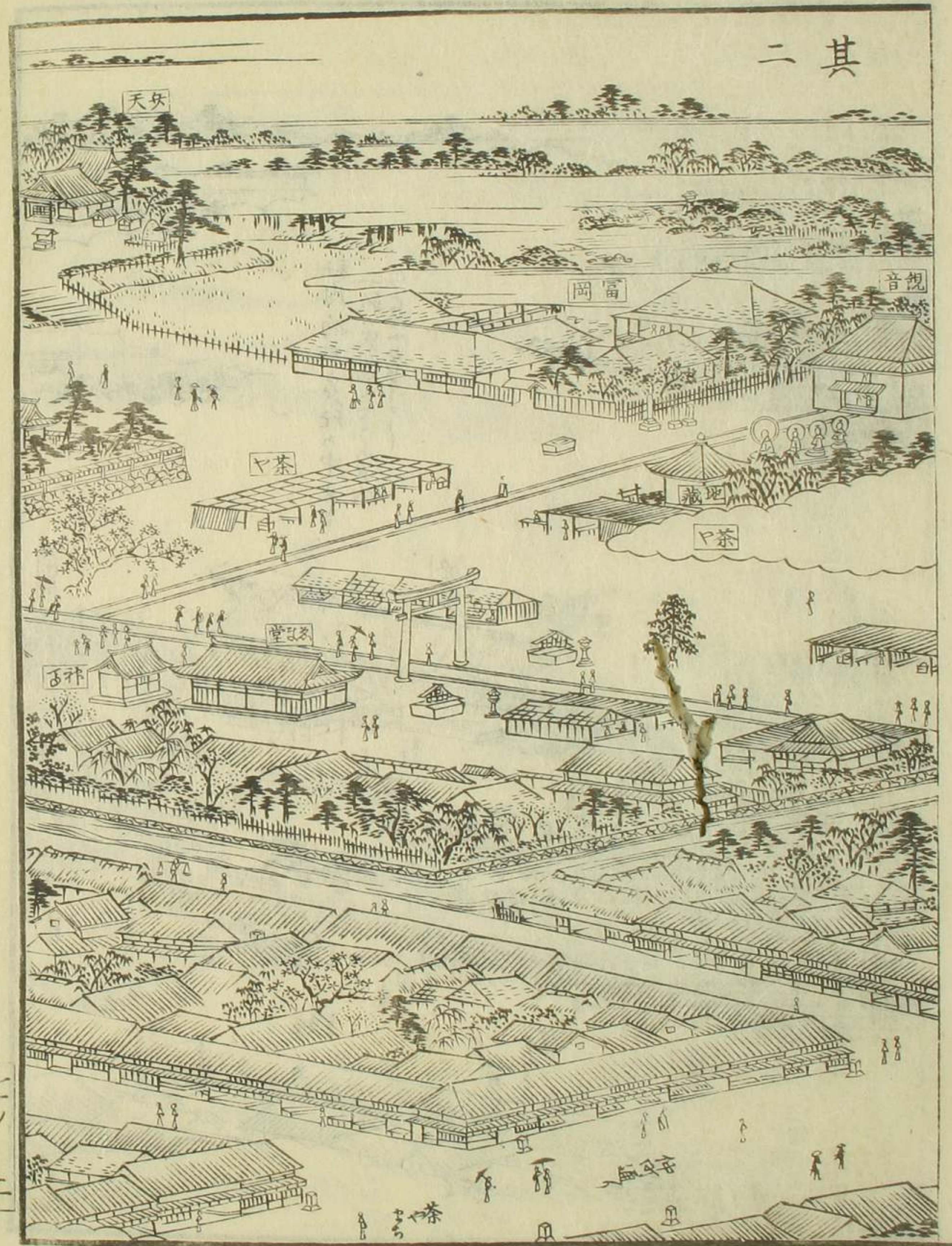


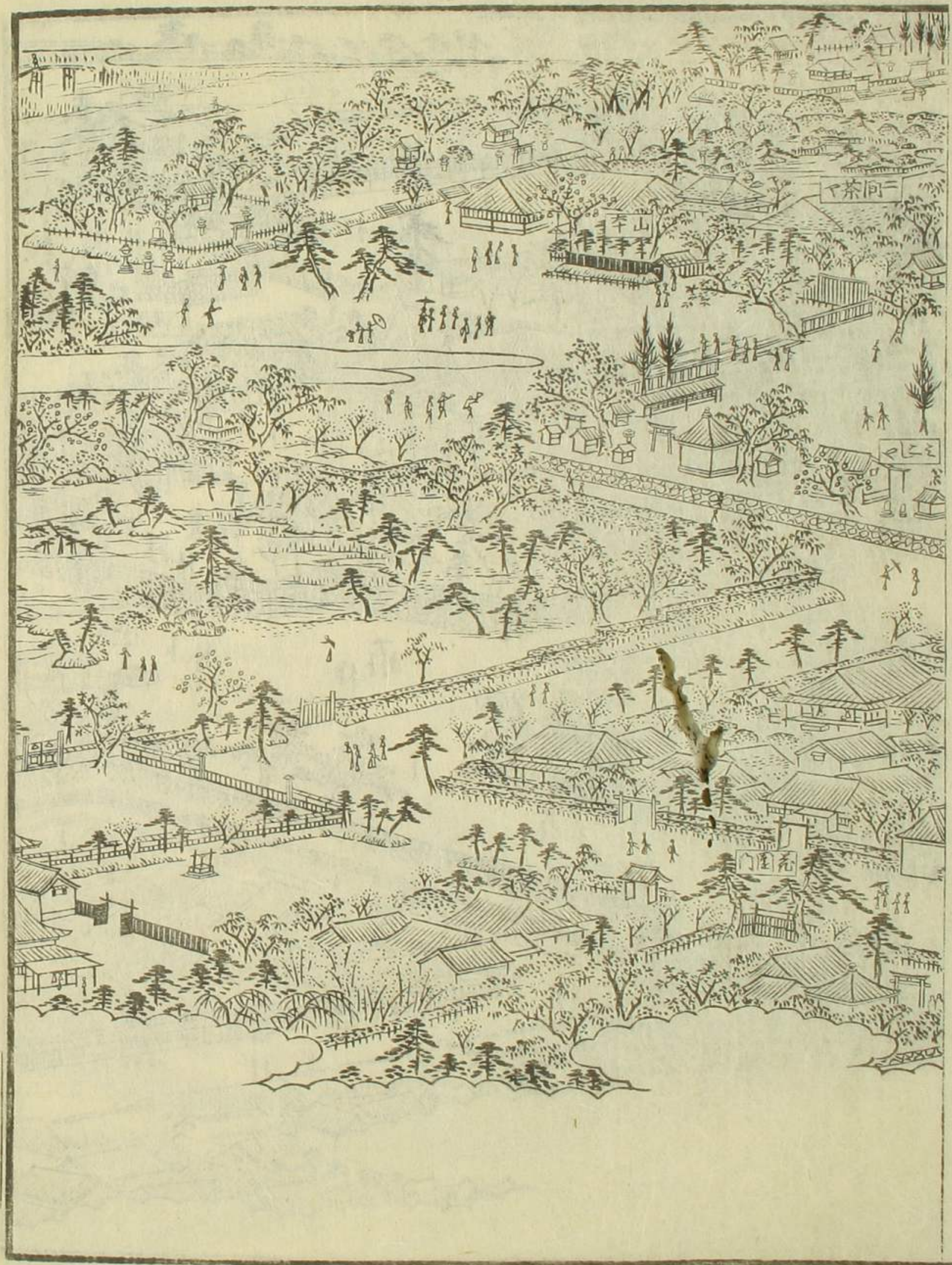
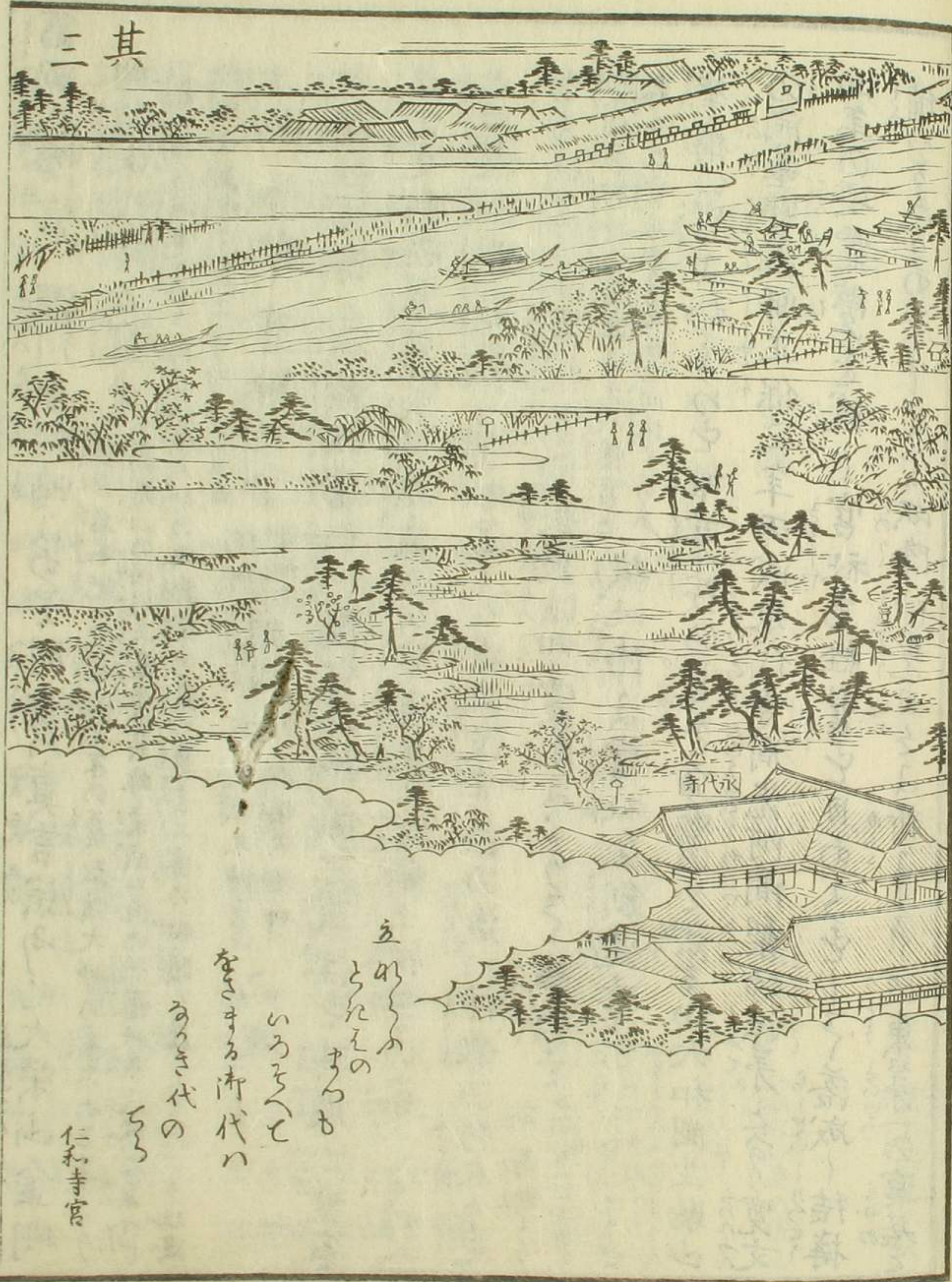
富岡八幡宮

五元集
永代鳩
八幡宮を納
汐干るり
舟
土のれ
吹舟貝
其角

十八ノ冊
七ノ壹

表門
本宮
茶
茶
茶
橋
橋





富岡八幡宮

深川永代嶋より別當の真言宗より大栄山金剛

神院永代寺と號す

江戸名不記の寛永五年の夏弘法大師の靈亦あり

本社 祭神 應神天皇

神影の相殿 古黒大神宮 三座

相傳往古源三位頼政當社八幡宮の神像を尊信之其後千葉家

及ひ足利將軍尊氏公鎌倉の公方基氏又官領上杉等の家より傳へ

太田道灌宗致殊より厚ありり道灌没すふの後ハ神像の所在も定

あらはらるゝ小寛永年間長盛法印靈亦よりり感得と

依此地より當社を創建とす

華構の饒よわりの唯茅茨の營をあるとの之然る小大和國生駒山

の用基寶山師正保三年丙戌永代寺周光阿闍梨の法弟より寛文

四年の頃靈夢を感し官社を經營之日ありとて落成し結搆

備りるありありとて以降神光日々より新しとて河東第一の宮居と

るより當社の額より八幡宮と書きたるの青蓮院宮尊證法親王の

真蹟る社内末社多し依悉く是を畧す

當社四隅鎮守

良隅 蛭子宮

乾隅 大勝金剛宮

巽隅 荒神宮

坤隅 摩利支天宮

乾隅 大勝金剛宮

園女樓

永代寺林泉のちありり

二華表

赤井得水のり其文のり

富賀岡八幡神祠石華表銘並序

維著雍敦八幡神祠石華表銘並序

建富岡八幡神祠石華表銘並序

間稱馬石以幡代祠石華表銘並序

鳳蓋此也欽祈國旁及自禱云相之尺花右率

由中以此也鳳聞之采蕪可薦於鬼神忠信

人載也而况於不朽之歎也

銘以繫尤柱亦其所需也

銘昔應神帝真協天

敦惟威繫銘銘人由鳳馬間建維富賀岡八幡神祠石華表銘並序

元文戊午夏五月

東都中秘書監源鳳卿子陽甫撰

得水赤井啟拜書

山岡 毎年三月廿一日弘法大師の御影供を修行と此日より同廿八日迄は為社別當永代寺の林泉
 をひらいて諸人に見物をもよほす山権とてあへく大の御手集とて
 祭禮 隔年八月十五日又修行と此日神輿三基本所一の傍の南藏舟浦の前なる行祠へ神幸同日
 歸豊とてこの祭禮の寛永二十年癸未八月十五日修行ありけるより連綿して江戸名所
 記に記してありて慶安四年の秋天下泰平の御禱のお相別當倉鶴岡八幡宮の法式を模して
 為社に流滴馬をとりて左方に假屋棧敷をとりて見物と貴徳市をせむは同書に
 見えたり後此より後早の二十三間堂とて遷すとも其流滴馬の餘風よりなる
 あらん歟

當社門前一華表より内二四所り向ハ西側茶肆酒肉店軒を並へて常小
 絃哥のあり絶と殊と社頭より二軒茶屋と称する賃食屋杯ありて
 遊客絶と牡蠣蜆蛤鰻鱺魚の類ひを此地の名産とせり
 二十三間堂 同所二所あり東の方よりあり相傳寛永年間 或人云十九年 大江戸
 の弓師備後といふ者射術稽古の爲京師蓮華土院を模して二十三
 間堂を創立せん事を乞依後草まわいて地を賜ひ諸家又勧進
 して建立の功を募るる不於同十九年壬午十月普請落成と
 情水

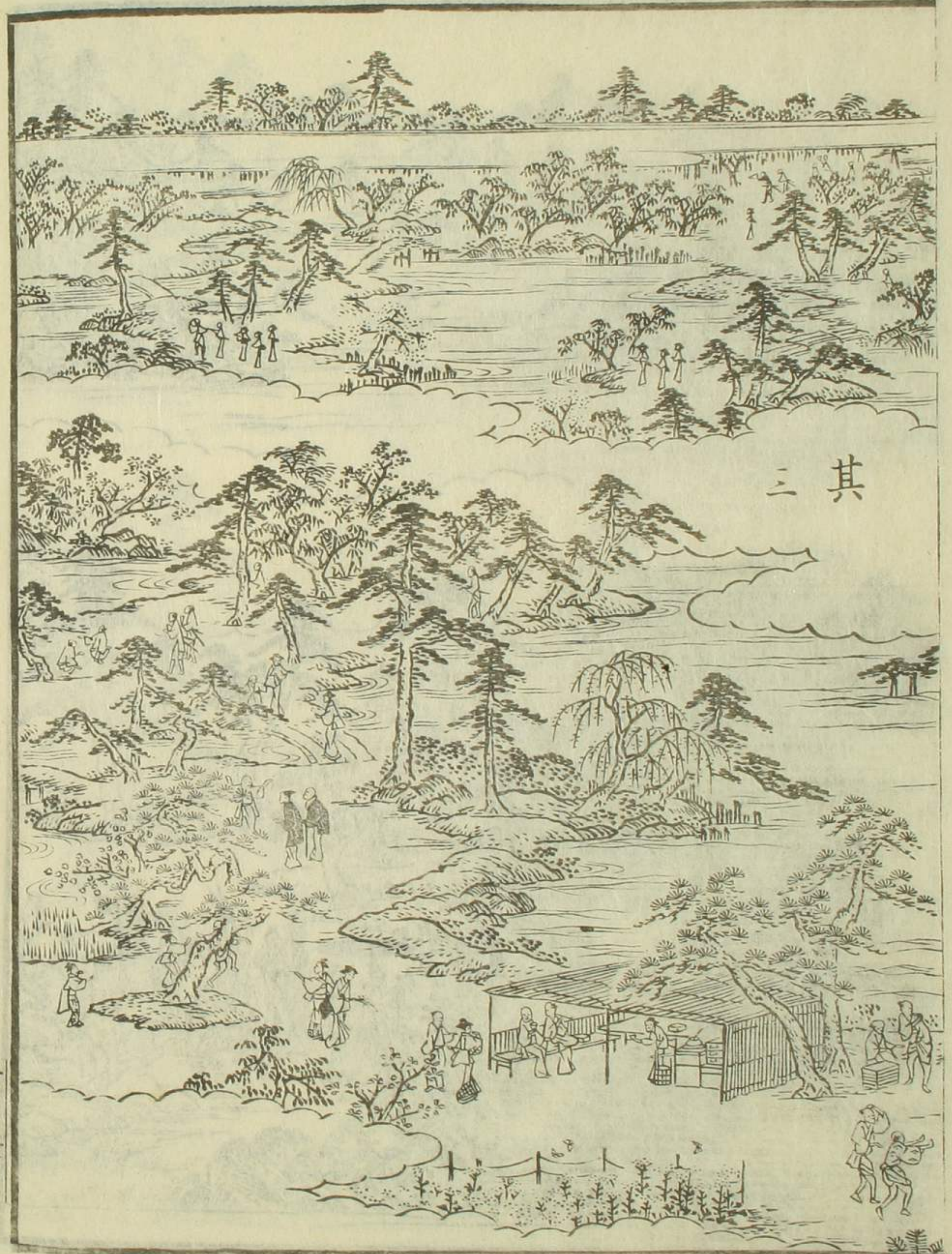
七ノ五



永代寺山に花

毎年三月廿日より
 同廿八日迄のうちに
 林泉をひらいて
 諸人を見せしむ





の辺り今も大崎と云ふ所の三十二間堂の同地なるに元禄十年戌寅九月
 廿八日卯刻とあるに俗間堂前と唱ふるも三十二間堂の地を略す
 田録の邊に罹り灰燼なり其後今の地より移されたりとあるに
 江戸三十二間堂安敷帳と懸眼大師の發起ありとあり又一説あり
 流の武上を起す江戸神社の達人松葉とあふかをそりありとあり
 例 崎 辨財天社 同所東の方 例 崎あり列當を吉祥院と号す奉尊

辨財天女の像弘法大師の作との相傳元禄年間深津氏正隆
 台命を奉へ八幡宮より東の方の海濱を築き立陸地とて依同
 十二年庚辰護持院の大僧正隆光 此地は天女の宮居を建立と
 方あり

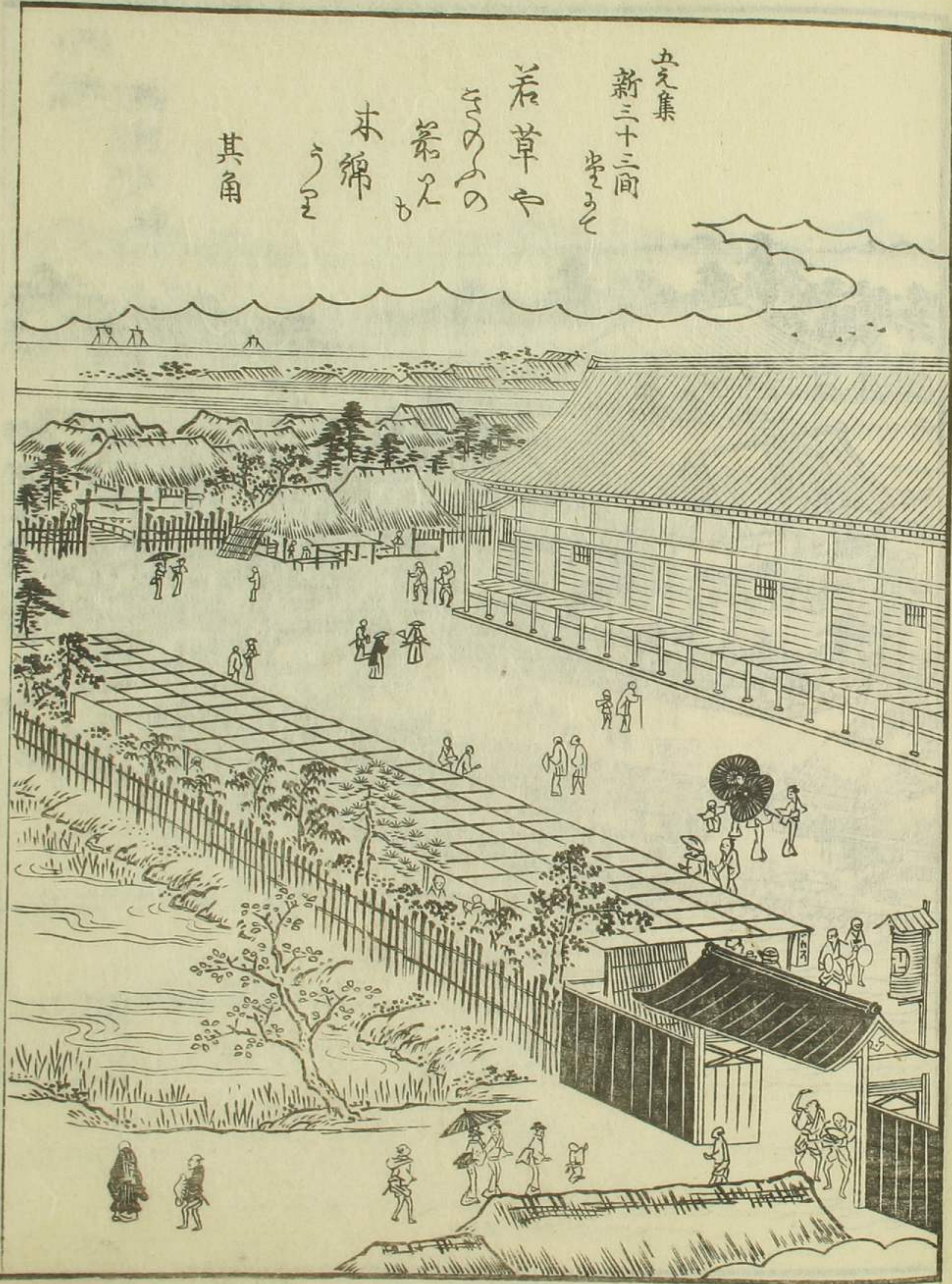
此地の海岸より佳景あり殊更弥生の潮盡みの都下の貴袵袖を連
 る真砂の文蛤を搜り又ハ楼船を浮り妓婦の弦歌より真成催
 ともあり春を添の一奇觀たり又冬月千鳥も名をゆり
 長光山陽嶽寺 深川富岡橋の北結横小路あり妙心寺氏の禪宗よ
 一々奉尊観音大士の像の恵公僧都の作ありと云向井氏忠孫用

二軒茶屋
雪中遊宴之景

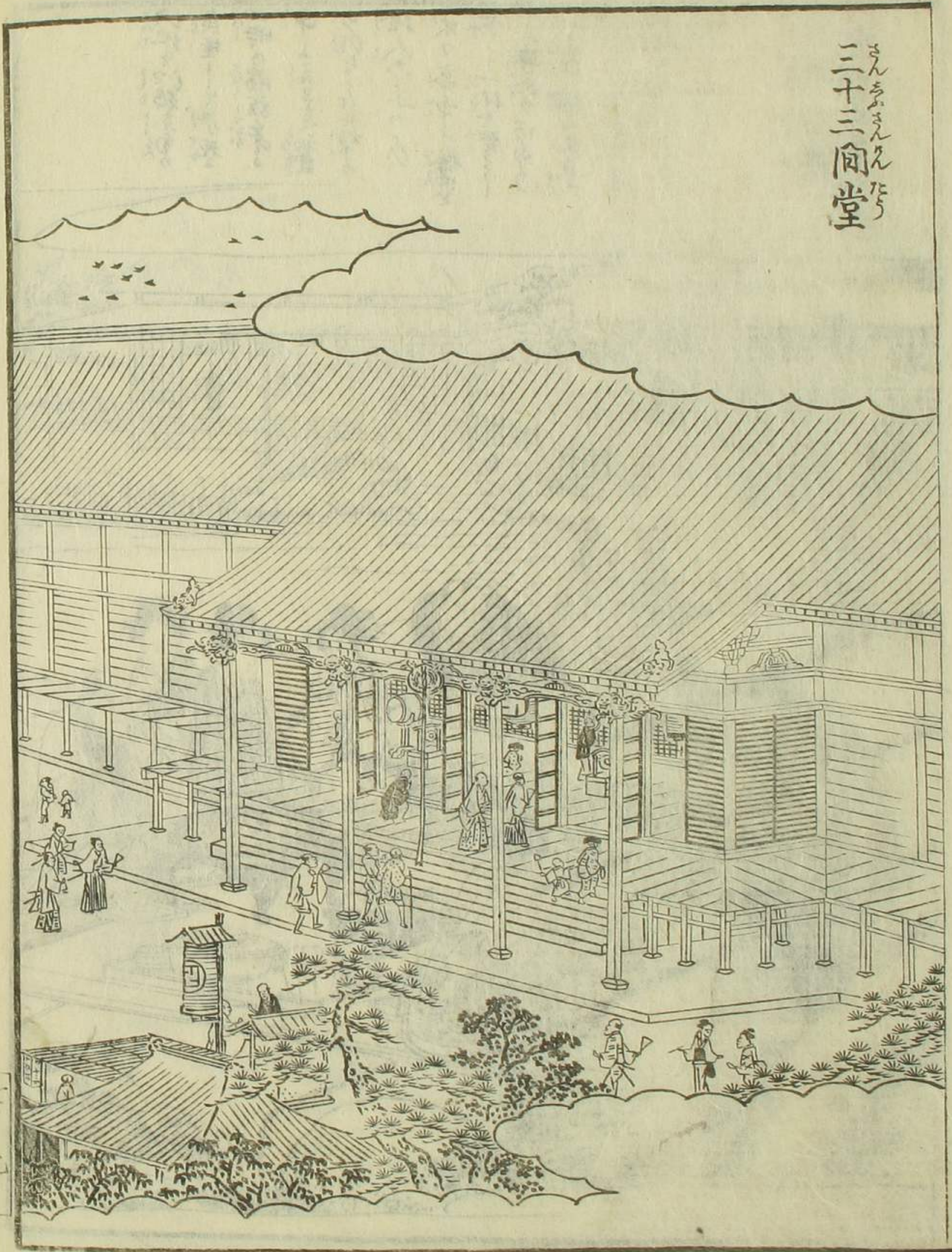
此地は、初雪の
佳境にて、月夜を
四時の勝飯を
中し、初雪
の夜、はなはた下の
猿人、あつと、
来り、亭中の静を
愛し、一杯を飲
て、碁盤の、何れ
か、を、木の、
秋、は、危、を、
一夜の、夢、
あつと、ぬ、

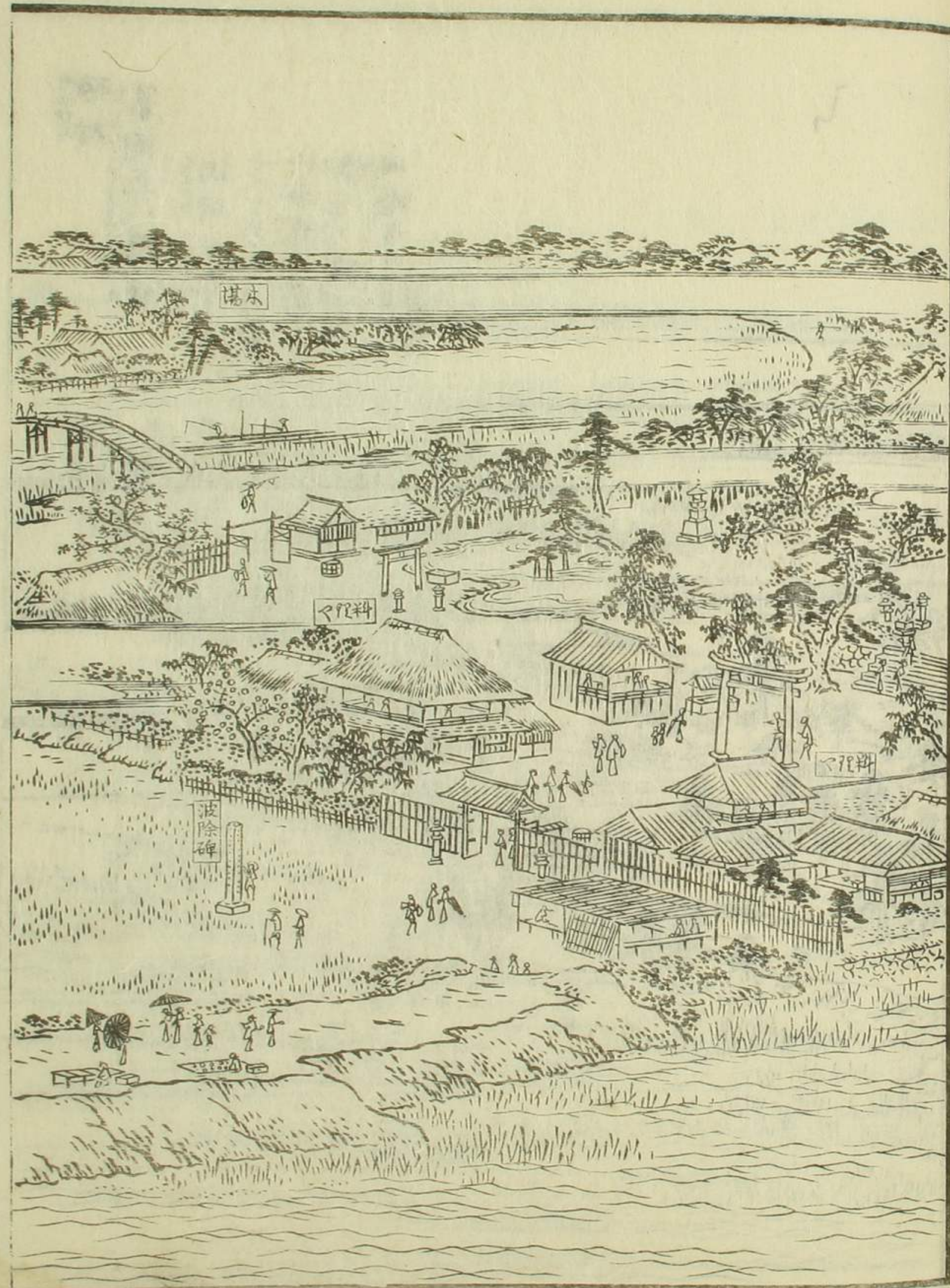


五文集
 新三十三間
 若草や
 さのしの
 茶人
 本綿
 うま
 其角

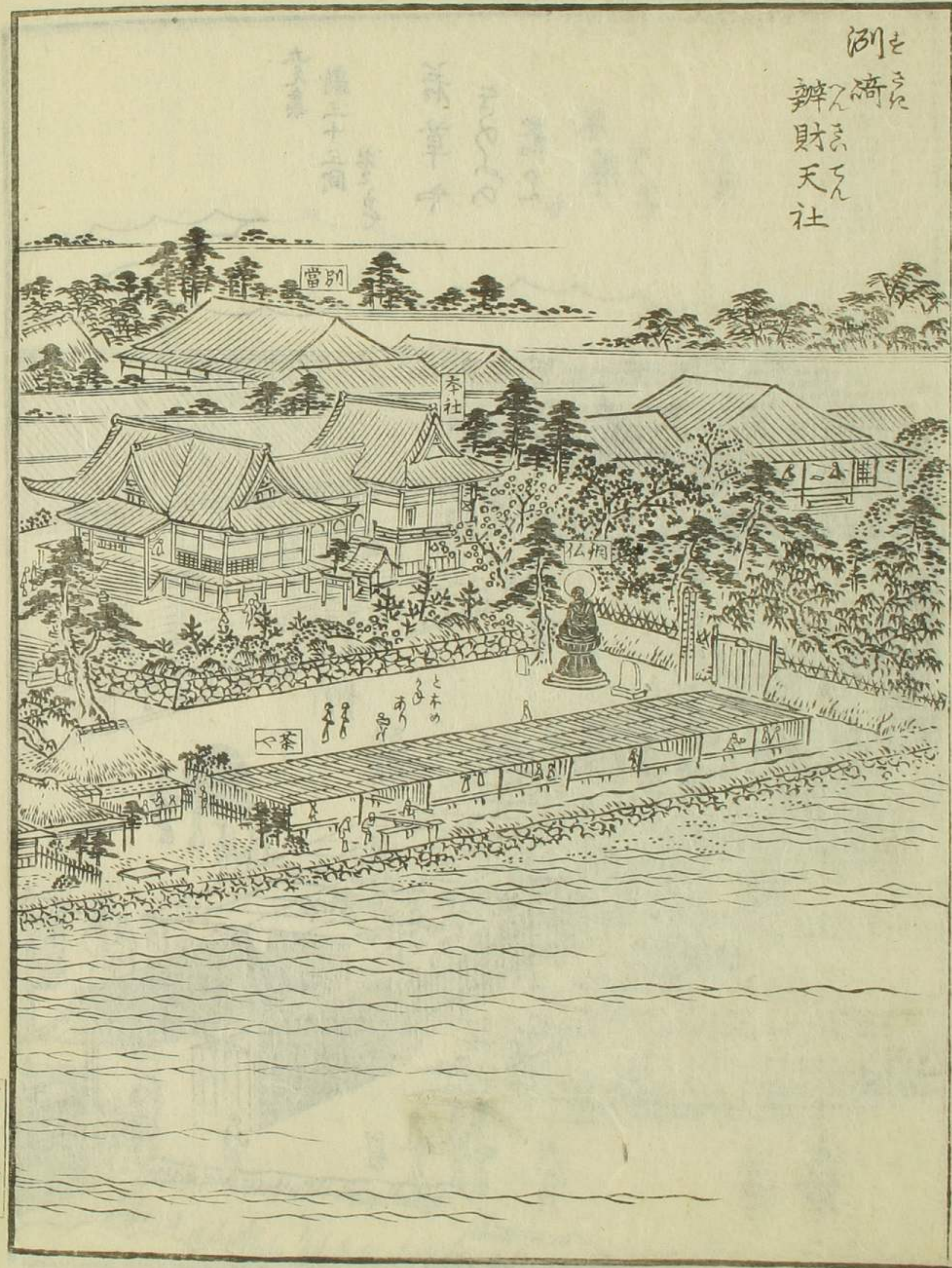


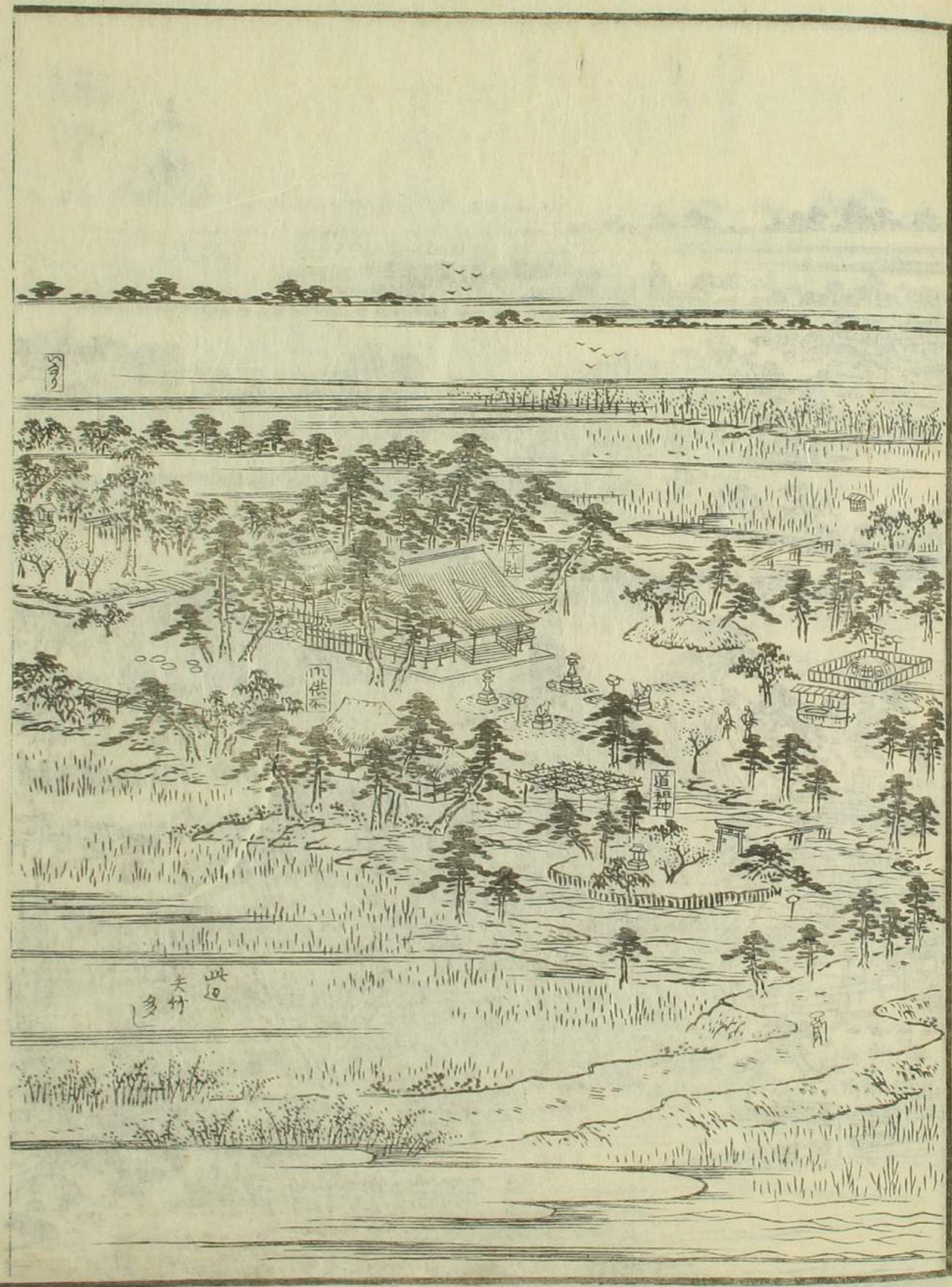
三十三間堂
さんさんげんどう





湖上
辨財天
社





此
多竹

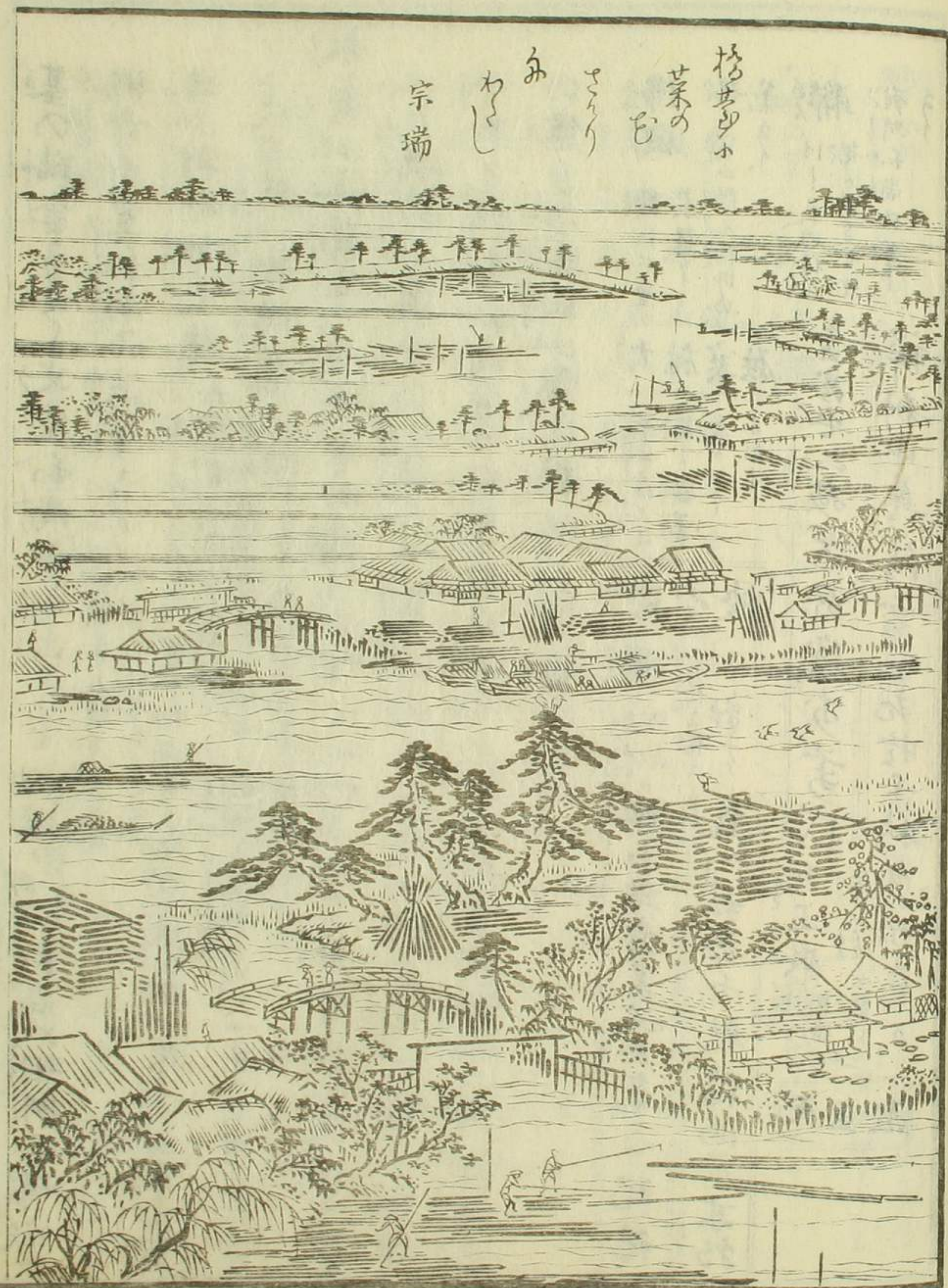


砂村
富岡元八幡宮
湖崎弁天
十八丁の東
の海濱
深川八幡宮の
旧地

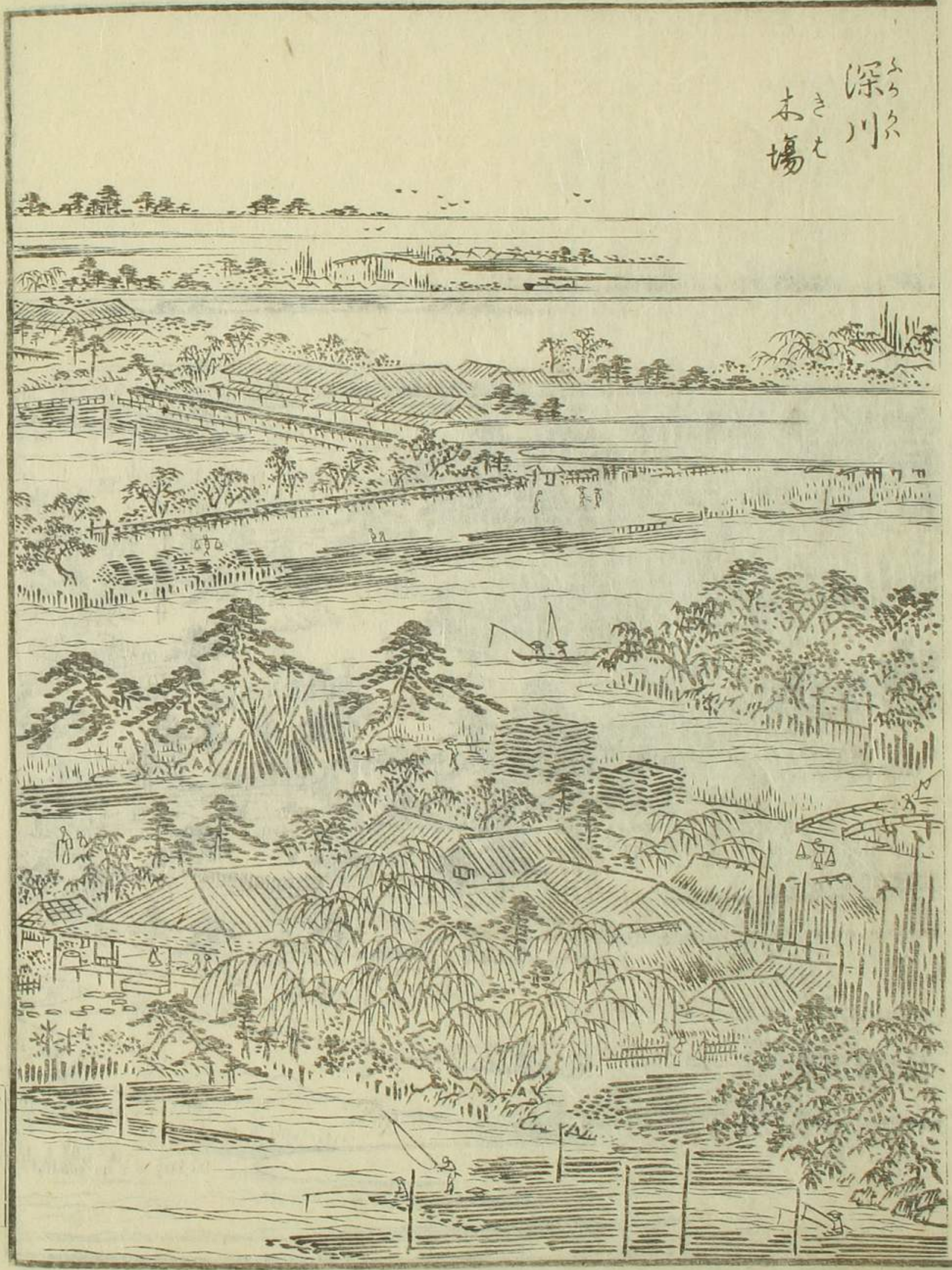
此
多竹

八
十

橋本
菜の
む
さ
あ
わ
宗瑞



深川
木場



基の精舎より文室和尚を定山とて陽嶽の向井和尚の相列三崎見

桃寺白室和尚の法弟あり見桃寺の道場ありといふ和尚の相列三崎見

出山釋迦如来像立像三丈ありあり極く妙作りあり坪内大隅正務とて人爲寺文室

二代目英一蝶墳墓當寺の需よきなり彫刻は寺記に記されたり二年丁巳閏十月十二日

永壽山海福寺 同所寺町通り中程の右側あり黄檗派の禪林あり

江戸觸頭二箇寺の一負たり萬治元年戊戌の創建用山隱元禪師

中興之獨本和尚あり本尊釋迦如来左右に迦葉阿難十六阿羅漢木

の像を安と用山隱元禪師の肖像あり

佛殿 額に二重 大 旌 大 旌 大 旌

聯 左右の 法 國 衣 氏 風 高 名 而 瀧 明 鐘 樓 天 王 殿 天 王 殿

大 旌 大 旌 大 旌 大 旌 大 旌 大 旌 大 旌 大 旌 大 旌 大 旌

當 山 洪 鐘 者 寛 文 壬 子 年 石 川 政 勝 本 住 居 士 拵 之

也 時 天 和 二 年 壬 戌 之 冬 切 火 起 炎 燎 殿 宇 垂 不 朽

及 乎 竣 工 知 事 來 乞 銘 遂 再 舉 此 以 鑄 其 上 銘 曰 焉

大 化 音 燼 內 一 事 火 鑄 成 遂 再 舉 此 以 鑄 其 上 銘 曰 焉

返 開 自 性 寂 寂 惺 惺 禪 林 而 寂 有 扣 則 鳴 清 輕

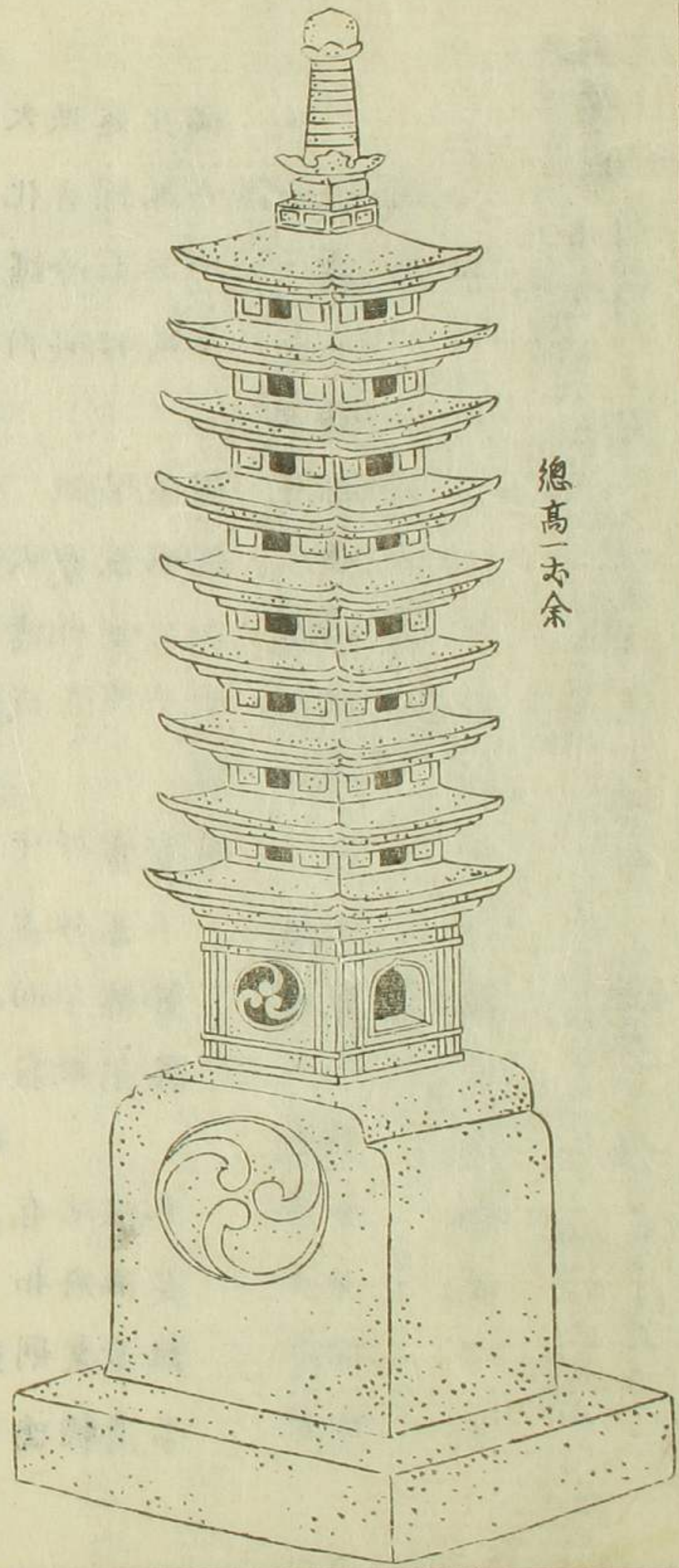
天 風 永 扇 一 翁 隱 元 琦 謹 題 王 聲 教 大 矣 難 名

和 三 年 癸 亥 小 陽 吉 日 持 沙 臨 濟 正 宗 三 十 三 世

檀 主 石 川 氏 正 之 正 茂 中 村 喜 兵 衛 藤 原 正 次

九層塔 寺境池のわきらあり高一丈五尺の塔あり相傳ふ武田信玄の

總高一亦余



採茶庵舊蹟 同所平野所より俳諧師秋風子の庵室あり秋風本園の

参列ありて秋山氏あり鯉屋と唱へ大江戸の小田原町に住て魚信たり

後隱栖し一と号と 妻翁妻杖 常は俳諧を好み檀林風を慕ひ

のら芭蕉翁羽師とて此庭に遊入夏元六十年翁常は奥せり

と云く去来ハ西三十三箇圃秋風の東三十三箇圃の俳諧奉行あり

とわらうと道の遠人ありしあり秋風は芭蕉翁の号ありて後桃去月翁より其四代ハ
次の芭蕉翁の翁に詳あり享保十七年壬子六月十二日八十六歳とて没せり西本秋風の中成徳と
塔と

秋風白集 予爾若採茶庵をわかれ後

秋萩をうらうらと初秋の風ありて

向家もらほと収穫乃う後とていふ

このめそれいふこと

羨うそくひとてえあらうとて戸終り耶

時雨

深川の月も時雨ふ長くうあつて

海川よりうれ

川の音葎の起野とていふこと

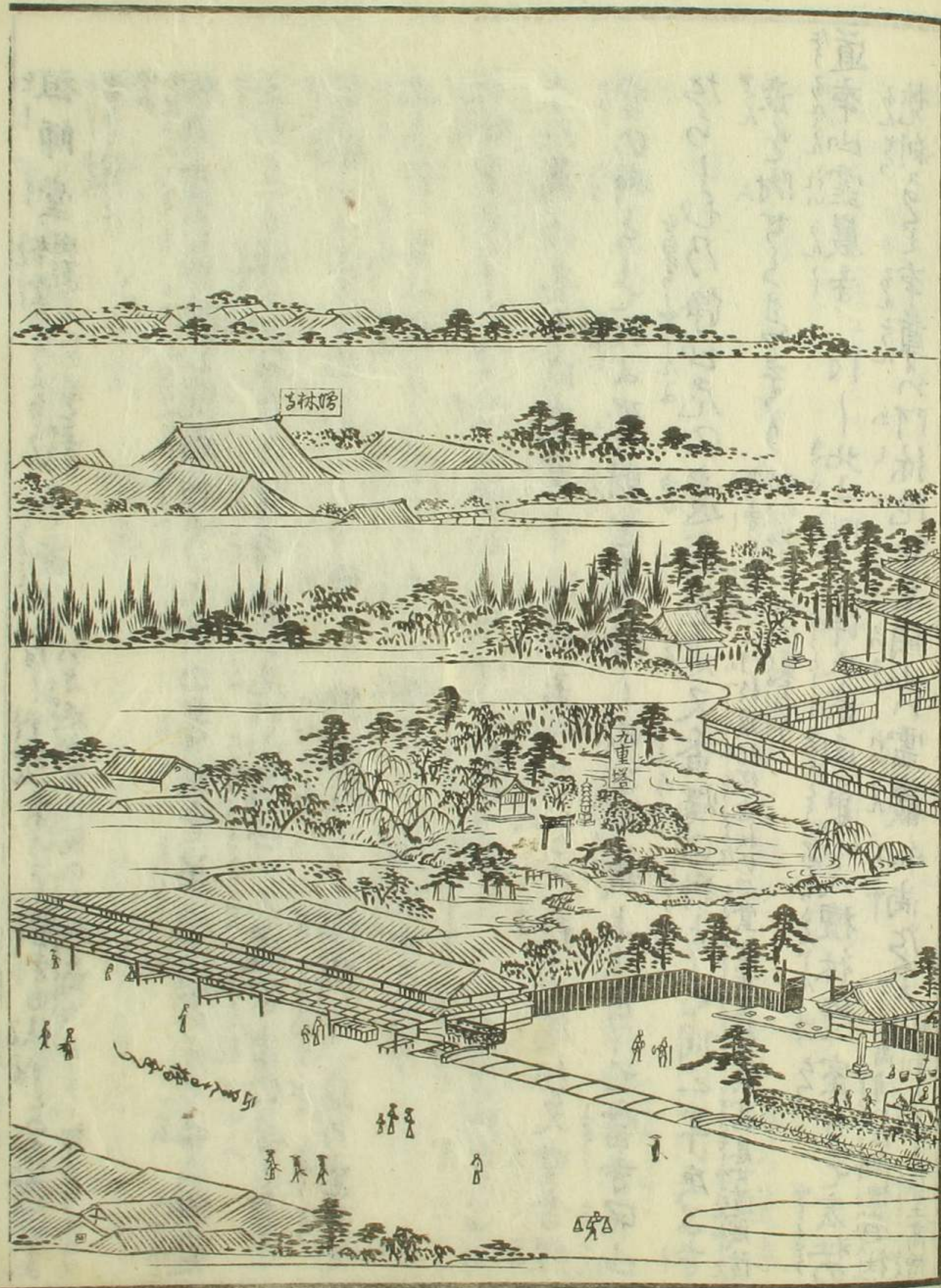
法苑山浄公寺 同一通り正覺寺橋より北の方右側よりあり日蓮宗甲斐文

圃身延山は屬を乃身延山の弘通所と称せり萬治元年戌戌創建の

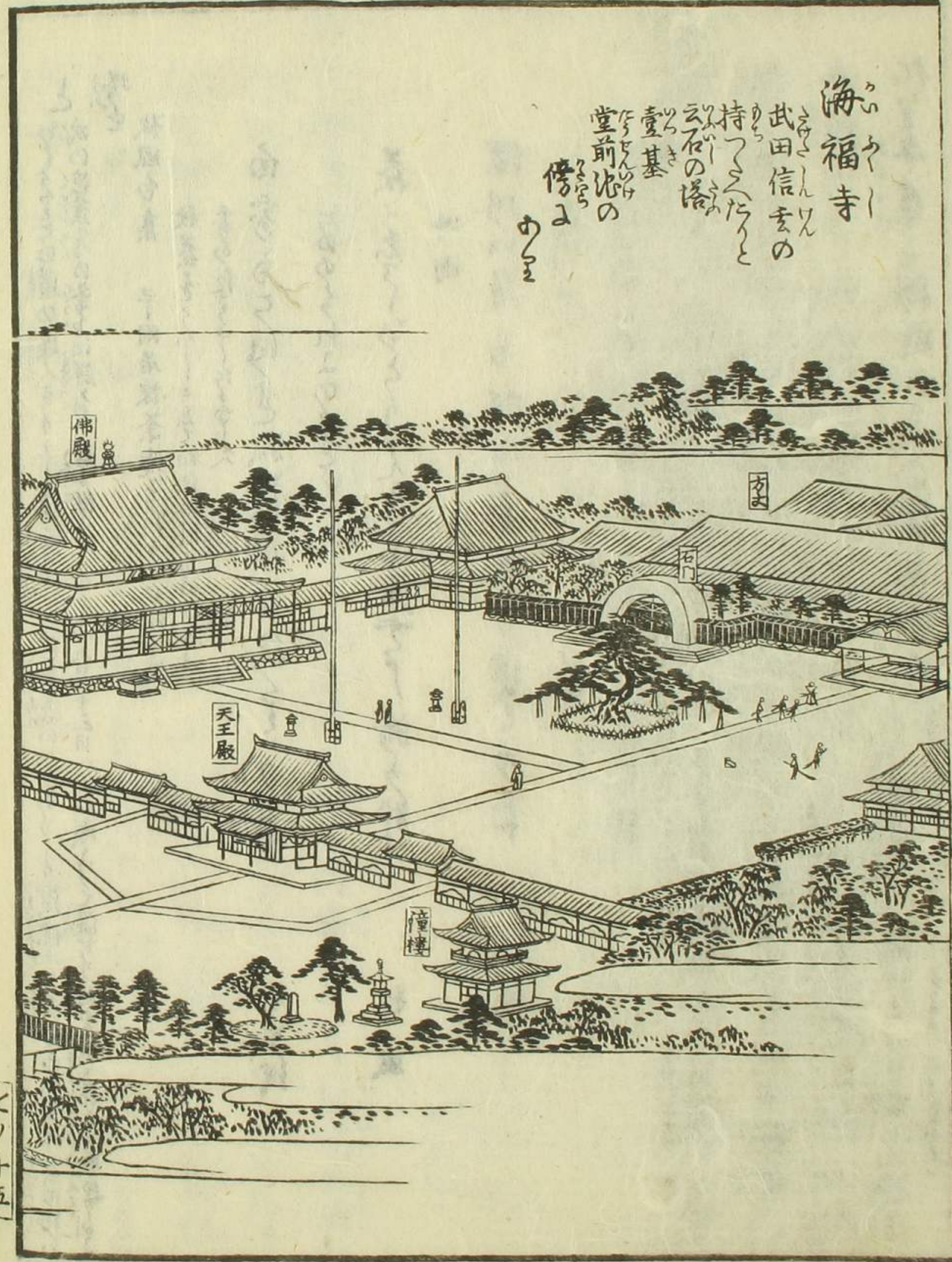
寺院ありて圃山の通遠院日義上人と号と中奥ハ覺成院日念上人

た至本尊は釋迦如來の像を安と ちの本尊ハ延山の月照師より日念上人授と

ありて當寺よりてまらるるなり



海福寺
 武田信玄の
 持つてきた
 石の塔
 臺基
 堂前池の
 傍に
 のり



祖師堂 本堂の左はありん 七面堂 同一堂前よりありて當寺の法守とあり此七面堂
相傳當寺の淨心院殿妙秀大師の菩提を吊りせありんり為し御建

立ありし精舎ありと當時淨心尼の小堀正一入道宗甫の妾ありて
寛永十八年辛巳 大樹 御誕生の頃正一入道の忠心を
補ふの一分は備んと春日の局は執り 御乳母とあり

大樹を育しなる故に淨心尼卒すの後も猶生前の勤勞を思召出
され萬治元年戌戌當寺境内若干の地を封し賜ひ又堂舎經
堂の料として大に負財を喜捨しあひ日義上人をして當寺尼山

たらしむ乃淨心尼の遺廟を建又香燭の料として同二年庚子寺
産を附せしむとあり 尚寺の境内に阿彌陀如來未開山の靈巖和尚たき
道本山靈巖寺 日一此は隣る淨土宗開東十八檀林の一室して宏社の
梵刹ありと奉尊の阿彌陀如來未開山の靈巖和尚たき

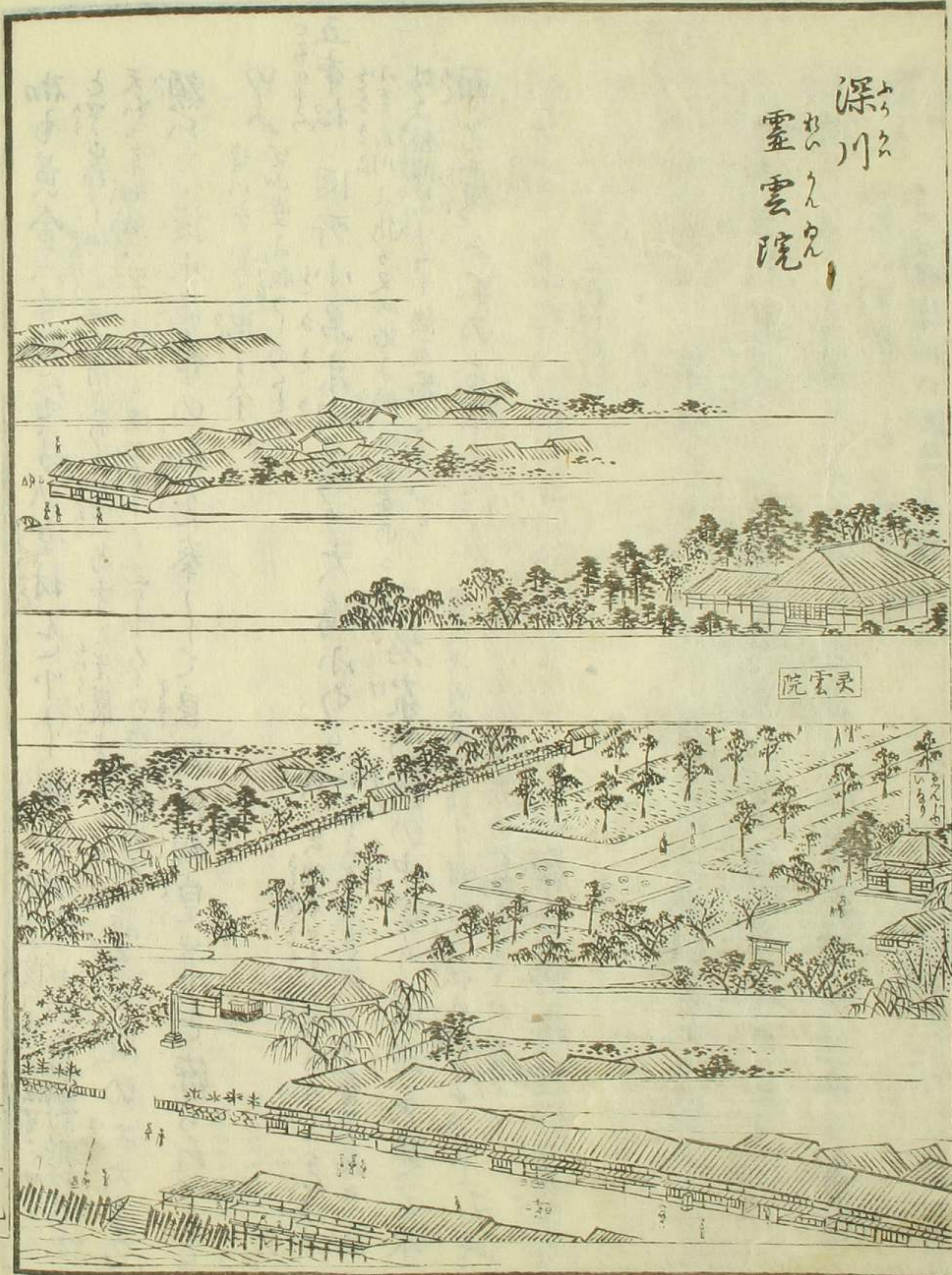
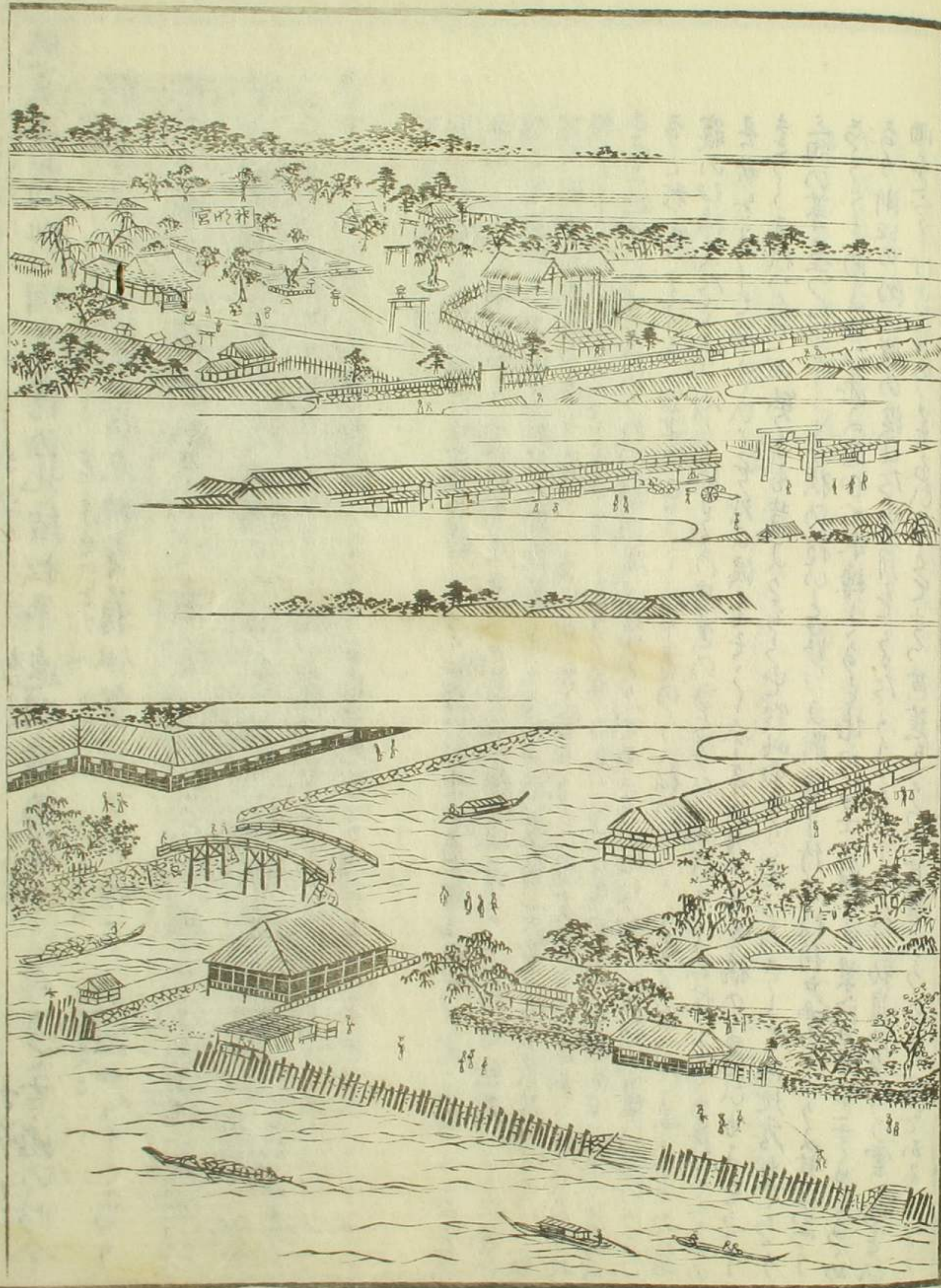
傳は姓の里見氏南條小糸の産あり十三郡同縣青龍寺の秀岩師の室に入利係と其性明敏
天狗の依負の人或は後列府中の秀姓の今川氏沼津淨土院の
法嗣ありと和尚開創の精舎檀園あり收養ありとありて依是を略せ

寺産を附せしむる寮舎僧坊堂を連ねて巍然たる正え坊う造立
せし銅像の地をその大江戸六地所の一負ありて慈門の内正面
對し毎歲四月朔日より同日より阿彌陀經千部讀誦修行あり

相傳寛永年間當寺開山靈巖和尚或日大江戸の東浦を顧て侍
者謂て云く我大蓋を此地に建む侍者の云く江潮浪高く鉢
盂底空し傘巨楹碩梁を架せん師笑云く俟夫日わらん於是師

化疏を筆し諸檀家をを勸勵して一簣毎二十念して施譜以て結縁する
らぬ小四輩競廉廣訂日あらとて陸地とあり 今靈巖嶋と稱する其地也 其地早く
成て梵刹を開創し靈巖寺と号せしとて於て淨土宗五十五石をあり

爾法幢盛し起て五百の義龍恒し蟠る然り河山和尚の世 尚寺の二世 松蓮社大尊



芭蕉庵舊址 同 橋の北結松平遠列候の庭中よりありて古池の形今

猶存なりとの延宝の末桃青將伊賀國より始り大江戸よりあり

秋風りあふ入後刺髪して素宣と改む又秋風子より芭蕉庵の

号譲請夫より後此地より号を結ひ泊船堂と号す

と云ふ江戸小田原町の奥牙子なり一頃の葉中たり後此葉をもて号す

号もあつて自水面より草履ひより古池の如くよりあり

芭蕉を名とす

菊の東籬より竹の北窓の君とあり牡丹の紅白の是非ありて世塵より

年地より水清なりされば花雪とありれ年より柳を此境よりと時芭蕉

風去芭蕉のふりやありひけん枚株をさすその葉茂りて庭をせしめ

萱の朝露もあつてありり人喰て草席の名とて奮闘友人よりと号す

根をさすありてありり年よりありり年よりありり年よりありり

と云ふ破れんとされりれ離の隣に池をりてありり道に人々に

ありと破れんとされりれ離の隣に池をりてありり道に人々に

寝のひ後よりありり人々のありり芭蕉のありりひとありり

去秋をとりて物ありりありりありりありりありりありり

まうとされりりありりありりありりありりありりありり

之間の茅屋つたありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

ありりありりありりありりありりありりありりありりありり

神明宮 月所森下所より猿江の泉養寺別當たり

天台宗東叡山 又馬とこの寺

芭蕉庵の記よりありりありりありりありりありりありり

芭蕉庵の記よりありりありりありりありりありりありり

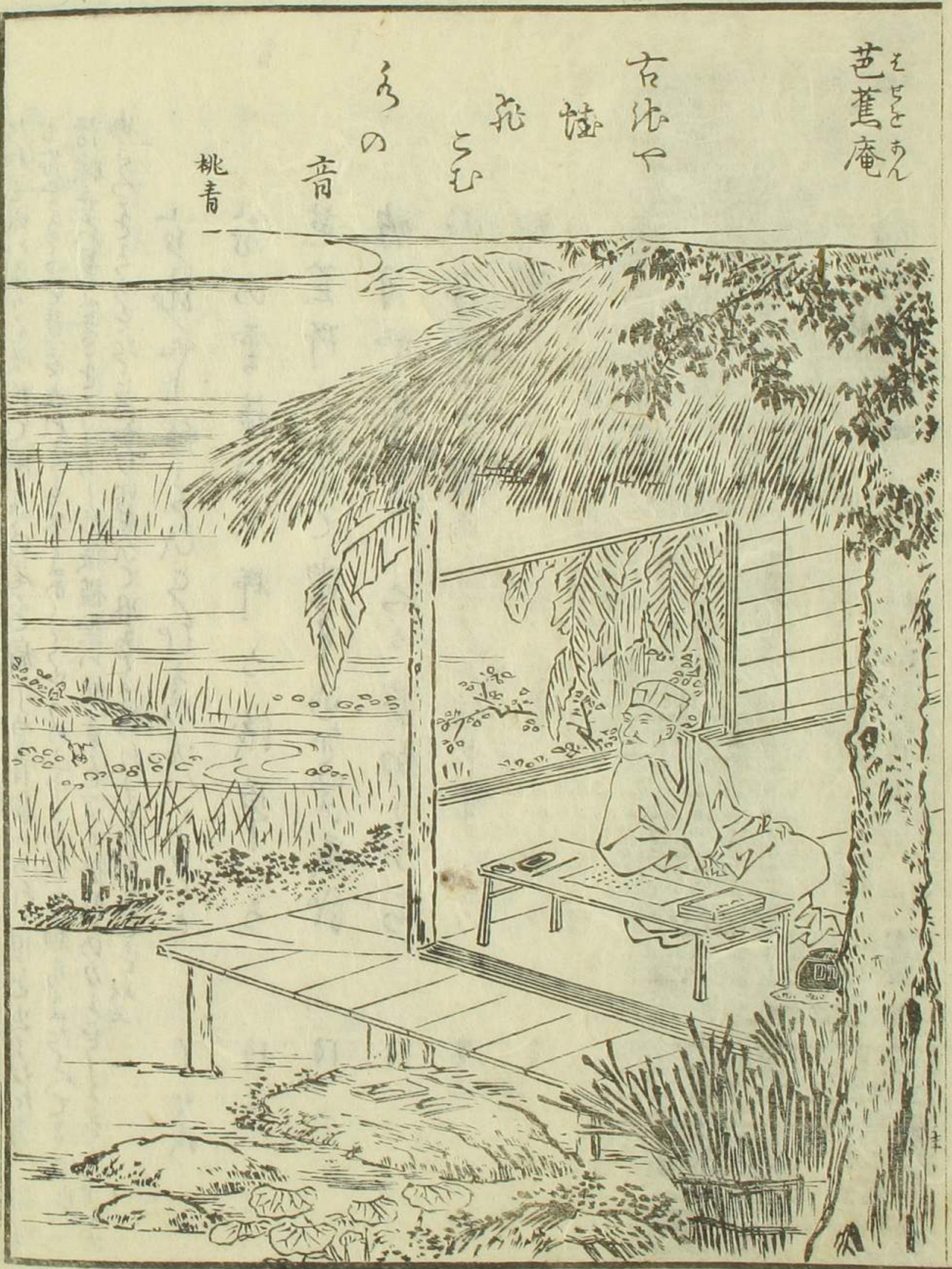
芭蕉庵

古比ヤ

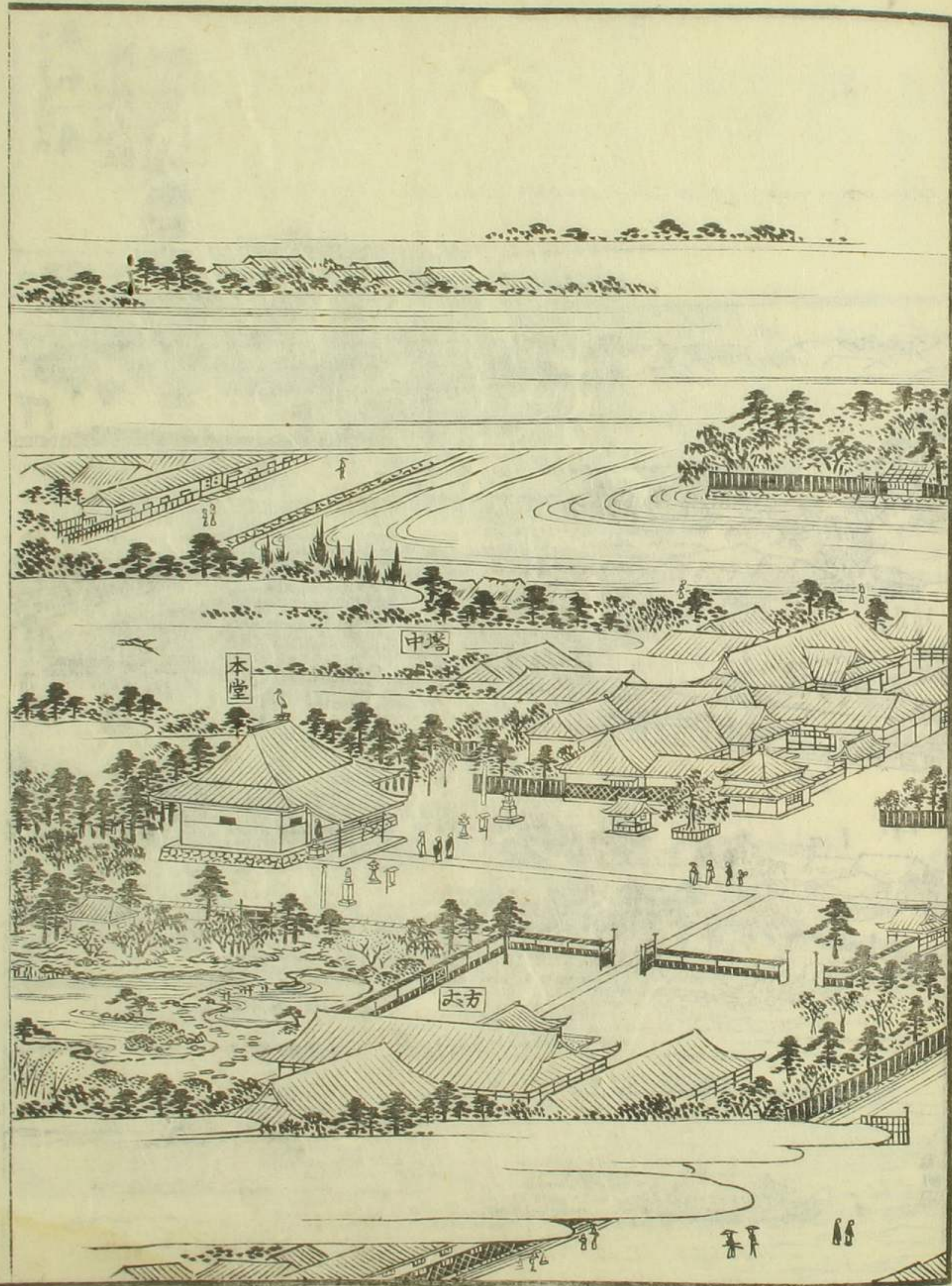
花 陸

の

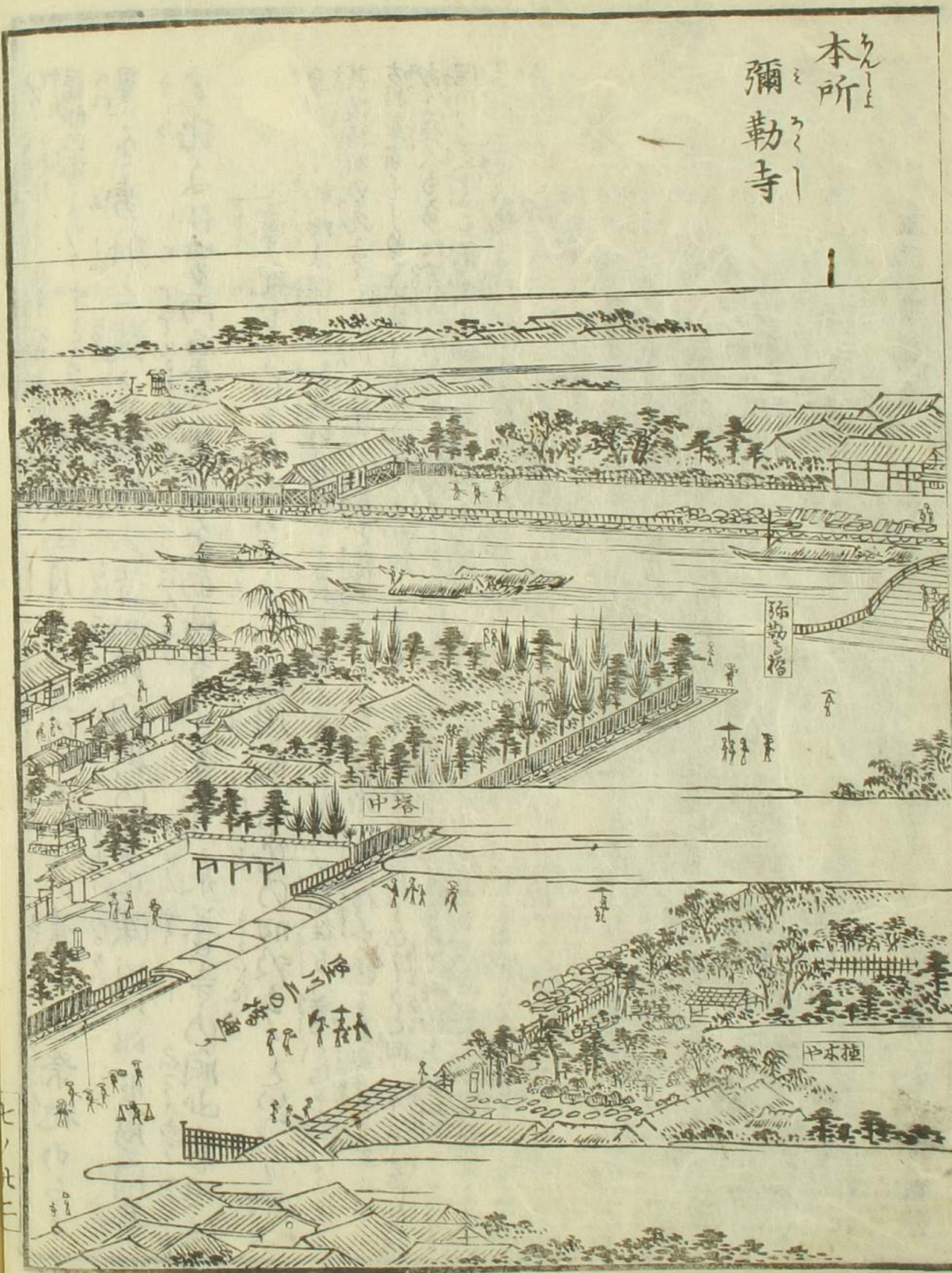
音 桃青

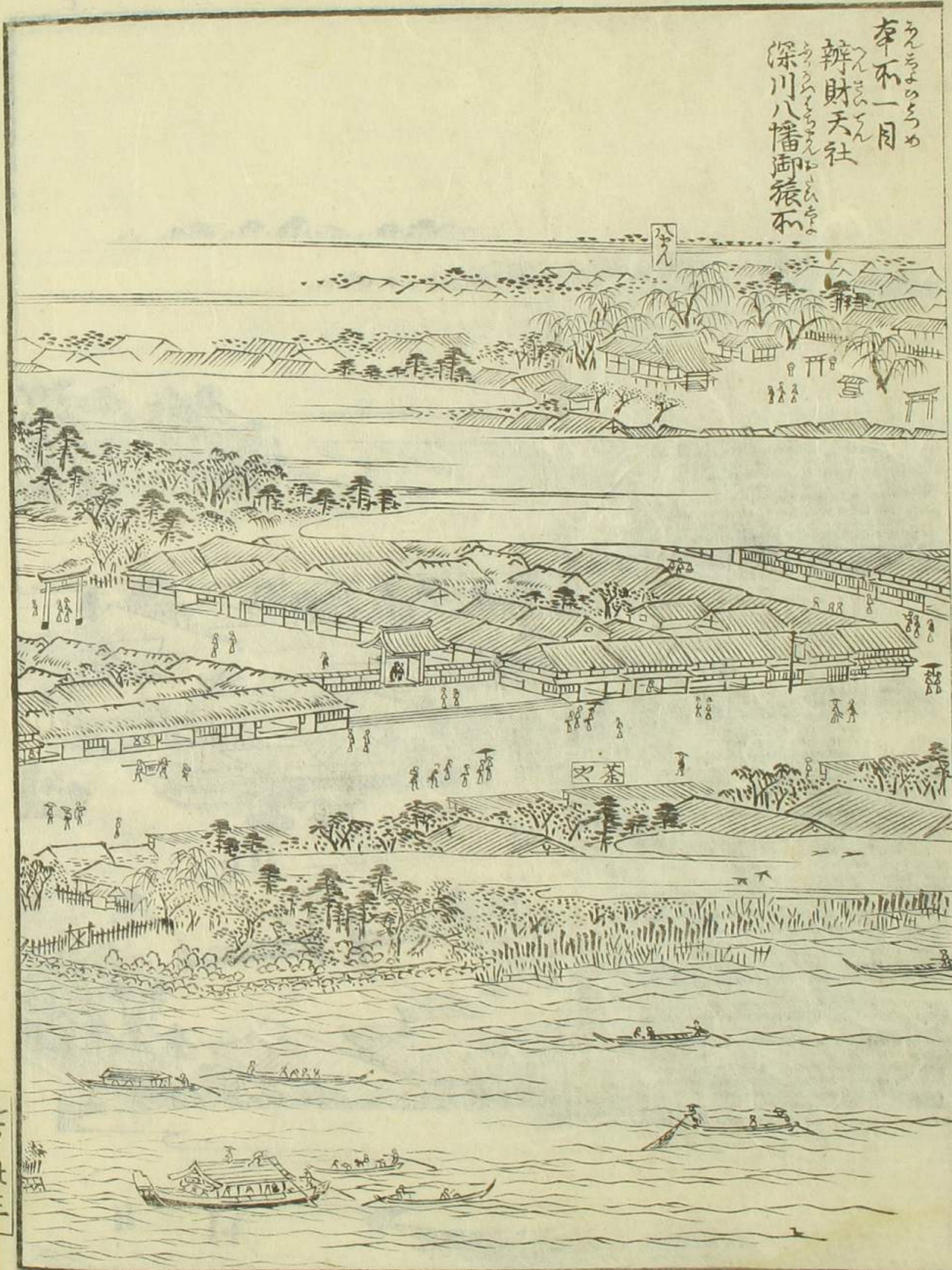
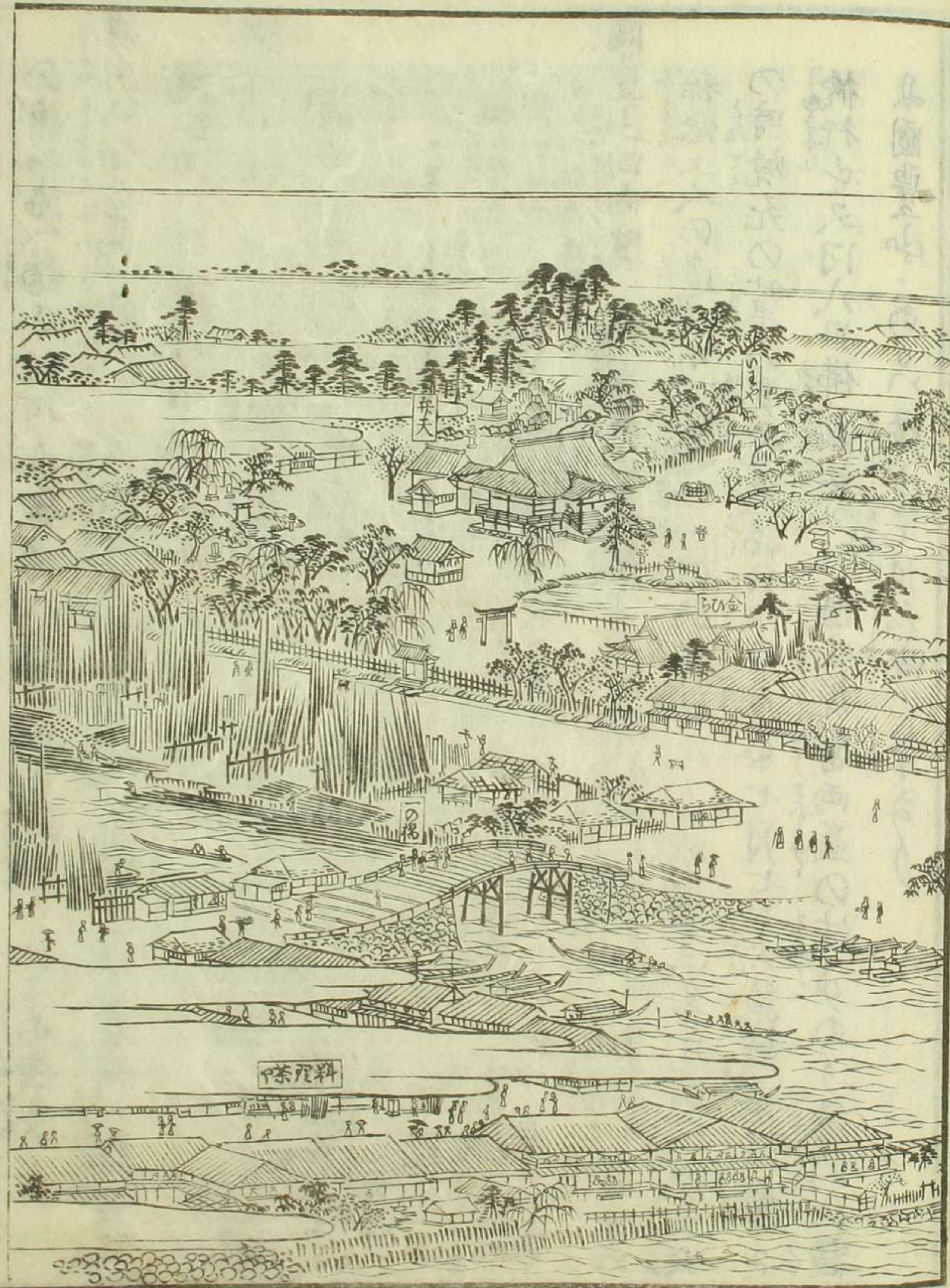


萬徳山彌勒寺 日所二丁のまりのを隔て弥勒寺橋の北詰のあり真言新
 義の禰頭江戸四箇寺の一室あり奉尊の薬師如來 傳記失たりとて其ま
 由と中興山双脊鍍上人と号と總門の額に弥勒寺と書せり朝鮮
 國雪月堂の筆跡あり當寺旧柵原の地ありとて天和二年回祿
 神郡の地ありとて今南今の井上郡 毎歳正月と九月の十三日もの舊式の奈紀ありと
 是を歩射と號く相傳ふ昔此地用割の里正深川八郎右衛門某
 宅地より伊努兩皇太神宮を勧請ありたり泉養寺の岡山秀頼法
 印とて奉祀せりとの此此の深川氏宅地の回祿ありとてり
 泉養寺記述に深川の起立のゆゑを載其畧に云く深川の地往古の廣くたる原野ありと
 其頃移別の名あり深川八郎右衛門某と稱する人ありとの地は后伊と稱する慶長元年丙申
 方將軍ありとて此地をなすてたすひ此八郎右衛門を向せたまひりて同くけし平右衛門の
 初は住人もある荒廢の地あり地名もあらざりて後らに此地を岡割と稱すり苗字
 深川の文字を此地に唱へしとて此地 歳命ありり深川の地名發との公年をの
 り孫の世に地に住して里正たりる室曆の頃故あり其後漸にせりされと泉養寺の八郎右衛門
 香花院あり今も深川氏累世の遺蹟存せり日所村新田の東は八郎右衛門新田と稱する耕
 地あり此地用發せり故の名あり今土俗に之を其地を四丁村とてり
 岡の泉養寺の地は重辨紅花の蓮あり花形牡丹の髪髻たり故に室花の附をてり
 同く此地の泉養寺の地は重辨紅花の蓮あり花形牡丹の髪髻たり故に室花の附をてり



本所
彌勒寺

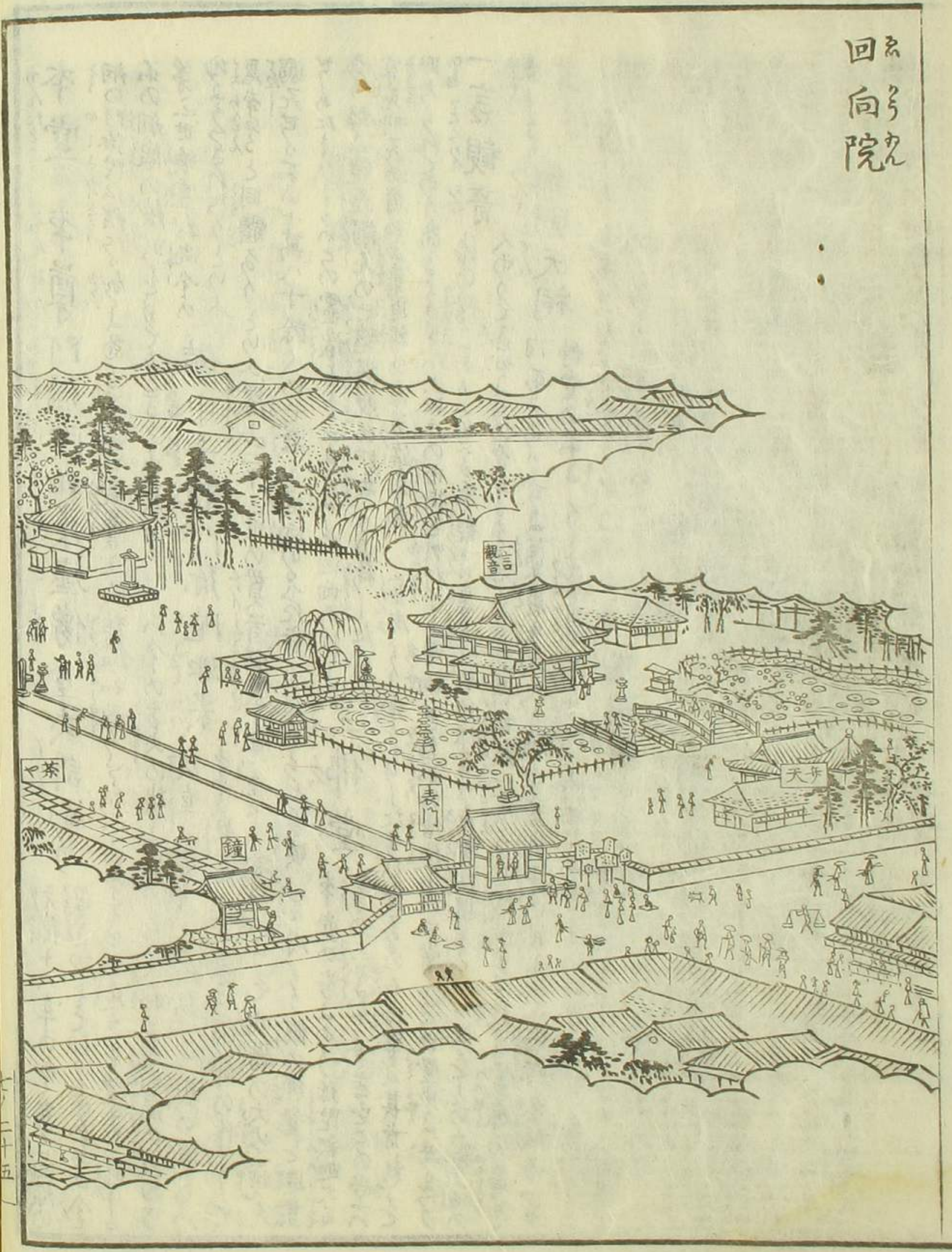




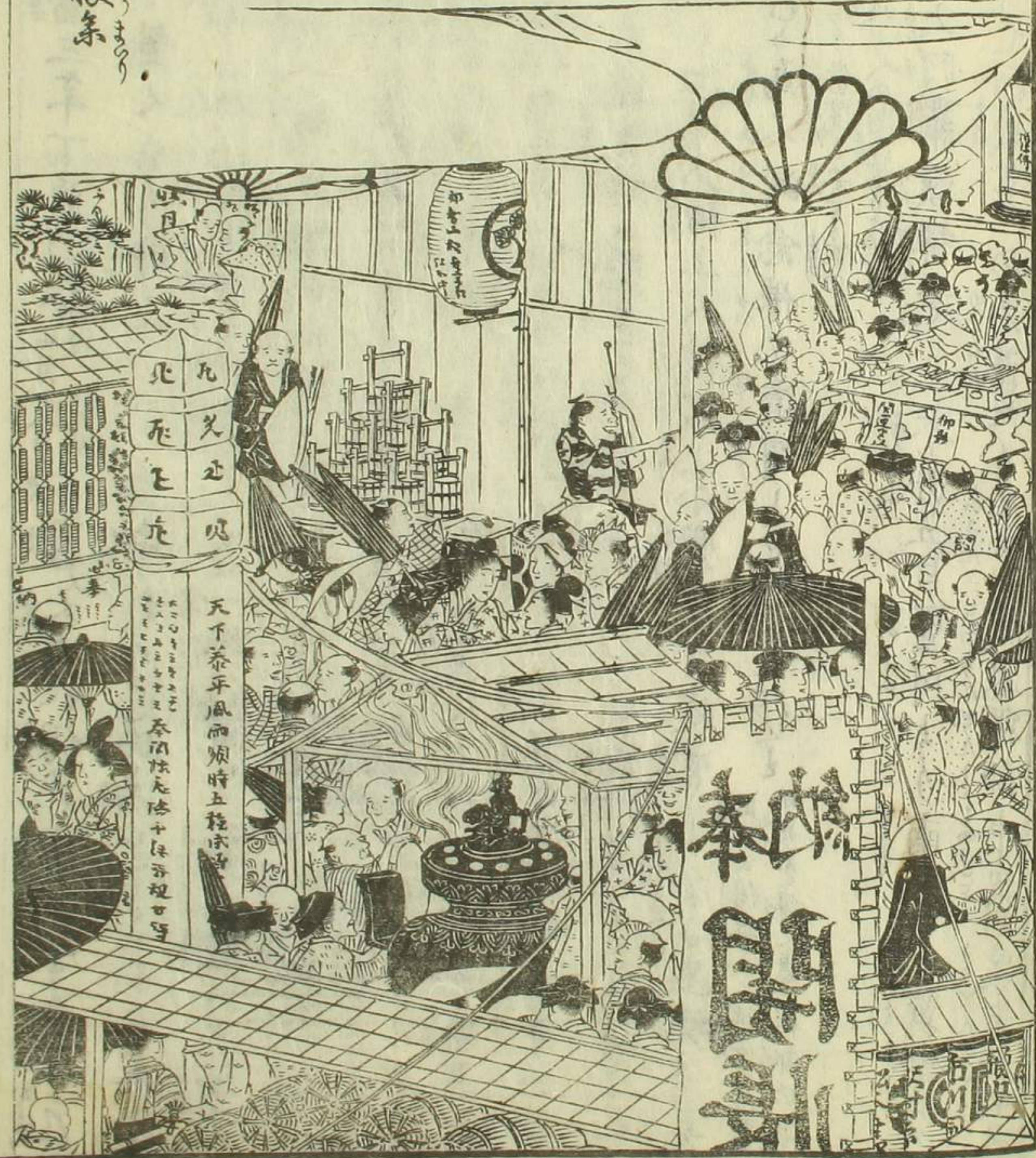
不見烟中寺
 但聞烟外鐘
 江城秋色遠
 落日隱高峯
 白石



回
 向
 院



日向院帳系



諸國の聖佛聖
神等結縁のた
大に戸よちく
啓合祀せんと
欲るりの多し
尚院に於て
結せしむ後方
より傳りてき
此のる故
殊に
糸請
多し



相傳明曆三年丁酉の春正月十八日大江戸大に仍く焼死する者凡

十萬八千餘人あり時よ台命ありて此地をト方六十

許歩の地よ件の焼死骸を埋藏一上一堆の塚を築き號けつ漏澤

園と唱ふ乃亡魂追福の爲増上寺第二十三世貴屋大和尚一一

字の梵刹を創基一一めらる當寺是あり昔の諸宗山を縁寺といふこと

諸宗の僧を集め一七日の間塚の前一一於千部の経を讀誦一一

大法會後行ありされとも住持あり一一其頃小石川智香寺の信

譽自心上人道光世一一隱居あり一一當寺一一移住一一め第二世よ

閑山と稱一一たりの依上人彼塚上小堂宇を建營一一長一一幽魂の冥

福を助むる為不斷念佛の道場とせら一一た一一

天息山五百大阿羅漢禪寺一一本所五目堅川より南一一あり黃檗流の

禪林一一河東第一の名藍たり閑山の熾眼禪師中興一一象先和尚又



依に泉鏡寺の依一一蓮花の
生するところの蓮花の
重辨紅花一一と花形
牡丹一一髪髻たり故よ
奇観とを寛政
九年の晩夏
この花を
發一一
今一一
至り
新一一
去り

猿江

摩利支天祠

靈驗炳然
諸人常乞
未由拾送
名不金



松雲禪師を以爾基の大祖と稱す

佛殿本尊釋迦牟尼佛拈華像 脇士 文殊
普賢 各高八尺 阿難迦葉 各高九尺 左右の階壇小列する所の五百阿羅漢

の像の各等身よして共小松雲禪師彫刻する処あり

額 本尊の
黄檗隠元を
人の筆あり

萬法書

又六めお友傳深定室在祇園瓦地
びる屋者現線跡影好第石檜烟雲

額 同堂内
の正面
は掲る美葉
即非の筆
あり

嶺閣曙

帷吹光

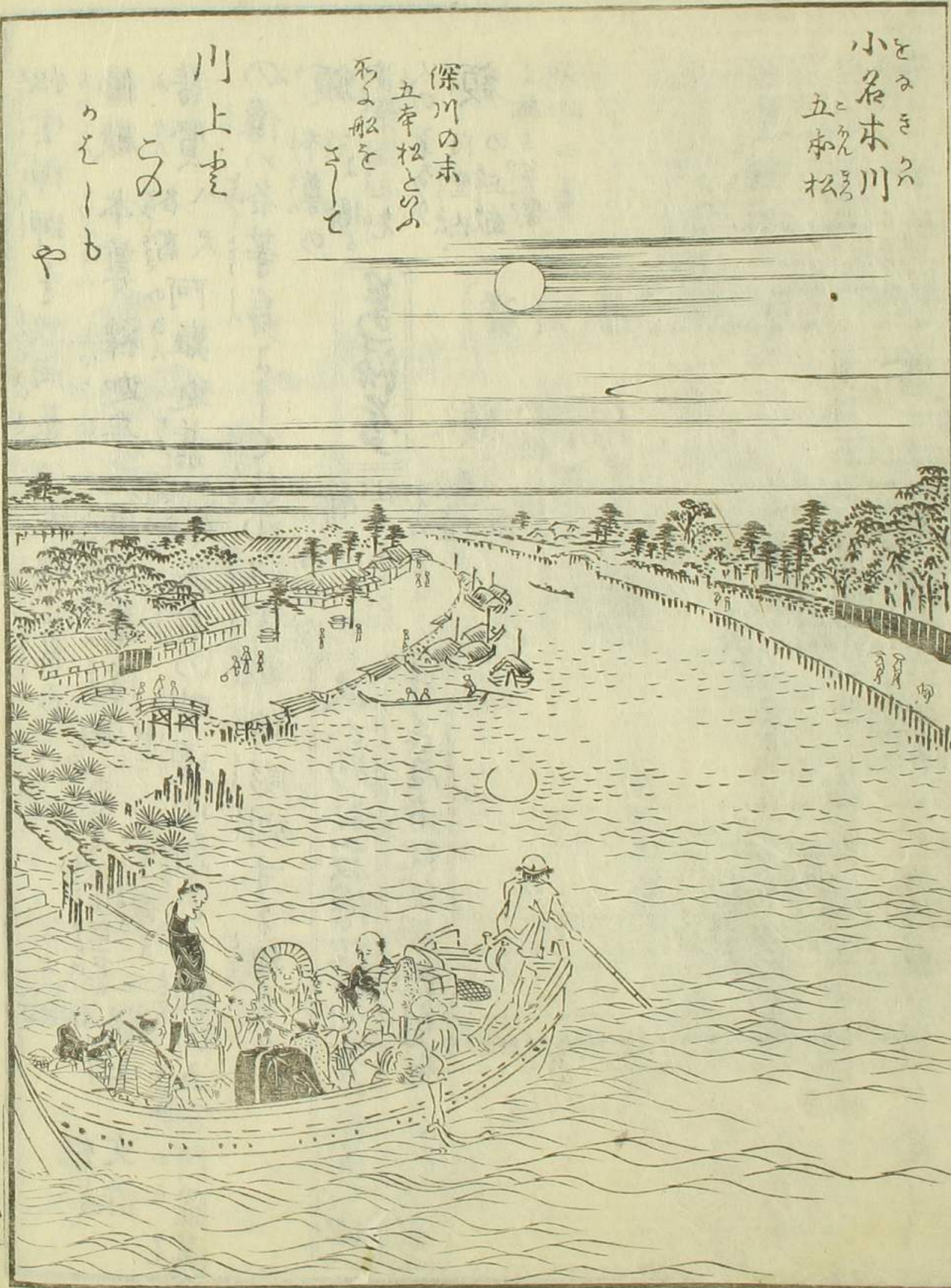
五百羅漢造立之末由

松雲禪師の京兆の人寛雄よりてとて正信を具す

實文九年己酉 十二歳の瑞龍精舎小入て鐵眼禪師
隨ひ薙髮して僧とある後游方の懐あまより師の許を辭し



月の
友
芭蕉



とみさうの
小名木川
五本松

深川の末
五本松との
舟を
こいで

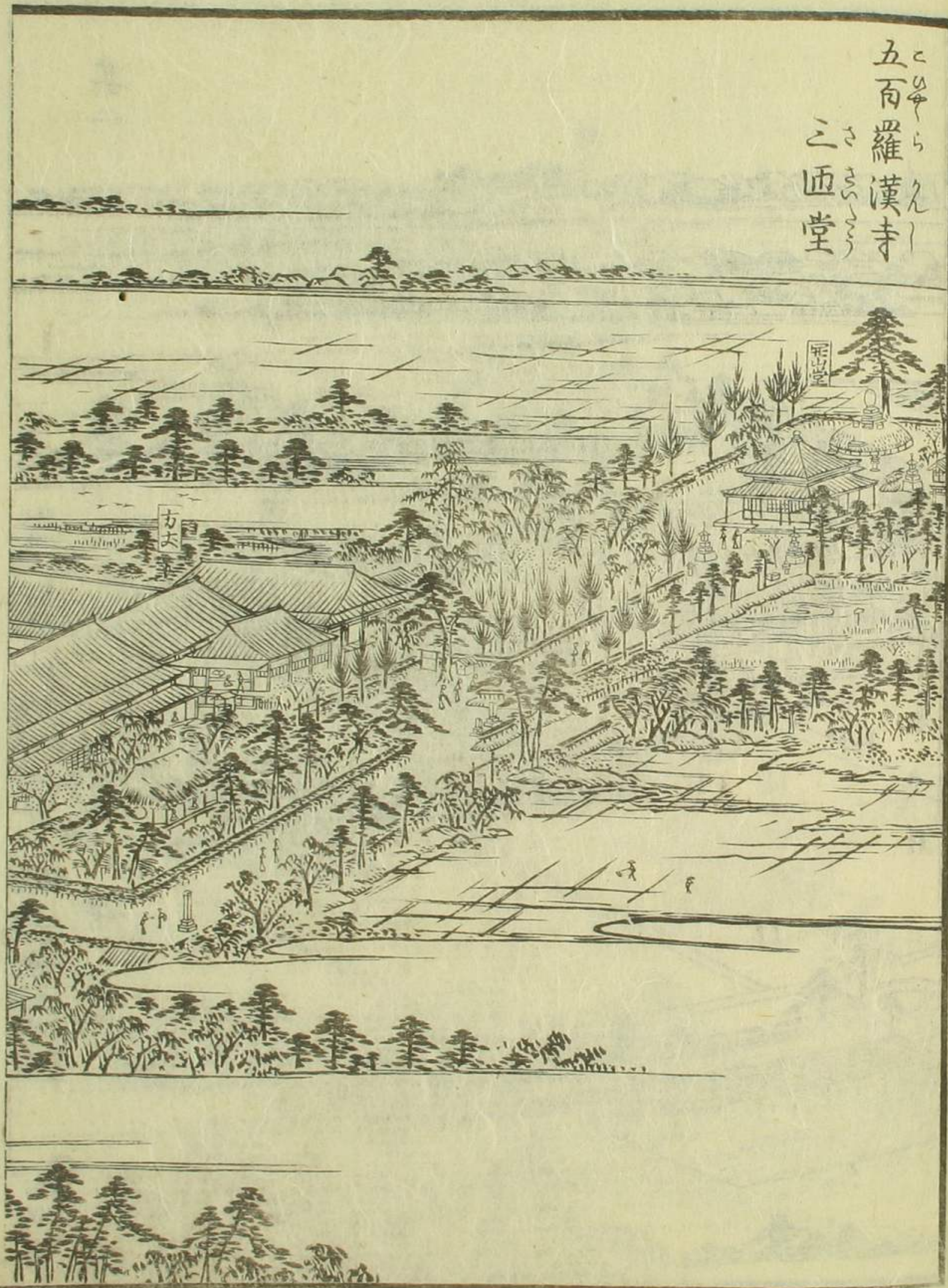
川上を

さ

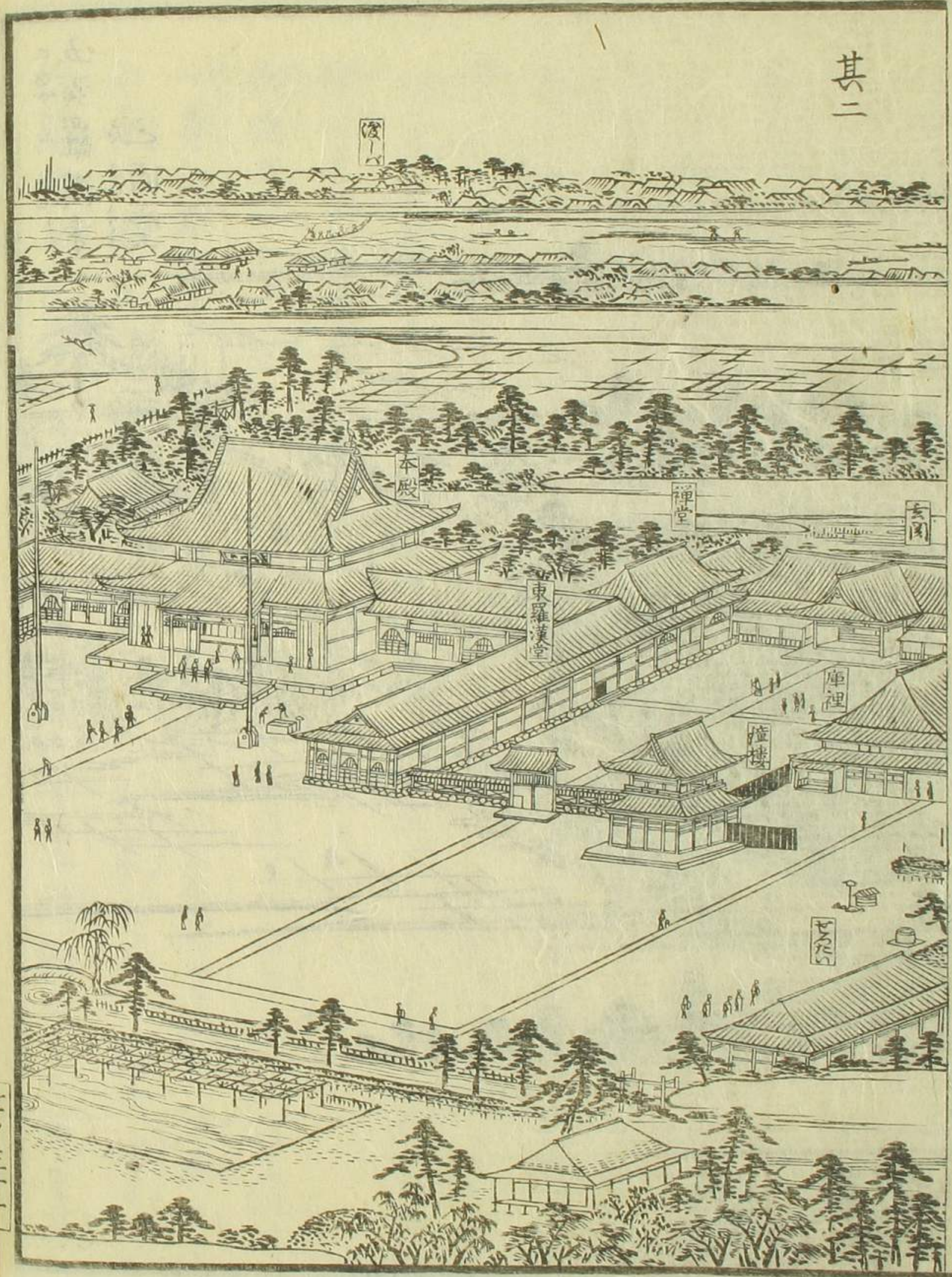
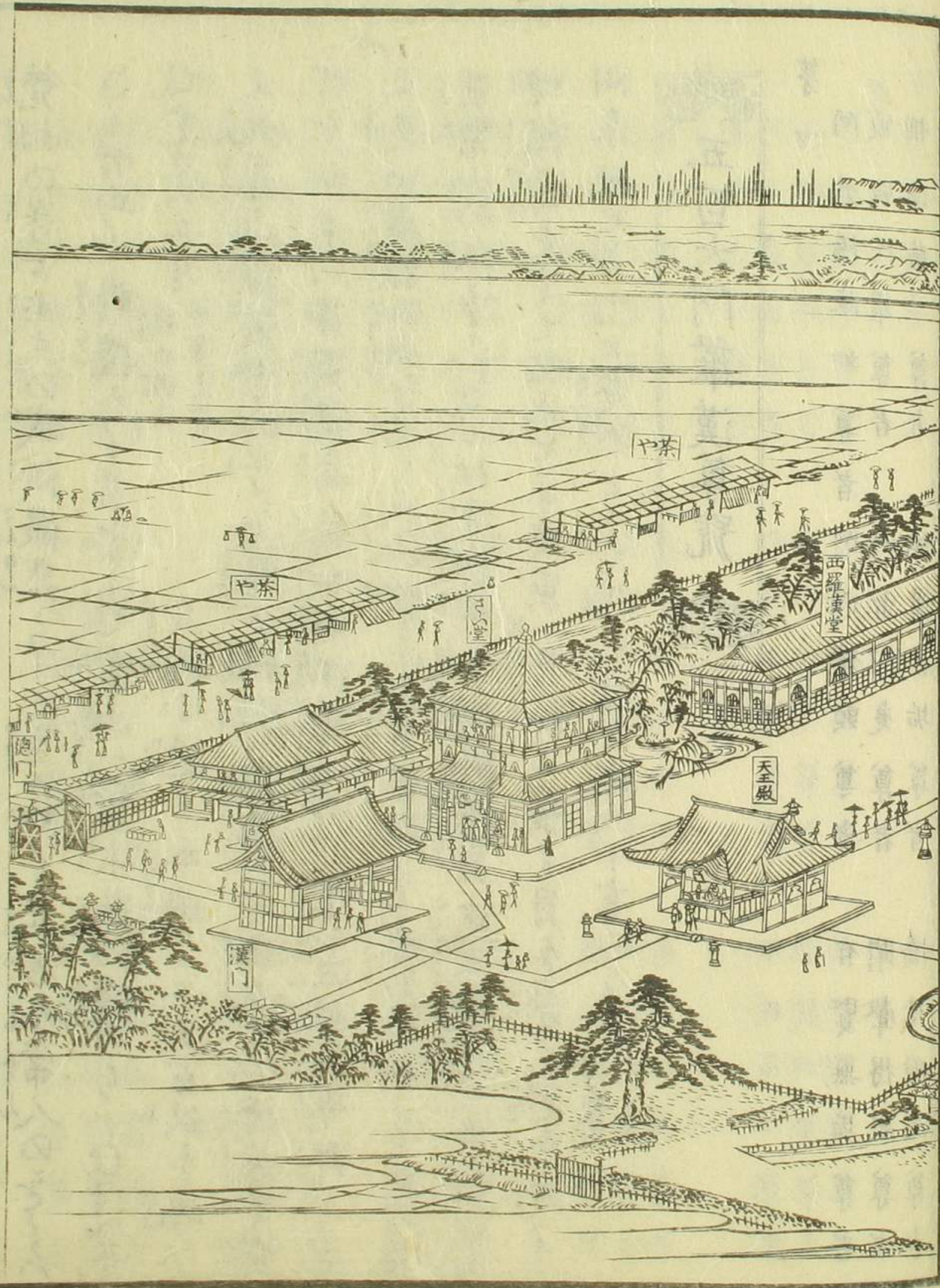
うも

や

五百羅漢寺
三廂堂

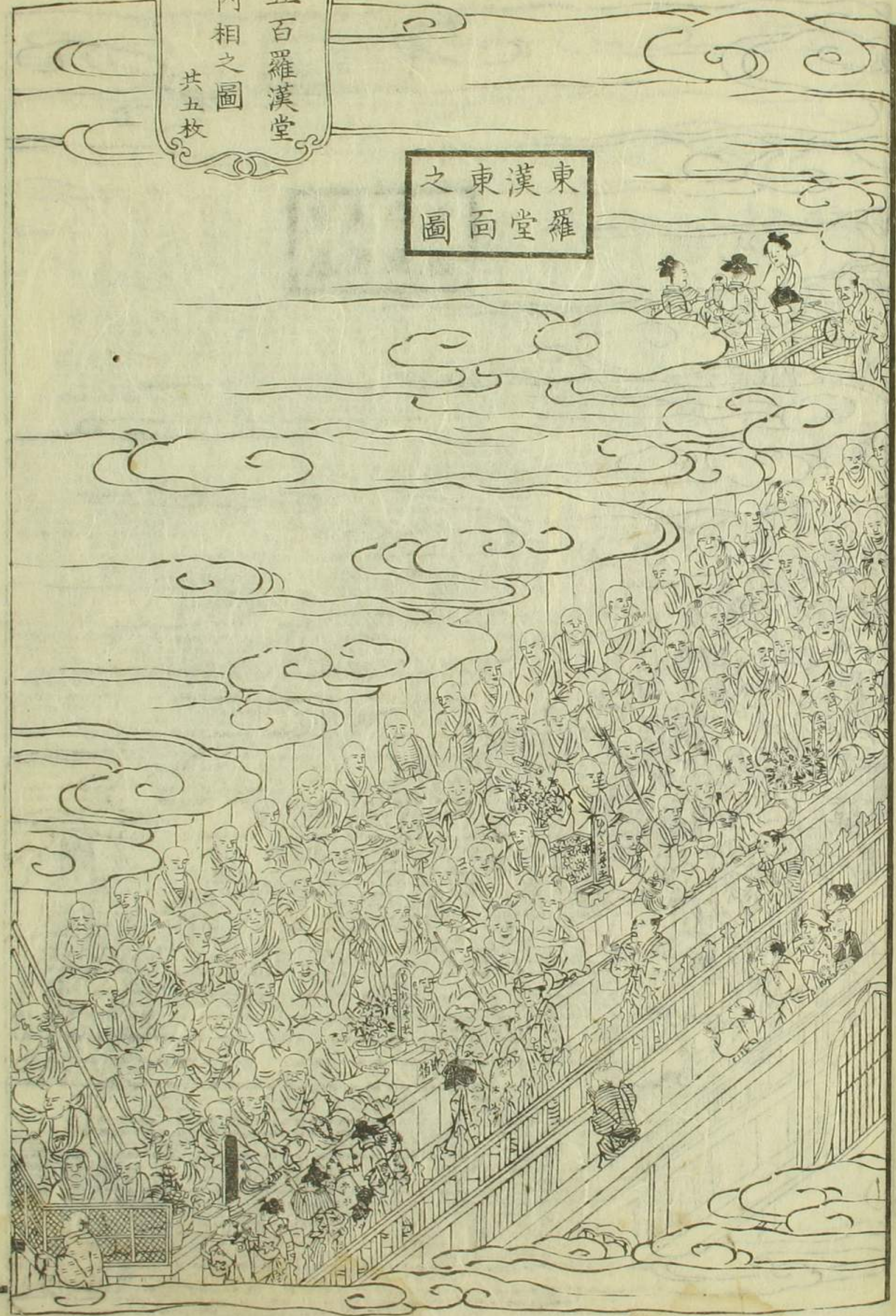


海西小瓢歴一豊前國羅漢寺小至り唐土天台山の逆流並に賢
 順とつる二僧一夜に造立せしといふ五百聖者の石像を瞻禮し
 恭敬日く小厚く其後溜り五百羅漢の像を手彫せんとするの意
 あり歸省の日鐵眼禪師果して其命あるを以て遂に貞享年間江戸
 小末り元禄辛未始て淺草寺の境内壽松院に就て假屋を假け
 衆人をとりめ羅漢の本像を彫刻せ弘福寺の鐵牛和尚衣資を喜
 捨一尊を刺すといふとも時至りて終あるを微くこころ
 歲月を歴たるを然る小同壬申の年大倉前一十六負の道俗結盟
 輔佐を癸酉孟春に至り五十尊成甲戌三月忝も
 御圓母桂昌一位尼公金を賜て佛像造立の次資とするのみ此時
 十尊成彫當を去るありしより縁化響の愈々如く施財日く
 小多く竟に二十餘霜を経て完く本尊丈六の釋迦佛及ひ
 阿羅漢等とて五百二十有餘餘の佛像縹緲として現れ其

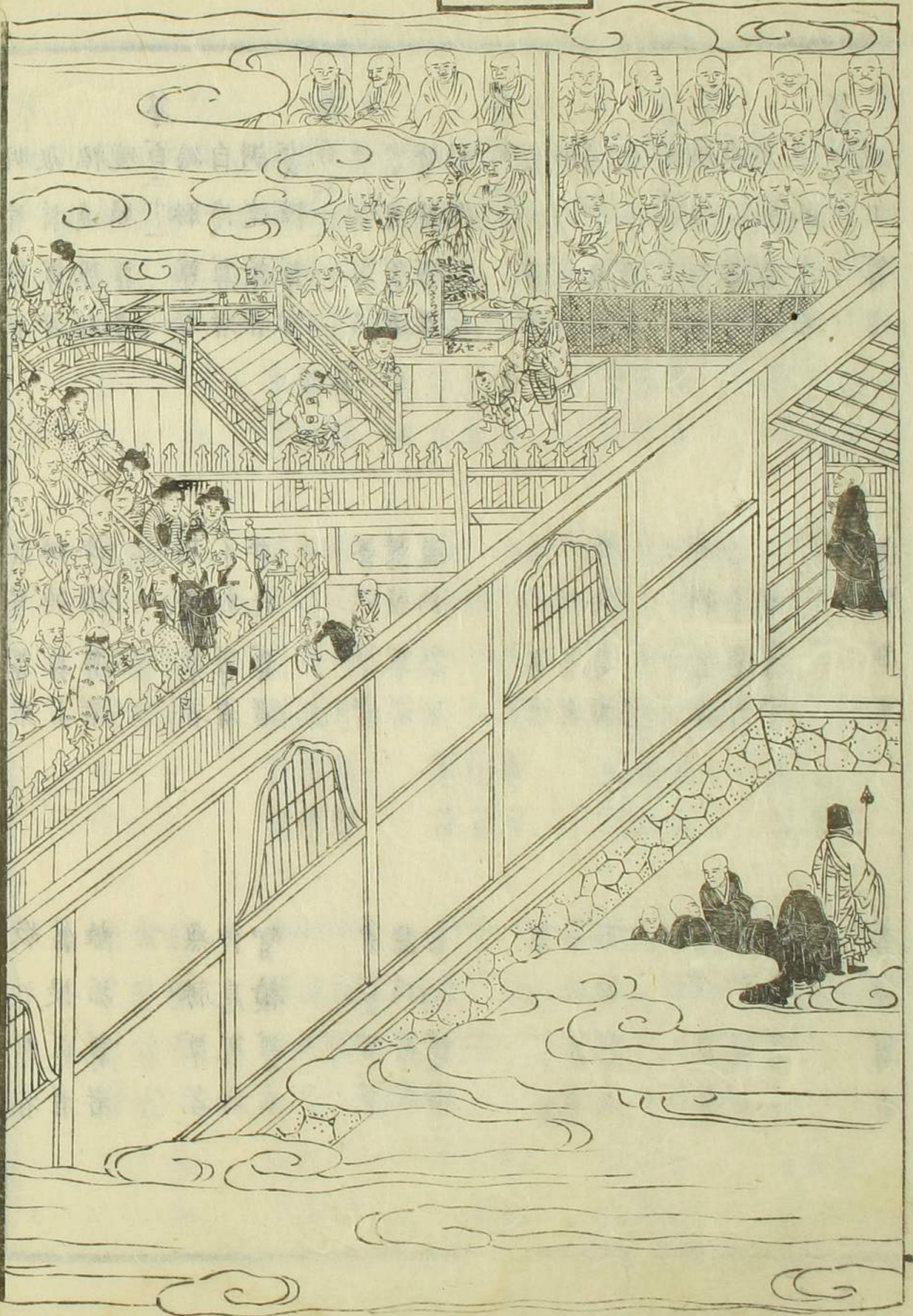


五百羅漢堂
內相之圖
共五枚

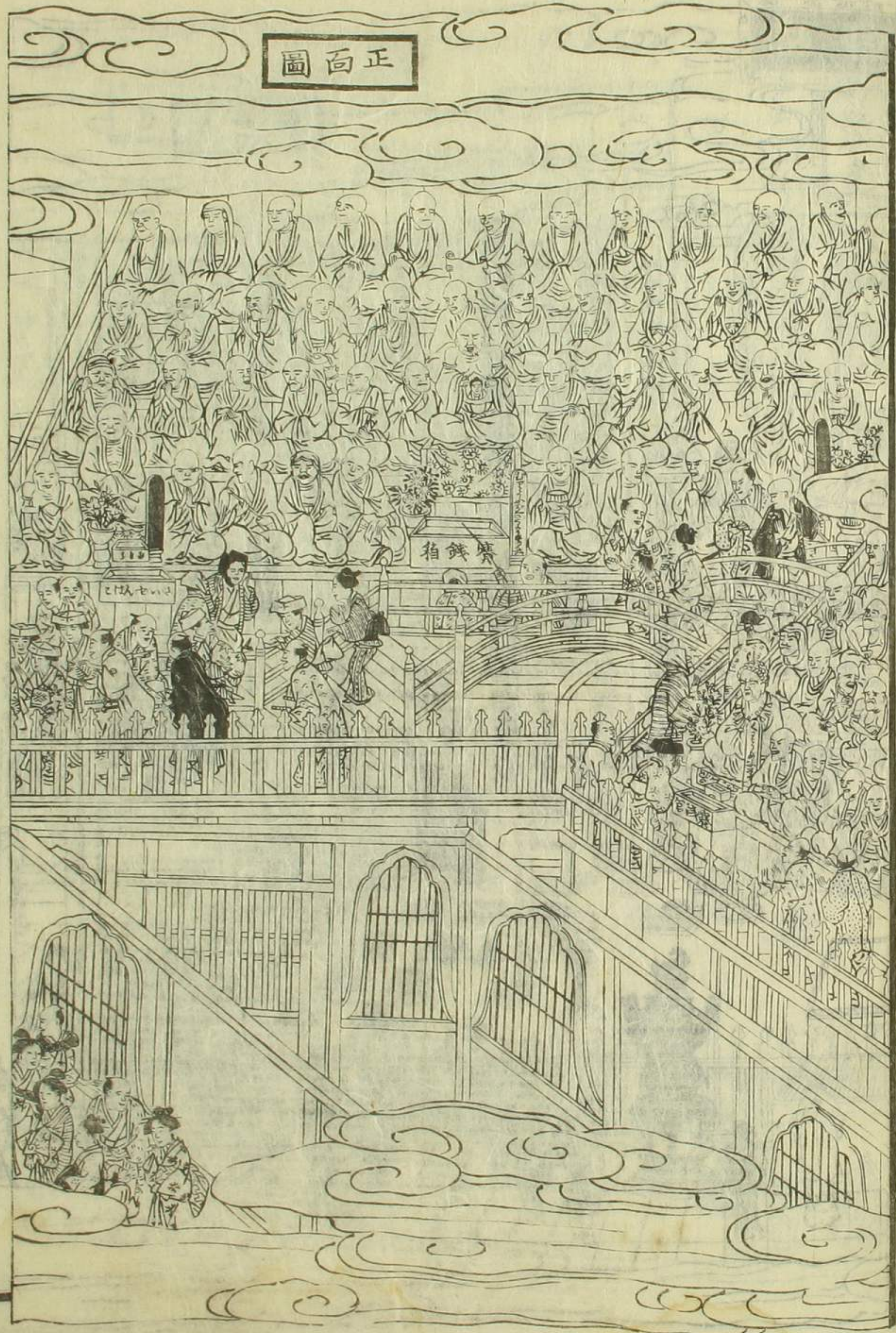
東漢東
羅堂面
之圖



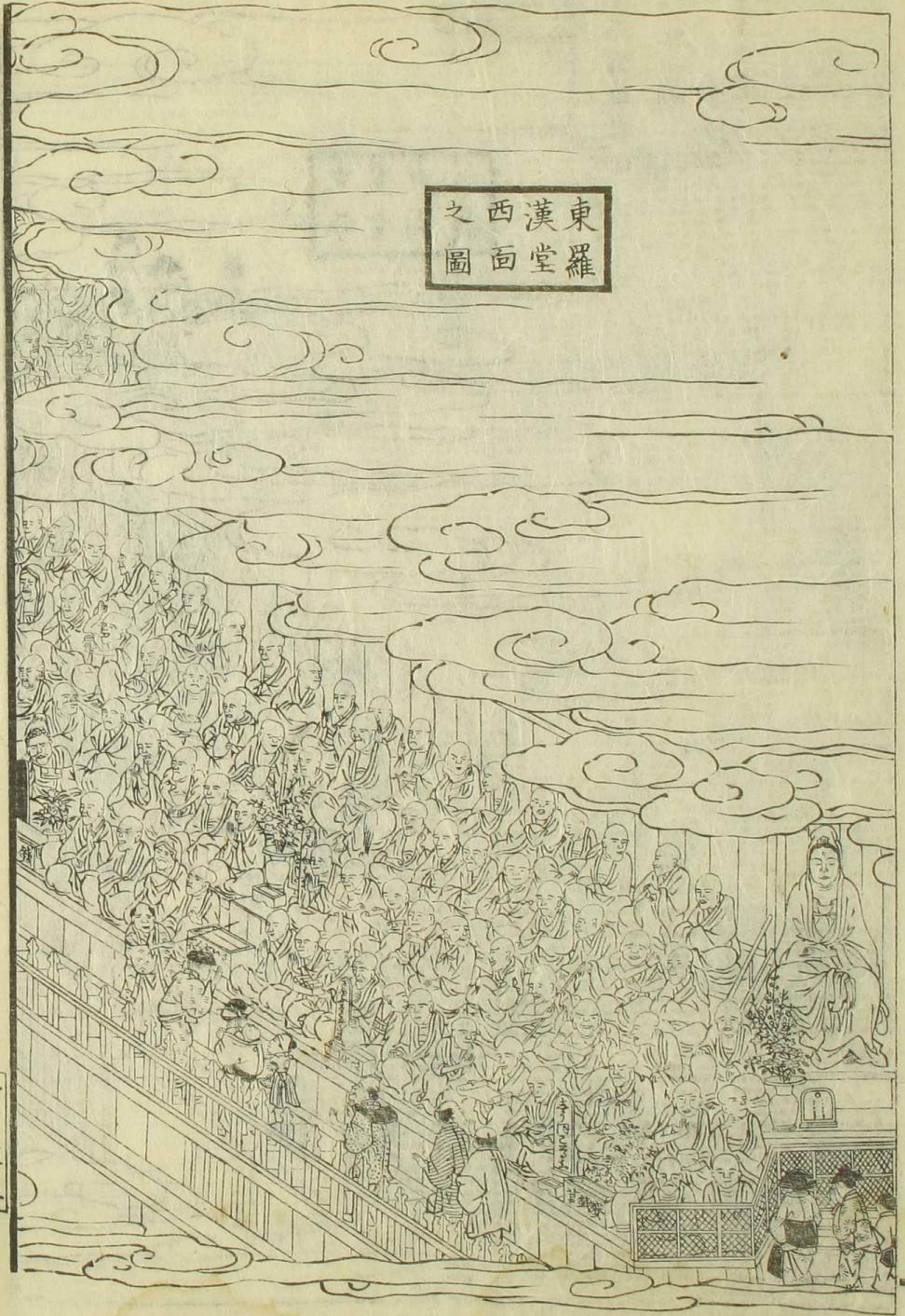
正面圖



正百圖



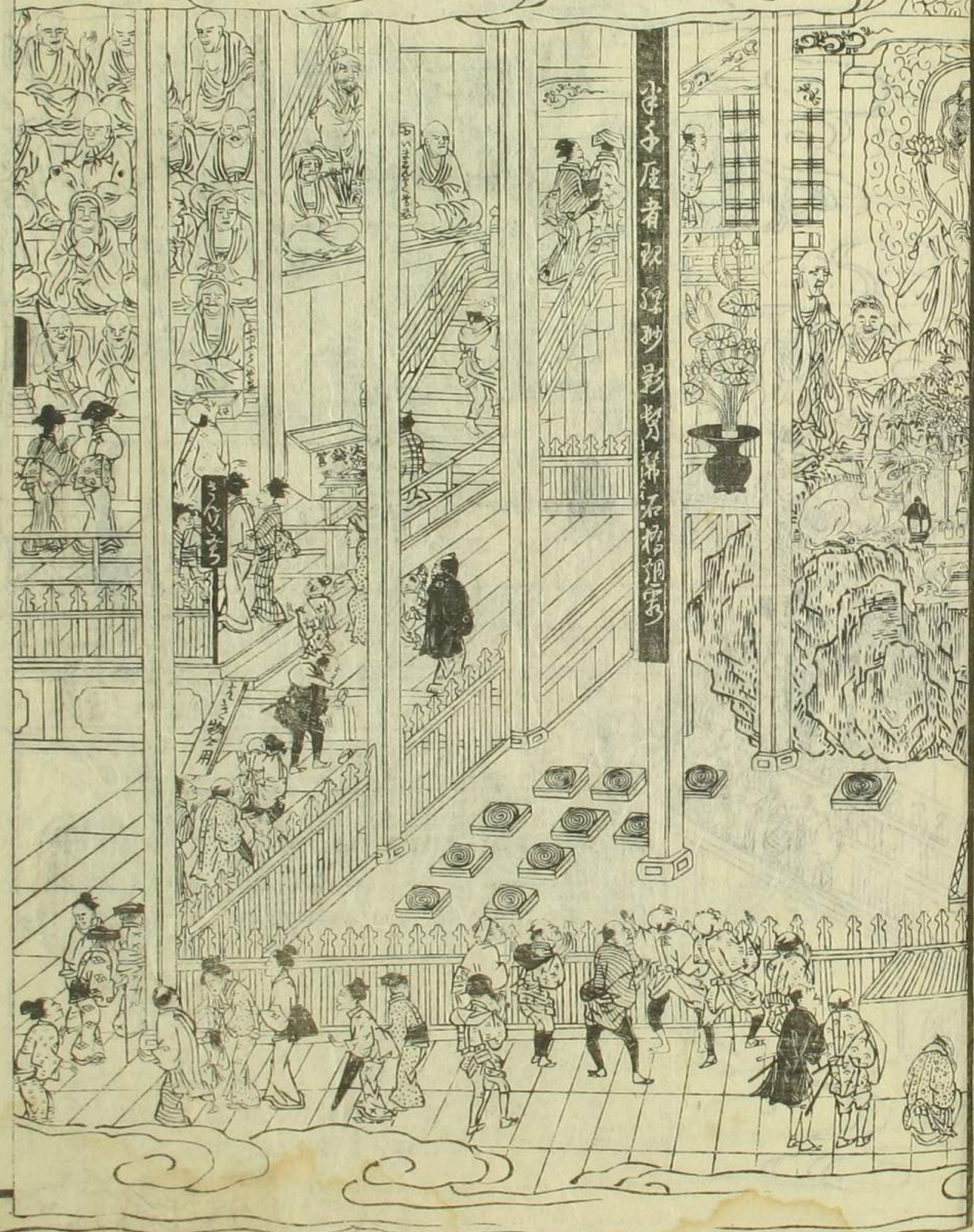
東漢西羅堂面之圖



正圖

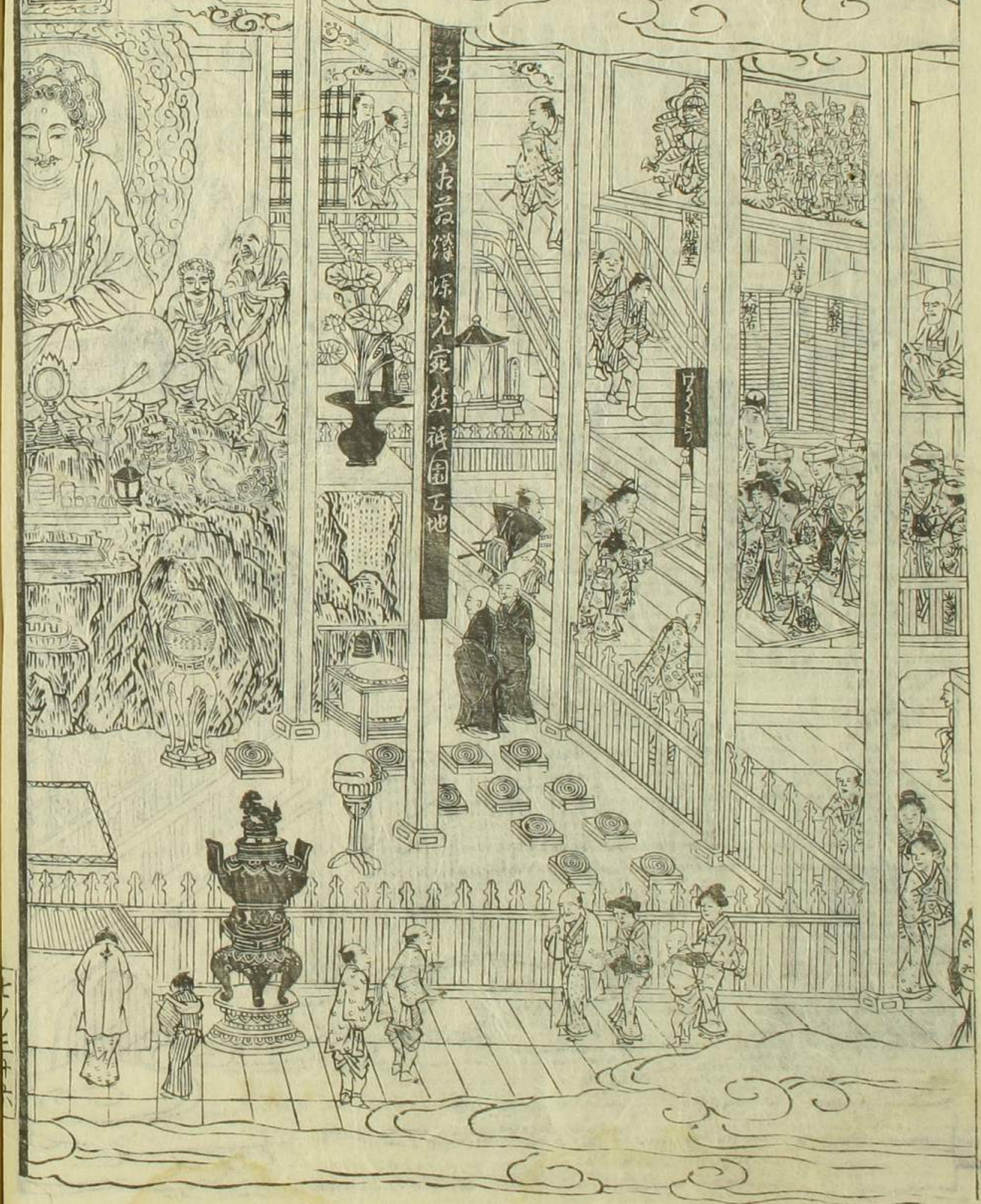
正中尊之圖

嶺

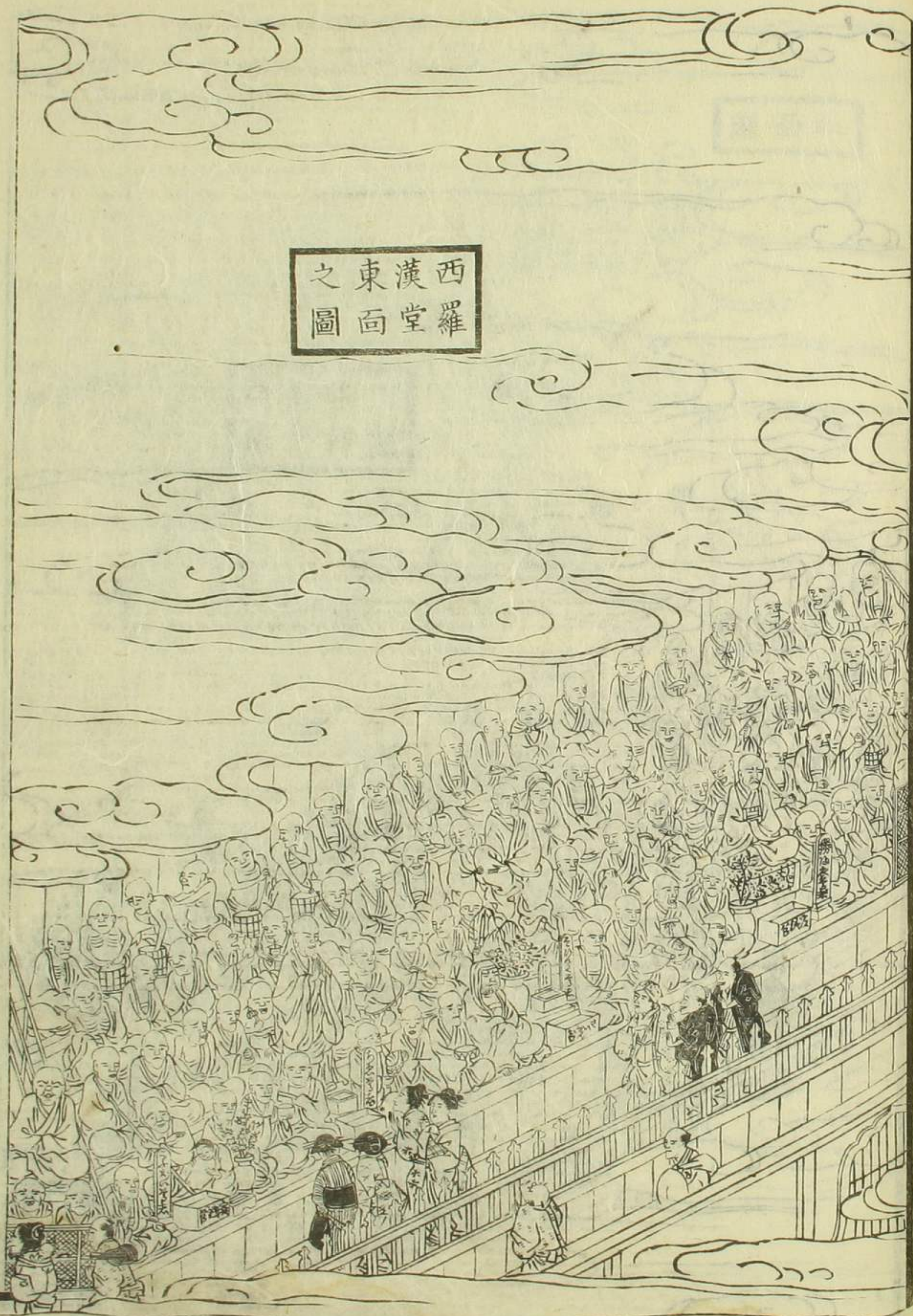


諸閣

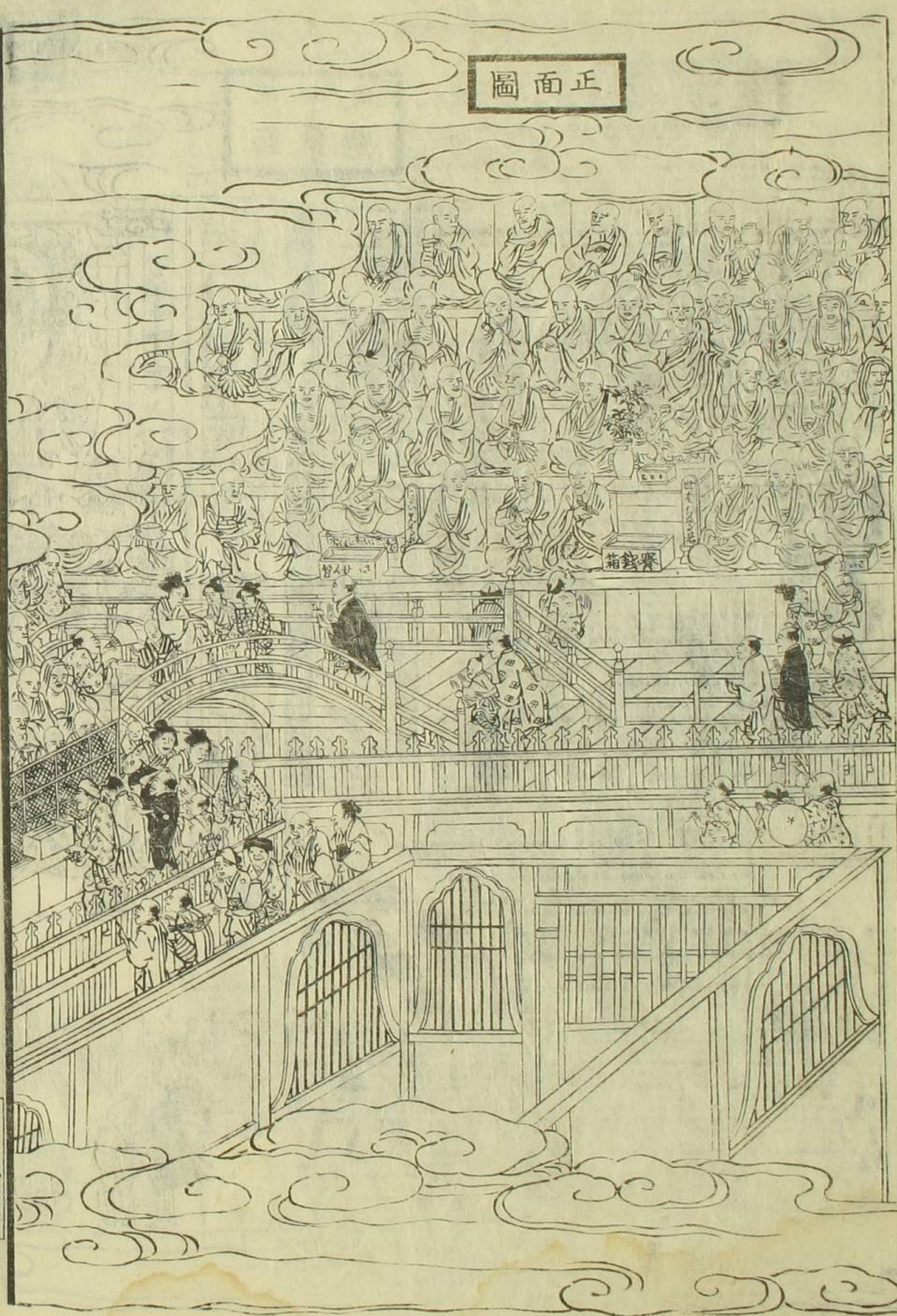
正圖



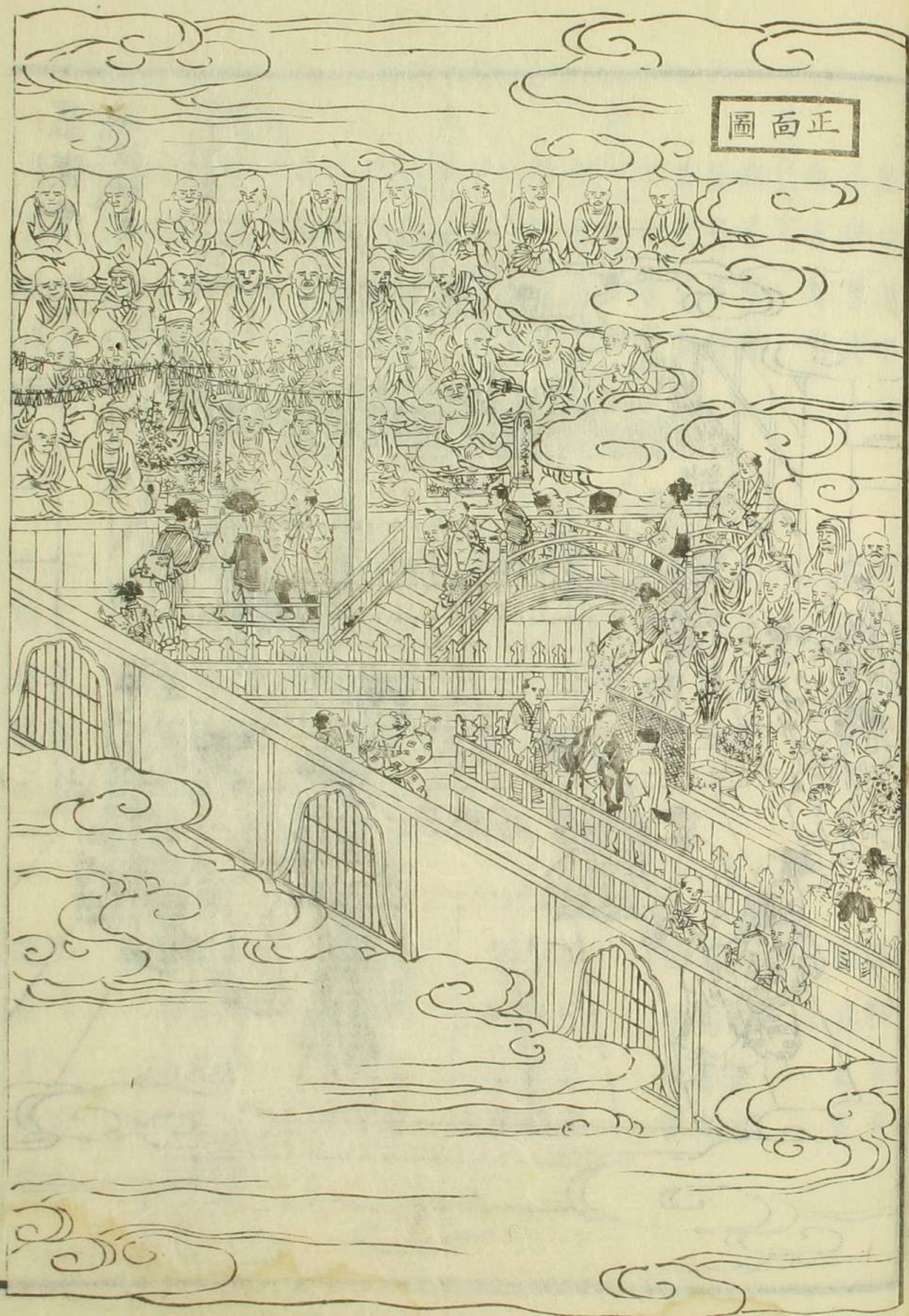
西漢東之
羅堂面圖



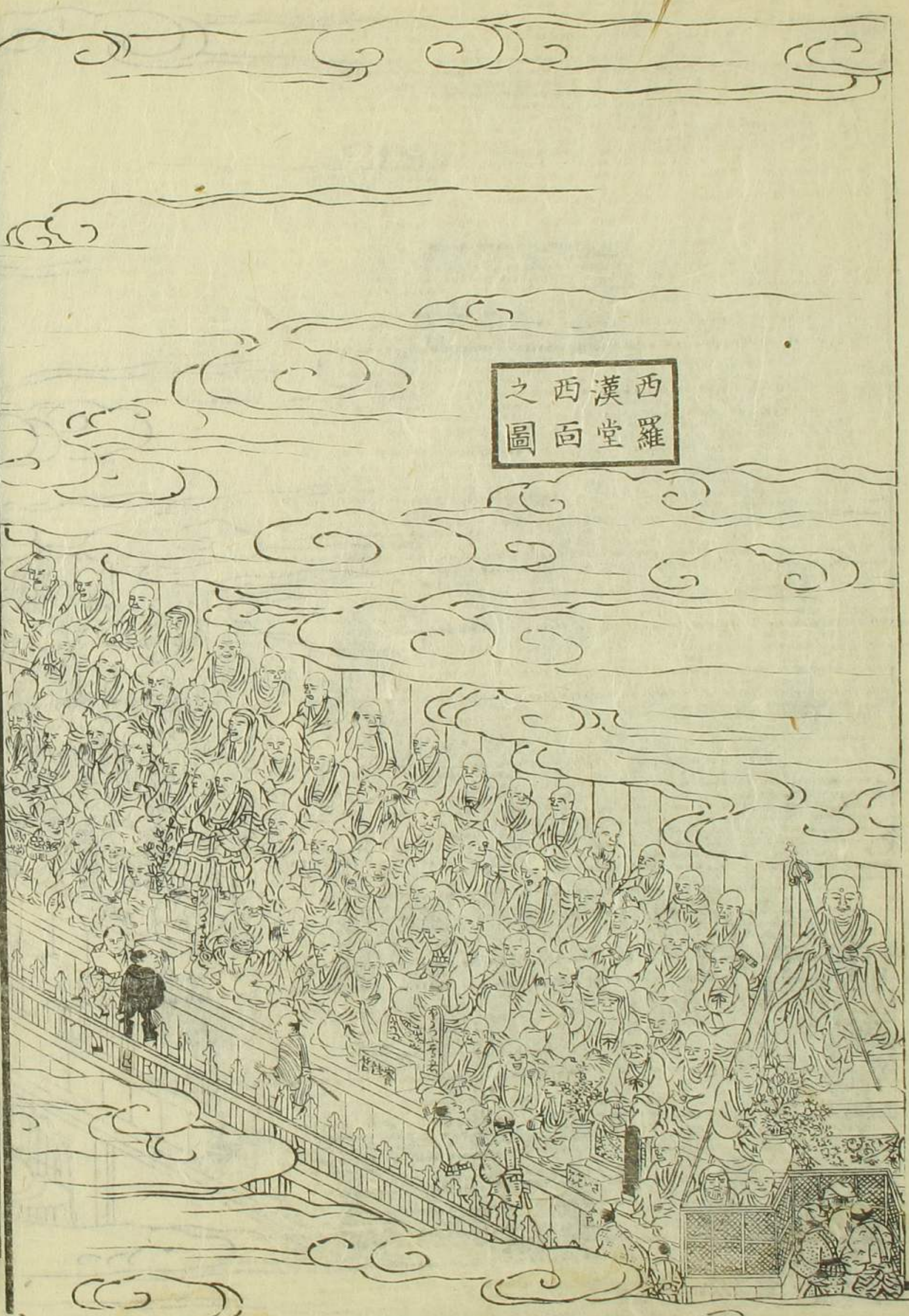
正面圖



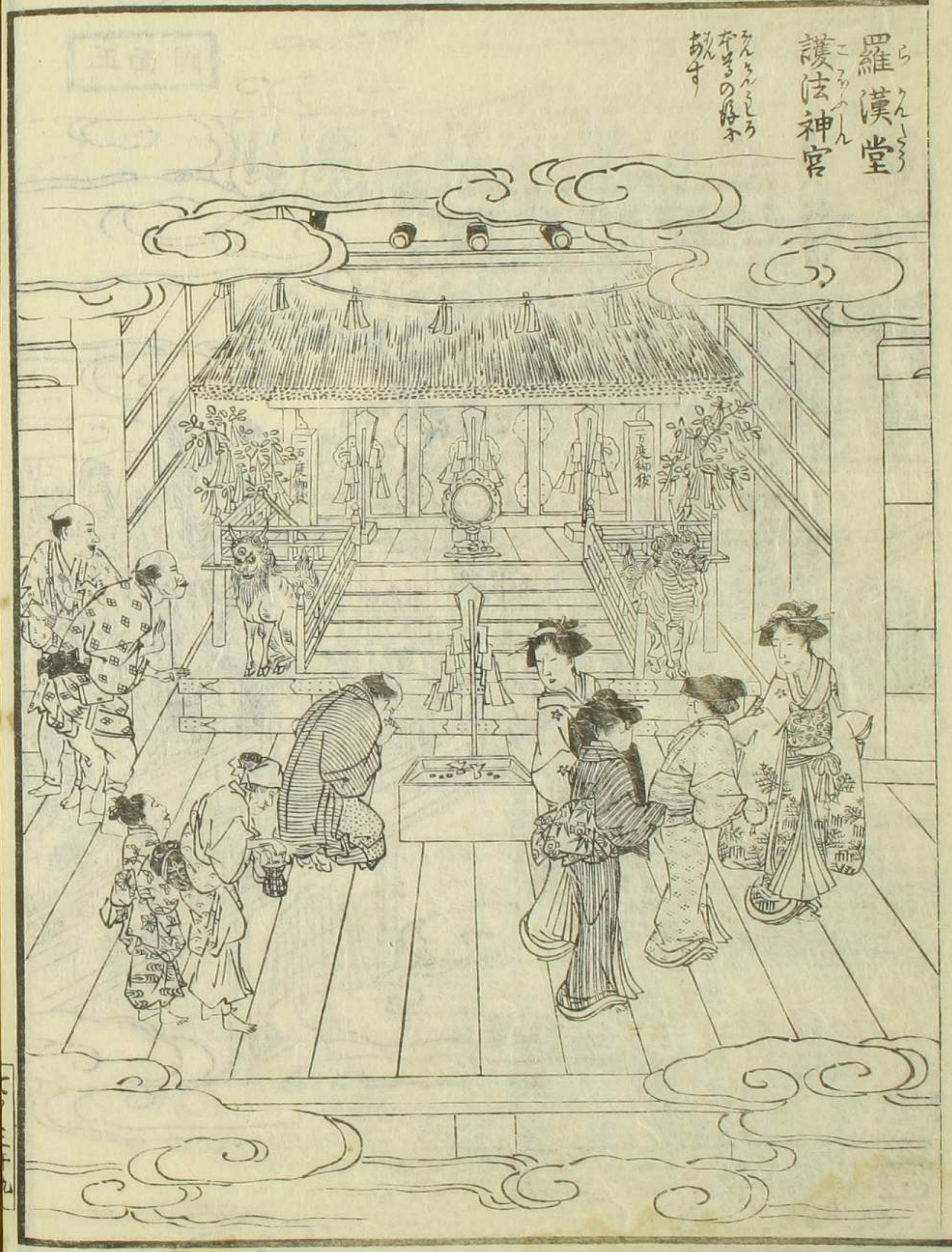
正圖



西漢西羅堂面圖之



第 二百 十一 樂婆 覆私 藏叱 尊者 者	第 二百 一 來魚 味邊 尊者 者	第 百 九 十 淨月 眼淨 尊者 者	第 百 八 十 龍散 結益 尊者 者	第 百 七 十 善善 見意 尊者 者	第 百 七 十 花善 王德 尊者 者	慧作 尊者 者
火心 焰平 身等 尊者 者	賢吉 切祥 首凡 尊者 者	大滿 天宿 尊者 者	電淨 光正 尊者 者	善愛 根光 尊者 者	寶助 涯歡 尊者 者	
頗不 羅可 墮比 尊者 者	金銚 剛多 味羅 尊者 者	淨闍 藏陀 尊者 者	寶善 仗觀 尊者 者	德花 項光 尊者 者	觀難 身勝 尊者 者	
	俱那 含尊 尊者 者	慶友 陀尊 尊者 者	德光 觀尊 尊者 者	善宿 光尊 尊者 者		
	俱那 含尊 尊者 者	慶友 陀尊 尊者 者	德光 觀尊 尊者 者	善宿 光尊 尊者 者		



第 三百 十一	第 三百 一	第 二百 九十一	第 二百 八十一	第 二百 七十一
會 法 藏 尊 者	心 勝 修 尊 者	達 磨 真 尊 者	禪 定 果 尊 者	無 垢 行 尊 者
頭 陀 僧 尊 者	會 法 藏 尊 者	心 勝 修 尊 者	達 磨 真 尊 者	禪 定 果 尊 者
無 垢 僧 尊 者	頭 陀 僧 尊 者	會 法 藏 尊 者	心 勝 修 尊 者	達 磨 真 尊 者
金 富 樂 尊 者	無 垢 僧 尊 者	頭 陀 僧 尊 者	會 法 藏 尊 者	心 勝 修 尊 者

普賢 行 尊 者	普勝 山 尊 者	誓金 山 尊 者	慧依 王 尊 者	施婆 羅 尊 者
不可 退 法 尊 者	持善 法 尊 者	持善 法 尊 者	持善 法 尊 者	持善 法 尊 者
常歡 喜 尊 者	常歡 喜 尊 者	常歡 喜 尊 者	常歡 喜 尊 者	常歡 喜 尊 者
降伏 魔 尊 者	降伏 魔 尊 者	降伏 魔 尊 者	降伏 魔 尊 者	降伏 魔 尊 者

持三 昧 尊 者	名無 王 尊 者	富伽 耶 尊 者	摩拏 羅 尊 者	降魔 軍 尊 者
聲 依 尊 者	聲 依 尊 者	聲 依 尊 者	聲 依 尊 者	聲 依 尊 者
受勝 果 尊 者	受勝 果 尊 者	受勝 果 尊 者	受勝 果 尊 者	受勝 果 尊 者
威淨 伽 尊 者	威淨 伽 尊 者	威淨 伽 尊 者	威淨 伽 尊 者	威淨 伽 尊 者
阿僧 伽 尊 者	阿僧 伽 尊 者	阿僧 伽 尊 者	阿僧 伽 尊 者	阿僧 伽 尊 者

第 二百 六十一	第 二百 五十一	第 二百 四十一	第 二百 三十一	第 二百 二十一
聖 峯 慧 尊 者	精進 山 尊 者	淨遮 提 尊 者	彌遮 仙 尊 者	智慧 海 尊 者
須彌 望 尊 者	歡喜 智 尊 者	利婆 滿 尊 者	阿濕 早 尊 者	香燄 幢 尊 者
智燄 幢 尊 者	香燄 幢 尊 者	香燄 幢 尊 者	香燄 幢 尊 者	香燄 幢 尊 者
如意 輪 尊 者	曼殊 行 尊 者	衆和 合 尊 者	衆和 合 尊 者	衆和 合 尊 者

薄俱 羅 尊 者	須彌 燈 尊 者	善圓 滿 尊 者	梅檀 藏 尊 者	乾陀 羅 尊 者
提多 迦 尊 者	提多 迦 尊 者	提多 迦 尊 者	提多 迦 尊 者	提多 迦 尊 者
因量 果 尊 者	因量 果 尊 者	因量 果 尊 者	因量 果 尊 者	因量 果 尊 者
阿逸 多 尊 者	阿逸 多 尊 者	阿逸 多 尊 者	阿逸 多 尊 者	阿逸 多 尊 者
阿利 多 尊 者	阿利 多 尊 者	阿利 多 尊 者	阿利 多 尊 者	阿利 多 尊 者

利婆 多 尊 者	波頭 摩 尊 者	沒頭 摩 尊 者	迎難 留 尊 者	斷業 陀 尊 者
水潮 聲 尊 者	水潮 聲 尊 者	水潮 聲 尊 者	水潮 聲 尊 者	水潮 聲 尊 者
首正 念 尊 者	首正 念 尊 者	首正 念 尊 者	首正 念 尊 者	首正 念 尊 者
不覺 性 尊 者	不覺 性 尊 者	不覺 性 尊 者	不覺 性 尊 者	不覺 性 尊 者
孫陀 羅 尊 者	孫陀 羅 尊 者	孫陀 羅 尊 者	孫陀 羅 尊 者	孫陀 羅 尊 者

第三百二十一

頓悟尊者
燈導尊者
須達那尊者
士應真尊者

第三百一十一

堅固心尊者
塵劫空尊者
功德相尊者
白杳象尊者

第三百四十一

識自生尊者
聲引眾尊者
鬱多羅尊者
大藥尊尊者

第三百五十一

勝解空尊者
月蓋尊尊者
菴羅滿尊者
直福德尊者

第三百六十一

須那刹尊者
提婆長尊者
蘇頻陀尊者
瞿伽梨尊者

第三百七十一

周陀婆尊者
其露法尊者
超法兩尊者

聲嚮應尊者
光明燈尊者
忍生心尊者

護歎願尊者
離淨語尊者
福業除尊者

修無德尊者
拈檀羅尊者
項生尊尊者

喜見尊尊者
成大利尊者
衆德首尊者

住世間尊者
自在王尊者
德鈔法尊者

應赴供尊者
執寶炬尊者
阿氏多尊者

定拂羅尊者
鳩舍尊尊者
羅餘習尊者

喜無著尊者
心定論尊者
薩和壇尊者

韋藍王尊者
法首尊尊者
金剛藏尊者

七十四十一

第三百八十一

無憂眼尊者
光明網尊者
無量明尊者
日照明尊者

第三百九十一

天眼尊尊者
寶蓋尊尊者
喜信靜尊者
金光慧尊者

第四百一

伏龍施尊者
蓮花淨尊者
利巨羅尊者
天音聲尊者

第四百十一

大威光尊者
寂上尊尊者
最無比尊者
持世界尊者

第四百二十一

定花至尊者

無垢藏尊者
除衆憂尊者
善修行尊者

自明尊尊者
去諸業尊者
颯陀怒尊者

無盡智尊者
神通化尊者
摩訶南尊者

幻化空尊者
拘那意尊者
調定藏尊者

自在主尊者
金剛尊尊者
超絕倫尊者

無邊身尊者

除疑網尊者
無垢德尊者
坐清涼尊者

和倫調尊者
慈仁尊尊者
那羅達尊者

編貝足尊者
思善識尊者
無量光尊者

金剛明尊者
賢首尊尊者
無垢稱尊者

明世界尊者
燭慢意尊者
月菩提尊者

最勝幢尊者

天恩山五百大阿羅漢寺鐘銘並引
 武藏國建也幸未春大阿羅漢寺鐘銘並引
 松雲創彫像今發志願欲刺五百僧
 自幼福菲緣微仰冀和慈運大真為衆
 田然嘆曰此實與願甚難得成悲必方
 老僧願心實與願甚難得成悲必方
 全在願心實與願甚難得成悲必方
 慮之矣老僧實與願甚難得成悲必方
 勸諭瑞聖極法為子發願成慈運大真
 老僧點眼供養有彫至也遂資彫在衆
 華之像自戊戌三月有震動雪之瑞此
 十尊也議哉功既轉國化五院夫日成
 不尊思自爾展偶在官上亥秋七月其
 黃可也議哉功既轉國化五院夫日成
 像丙子夏四月就新開府請點眼供養
 會項禮三官士庶長幼皆赴勝會而隨
 拈香凡百人之盛事畢量度者乃絕其
 豈非且希世之人馬得全此位下切備
 之若千不古亦何遷乎茲野志從慈大
 經貞公室氏請老僧始撞之且乞銘因
 成貞公室氏請老僧始撞之且乞銘因
 銅鐘成室氏請老僧始撞之且乞銘因
 武陵海上新創鯨圍
 大欲鑄是蒲口山河倒吞

鐘樓 庫裡の前のありえ縁九手牧野備後成貞の令室高祥院殿を建
 鐘樓 庫裡の前のありえ縁九手牧野備後成貞の令室高祥院殿を建

額 天恩山
 額 天恩山
 額 天恩山

攝待所 日野より
 額 細掛九鼻の
 額 細掛九鼻の

玄保樂 四年己未是を
 玄保樂 四年己未是を

額 三繞右
 額 三繞右
 額 三繞右

禁石 羅漢堂の
 禁石 羅漢堂の

刹竿 日野右より
 刹竿 日野右より

三繞右 後門の内左の方天王殿
 三繞右 後門の内左の方天王殿
 三繞右 後門の内左の方天王殿

一音纒動警覺曉昏
觀音大士如入此門
幽明莫滯功德難論
存沒俱利消融百冤
雲禪功烈函益乾坤

修洪規範解塵勞煩
田通無礙卻忘聞根
由聲生悟直證本源
國平岷泰斯子斯孫

元祿九年丙子四月穀旦 牛頭鍊牛機謹誌

擡樹 境内より文五年庚申擡樹九十餘株を
挑の古手 文紀元丙辰
當寺の境外南

我々のふもこれに
我々のふもこれに

岡山堂 隱栖の地なりとて鐵眼師とて象先和尚ありひは松雲老人本

の像を遷すは三代堂とも唱ふは鐵眼

禪師の行はるは孫列瑞祐寺の碑文に詳なり

中興象先和尚の黃檗四世の法孫として鐵眼禪師の法脈たり

當時松雲禪師化寂の後假堂も破壊し佛像も兩露の

るに侵されたりを深く患へ正徳三年癸巳本所鐵眼

和尚の命を受始て大に戸より来り當寺に住と享保二年丁酉

正月より十有餘年の間心肝を碎れ寒暑風雪の厭あり

日々に麻巾の街市より入て行乞し既して勸進の功汝暮り受

る所の一握一投の米錢を積て其料に元同十年己巳より今

存する所の佛殿僧房悉く建立成就せしを依同十四年己

酉二月岡堂惣供養の大法會を行ひしに孟蘭盆の大施餼

鬼會を岡く當寺岡山の象先和尚たる其は顯慈たり

ととも故ありて鐵眼禪師を深山とて自の所寶列和尚

を二代とて又松雲禪師創業の大功ありを以一代岡基と稱し

自三代の席より坐せしる隱元禪師歸化の後持齋一食して

深く貧者をおられし佛像經卷と古たれた袈裟の外より聊も

所より貯ふる事なり日々の勤行より般若經分五卷と花嚴

經行願品百五十卷とを讀誦し觀音の尊号を書寫せしる

其教積て山の如く又大般若經一部六百卷一字百禮し

是を書寫し其先出家得道の時拈瑞祐寺より入て法道成

是を書寫し其先出家得道の時拈瑞祐寺より入て法道成



龜戸
宰府天満宮

當社の門前貨
食店多く各
生例と構(鯉魚を
畜)業平(堀)も
地(名)をうて
を美味なり

就の誓願を發し三年の間双手の指切八十卷の卷嚴經を
血書す其後當寺殿堂の管大平成といふも宗門の坐禪
夏冬の結制行れさうと関曲うりとい依後住宋朝所命
を受けて元文二年丁巳の冬洞涿両首坐を立て五千指の僧を
集め江湖の大會を行ひ時
大樹らよ取つてたすひ
坐禪の行相成さるるを則江湖の僧財とて米五百俵
をたすひと夫より後般若の全文を真讀しと御札を執す
竟り寛延二年己丑六月五日七十三歳なりて濕盤の大定
入貴銭香花を捧じとほとひ来るるの三日之夜炎暑甚
しといつとも遺骸聊変る色あり茶毗しと全身舍利とせり
其舌根の室修し収て今於
中興堂に存せり
當寺の黃檗流江戸最大の禪園なりて佛閣の巍たるるの
日域に如くといふ元禄年間寺領山号等を賜り享保九



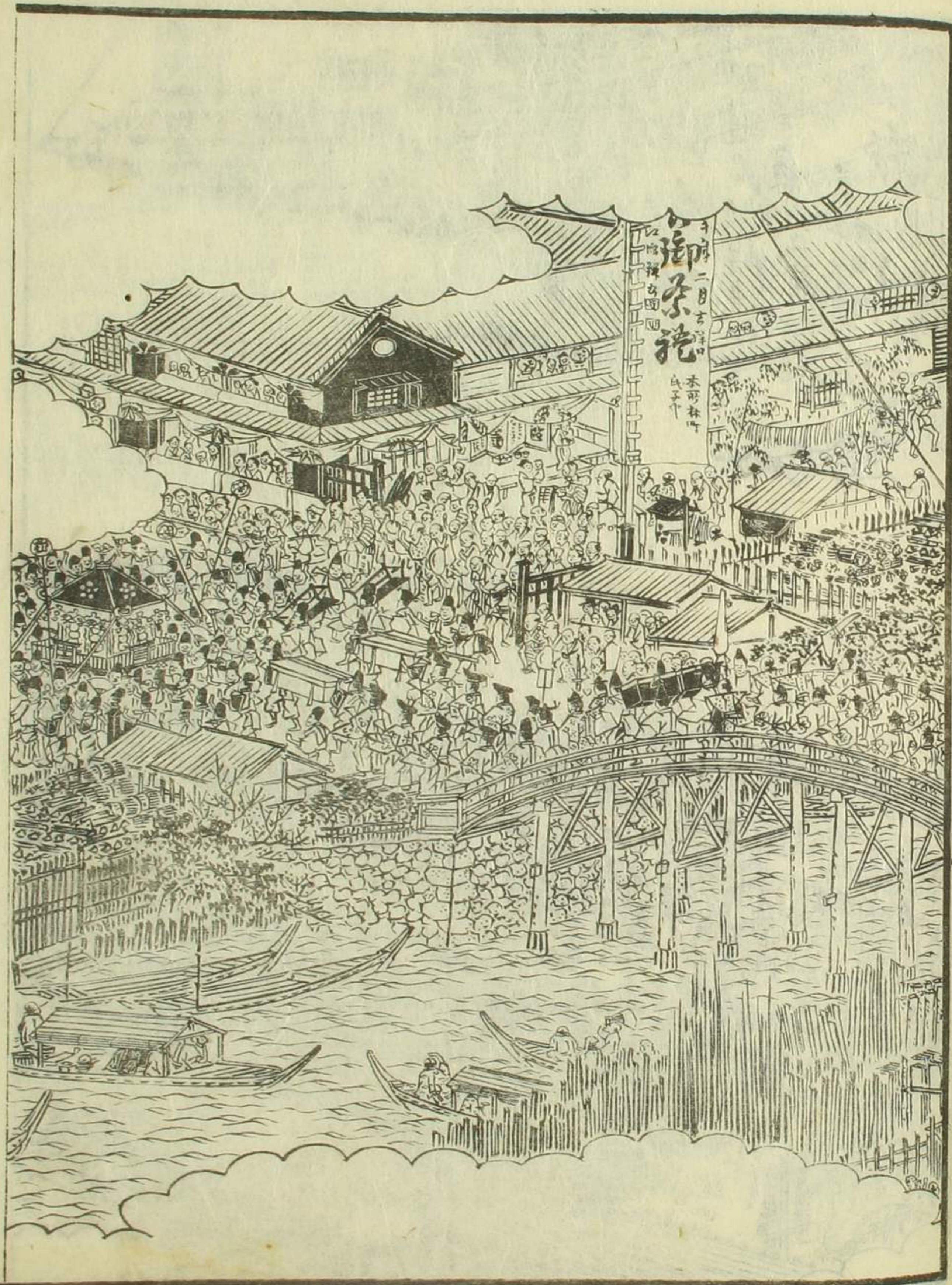
八百板
 其角
 八百板
 其角



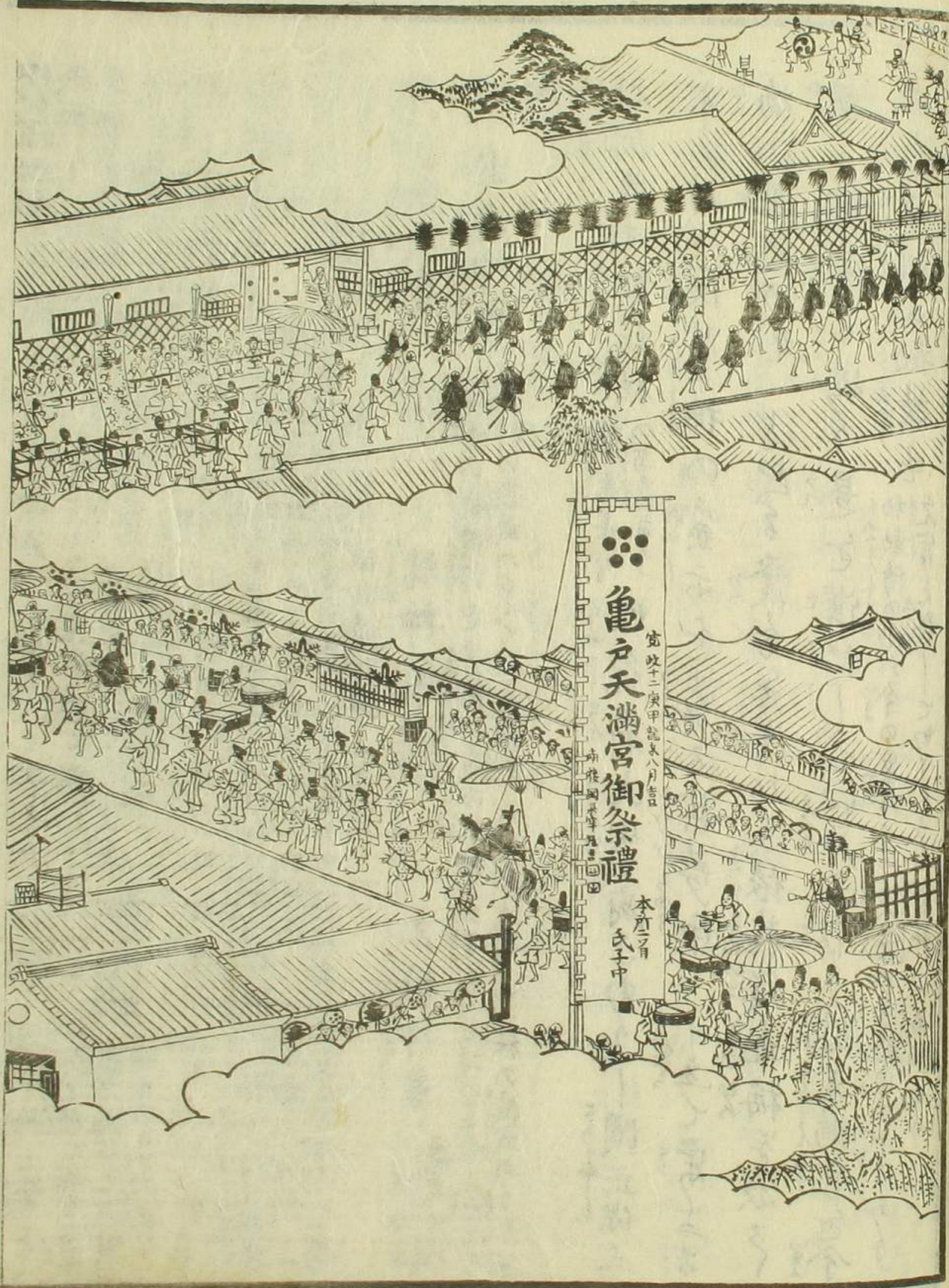
五元集
 元禄十四年
 二月二十五日
 聖廟八百板
 御年忌於
 龜戸御社詩
 歌連御令與
 行一坐

梅松
 戸

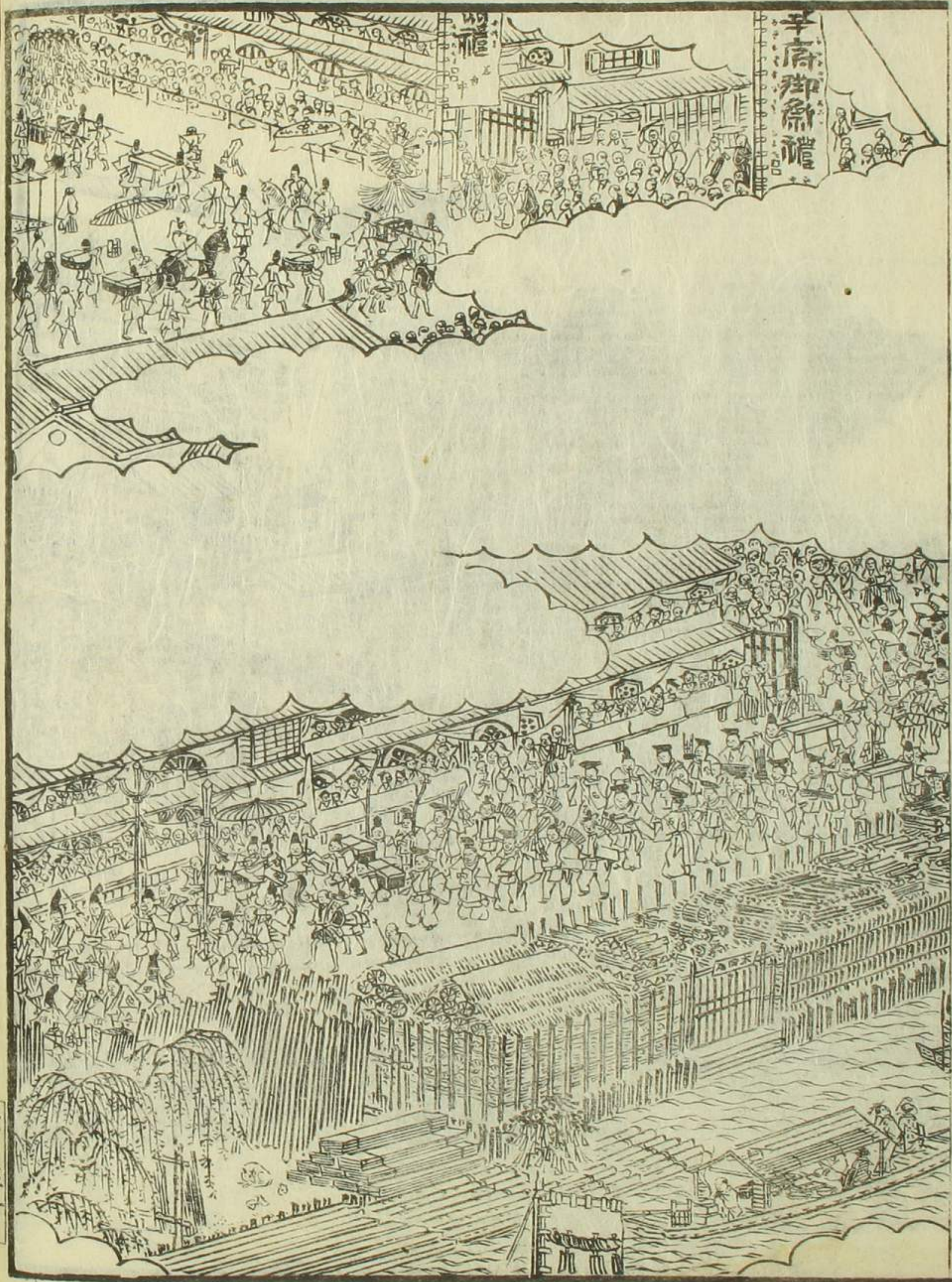
二月二十五日
 菜種神事



亀戸天満宮祭礼
 神輿渡御行列之圖
 毎歳八月廿四日お祭代町
 の四橋へ神幸あり
 て此橋を渡るあり
 産子の所も縁お世
 都鄙のまはれ群集
 け色の一盛なり



● ● ●
亀戸天満宮御祭禮
寛政十一年甲辰八月廿五日
本町二丁目



辛酉御祭禮

普門院



身代觀音菩薩

當寺に安んずるを傳授大用の儀す

縁起云大永二年壬丑千葉公

中勢自胤

三勝の城中

一字の梵刹を闢

此靈像を安置し長閑上人を以て始祖

とす

今この普門院にあり三勝と云ふ隅田川流津川荒川の落合に三僕

とあり

其の地を以て昔千葉公在城の地なり其の地を以て三勝と云ふ

沈没

其地を以て三勝と云ふ其の地を以て三勝と云ふ其の地を以て三勝と云ふ

善次盛光

後藤藤原の孫にあり其の地を以て三勝と云ふ其の地を以て三勝と云ふ

不の此靈像

の加護あり其の地を以て三勝と云ふ其の地を以て三勝と云ふ

創

長閑上人を以て三勝と云ふ其の地を以て三勝と云ふ其の地を以て三勝と云ふ

死

此靈像を念する輩の悉く病

平愈

病に臨する者其病者と床を等とす

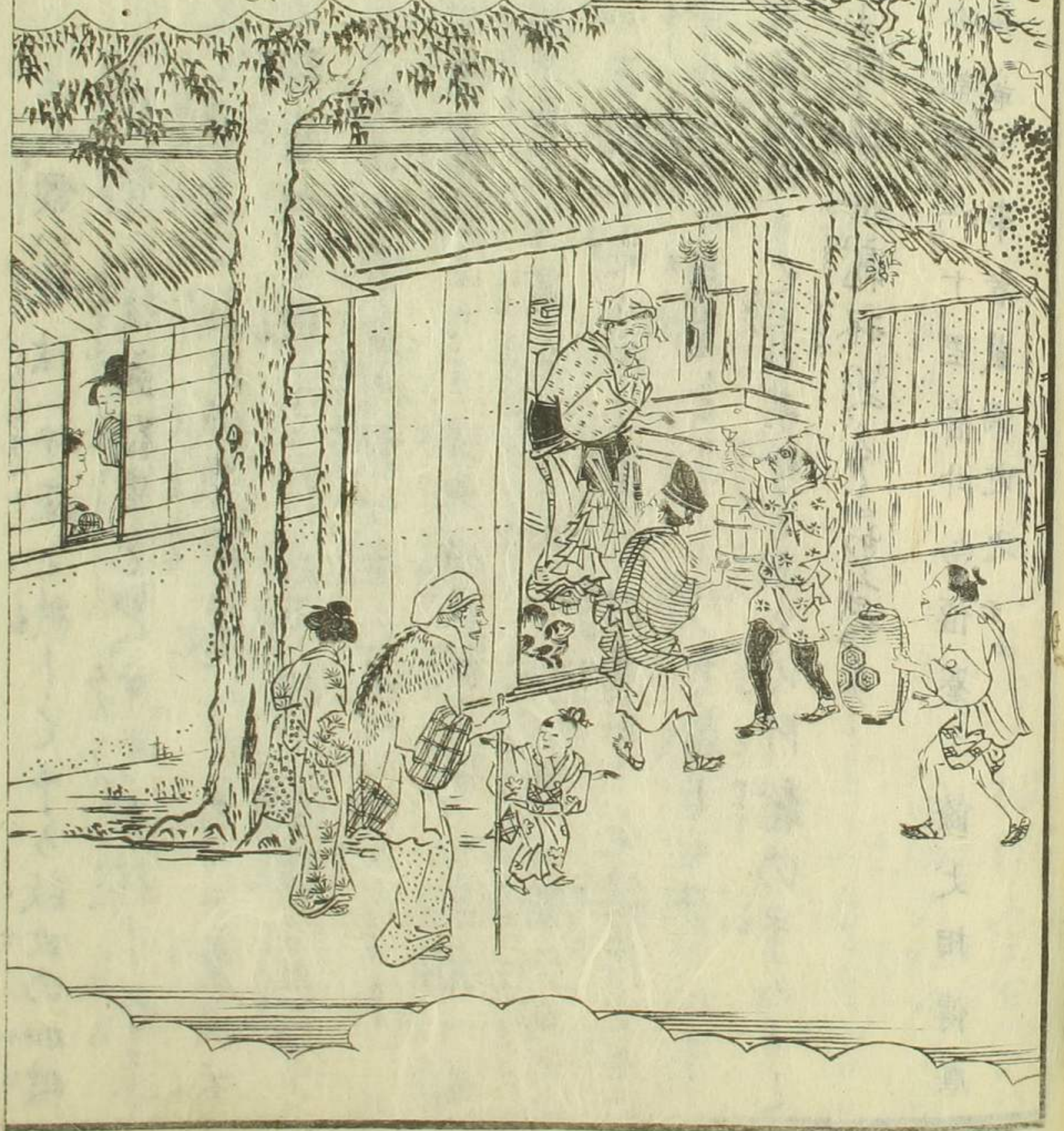
延の患

其後任長閑上人睡眠の中一老翁の来るあり

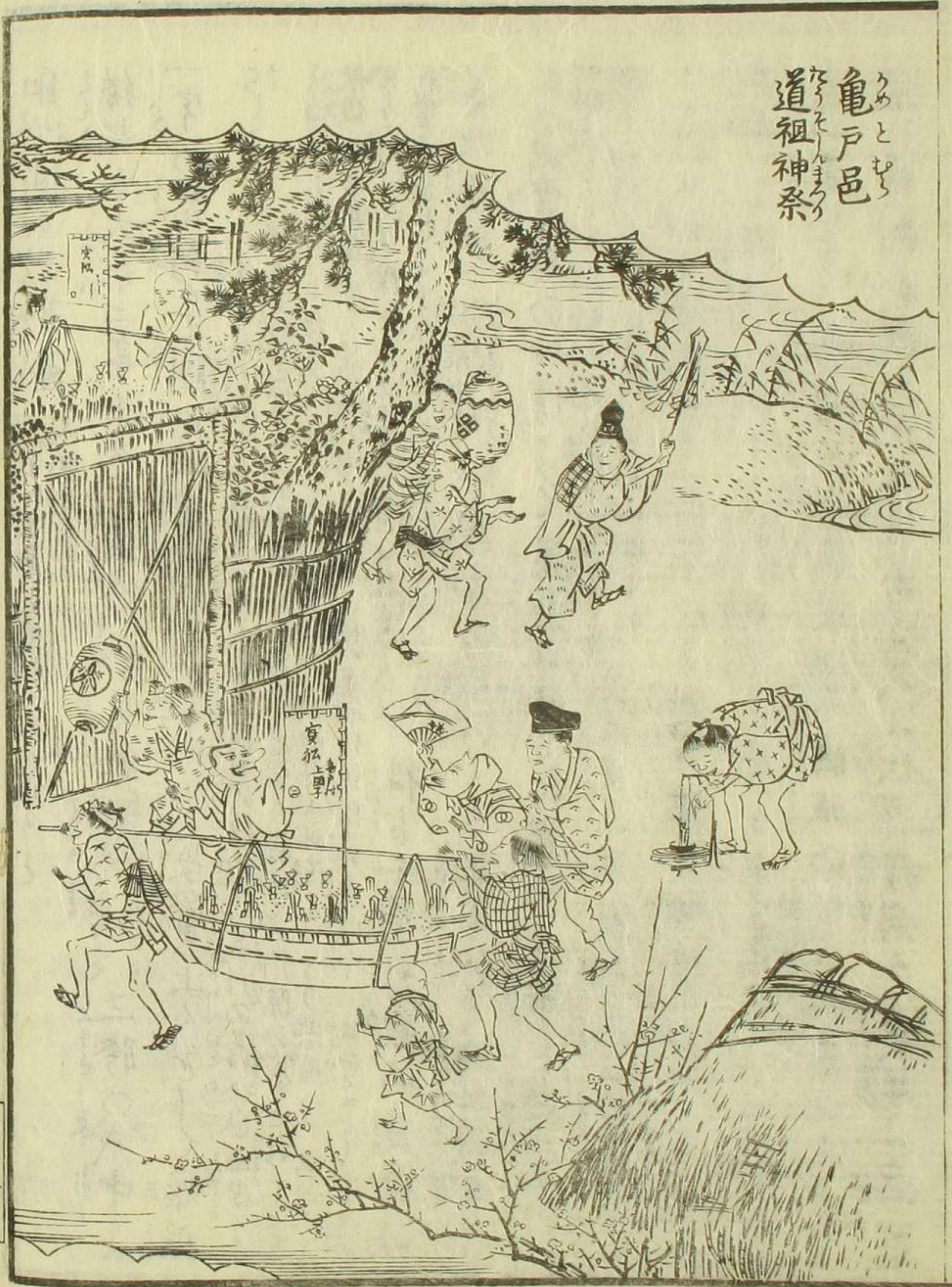
吾

是地を以て大士あり其の地を以て三勝と云ふ其の地を以て三勝と云ふ

毎歳正月十四日
 これを良行と
 此地の童子多く
 ありまうて菱垣
 造りよしたる
 小き船又入彩の
 幣帛を建松竹採
 をり紐飾り其中
 央に宝舟といふ文を
 を添くも織を建
 たるを舟擔り音を
 曳ひ連て此辺を
 持歩行布り其夜
 童子集會して花ひ
 戯るるを
 恒例とす



亀戸邑
 道祖神祭

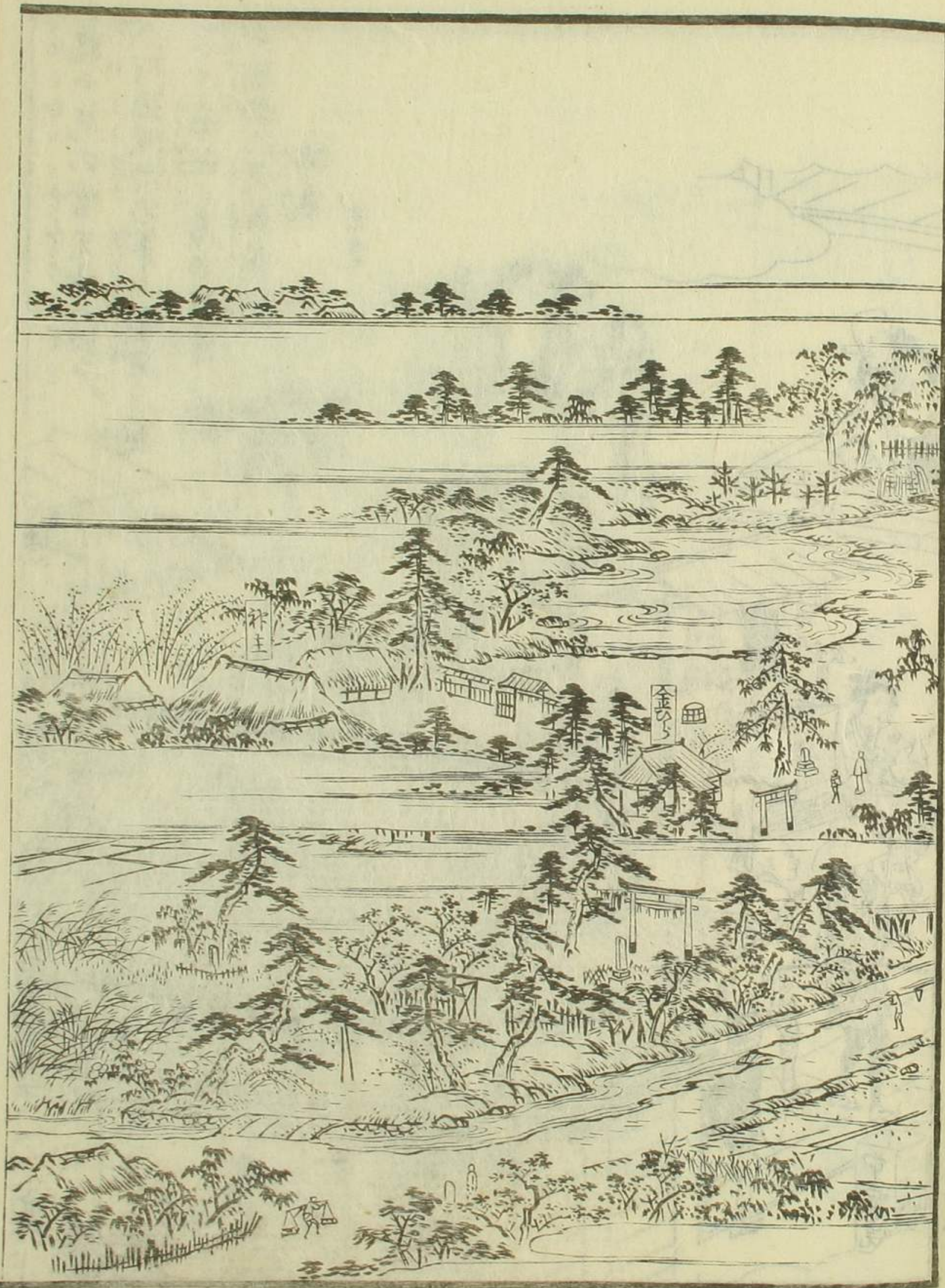


一身に逼り上人願の我法一千座を彼して予う救世の加彼
力とあるへしと夢覺て後益教車を加へ奉るを孫一奉る
佛跡の行もと蓮臺の法を感後肝を命し支より昼夜不
退一千坐の觀音供を彼して四中頓に疫疾の患ひを
遁るるを故に世俗身代觀音と唱へ奉るなり
卧龍梅 日所清香庵あり俗間梅屋敷と稱し其花一品
うして重辨潔白あり薰香至て深く形状宛も龍の蟠卧
如く圍中四方殺十丈の間は蔓て梢高むと枝毎に羊の
地中に入地中を歩く枝莖を生し竹を幹ともいふとあり
わくもくも屈曲ありて自其勢を彰と仍階龍の号ありと
しり梅譜に卧梅梅就杯しりあり

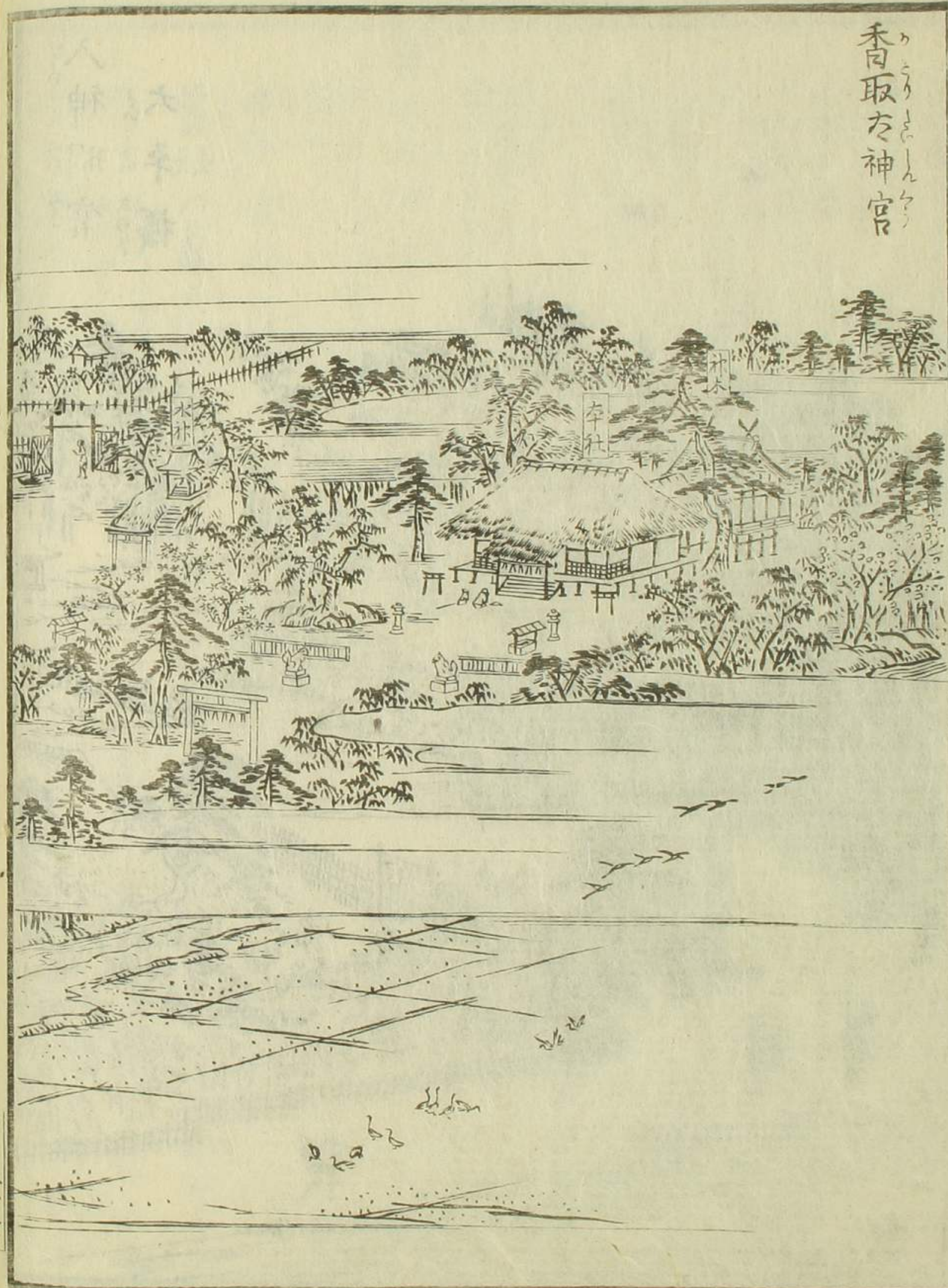
梅譜曰 公都城二十里有卧梅偃蹇十餘丈相傳唐
物也謂之梅竜好車者載酒遊之云云

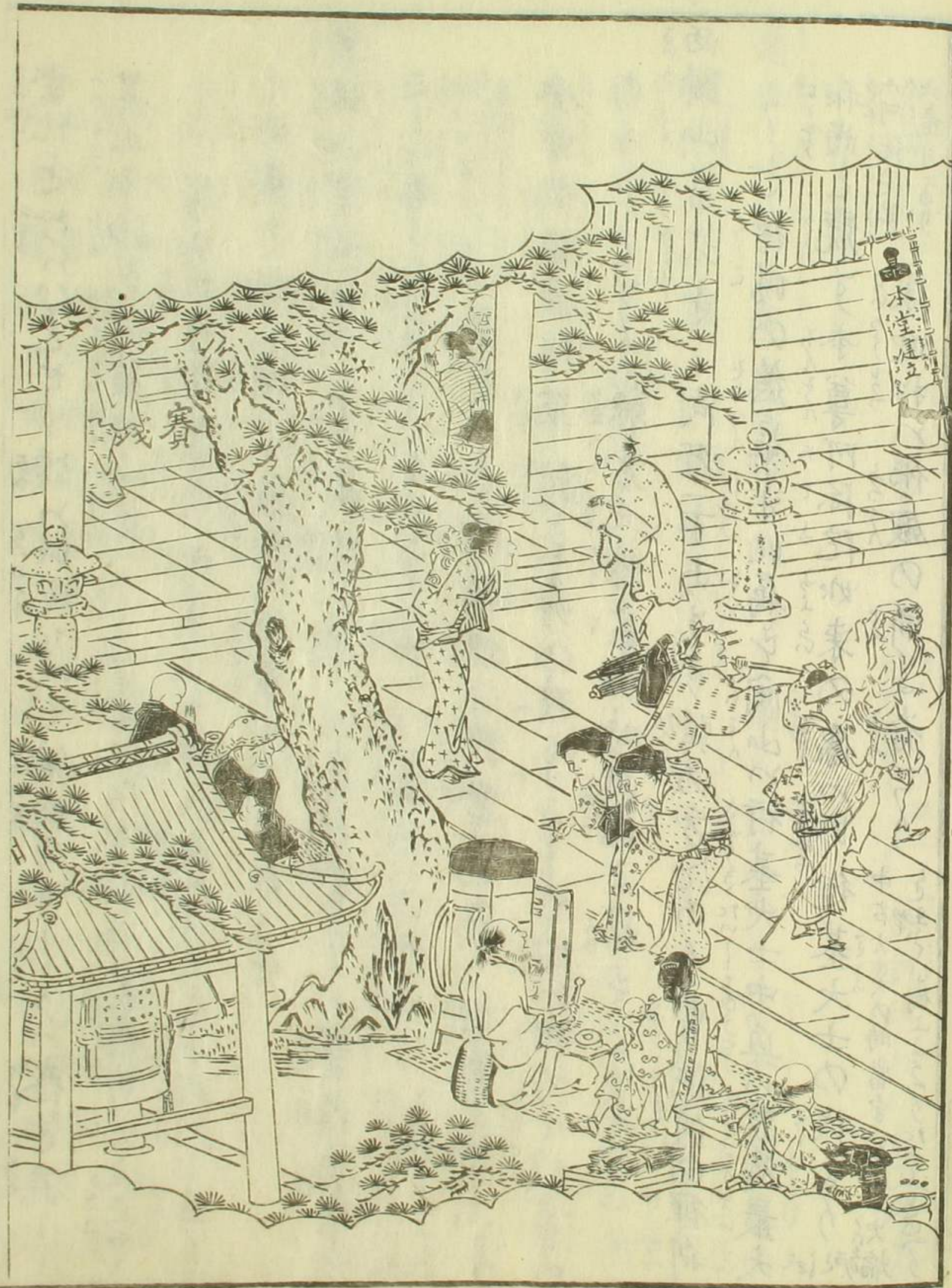
神明宮

日所あり宮居の一堆の塚とあり相傳に上古此の
一の小嶋より其繞りの海面なりと其頃渡海の船風浪の
難く遠く多に冷勢兩皇太神宮の加護より命を令し世
報賽のため此地よけ所神を勧請りあり宮居を管じ
とつり 往古此比船多く船を不るるあり入と唱へしなり 網于樓と云は社
の傍よりありて神木と云ふ 昔け迎ひははききの海より一頃漁者の網を
穿て土中より漁網の具と名づるありのゆゑなり依海邊ありしとす
明王山東覺寺 同所南の方にあり真言宗より寺嶋の蓮
善寺より屬と本尊の弥陀觀音勢玉の三尊なり當寺は福
四年辛卯草創とす所の寺院より岡山を玄覺法印と号し
不動堂 當寺は安置は良兵衛僧都の彫像よりて相列大山寺の寺より 日終
縁起曰當寺往古草創なり一頃岡山玄覺法印に任せらるれり其時四年
辛卯或時負笈の優婆塞まりて投宿を乞ふに法下許諾し其夜日床に安臥
しぬ翌朝法下疾起て仏廟に入りて傍より一人の壯士の壯然とて其時
法下怪し其疾を問はしとて壯士の聲惡の如く言ふに言ふる不なり其時投



香取方神宮





龜戸邑の常光寺江戸
 六阿弥陀回第六番目
 あり春秋二度の彼岸
 中都鄙の老若参詣
 群集
 七ノ五

祭礼を行ひしとて頃此辺に於て海面ありし春を流し
其止る地を以て後所と定へしと誓ひたりし其春の
一となり故に今昔の例より僅の間ありし由十間川より
て神輿を舁し移し後所へ神幸なりし由ありしと

東林山寶蓮寺 善藏院と号し其真言宗より寺鳴の蓮甚
寺に属し其寺の虚空藏菩薩の行基大士の作あり
白山西福寺深川 當寺の吾孀権現の別當寺あり相傳嘉元元年
癸卯俊鏝法印草創し其所の精舎より始に相列小田原より
のりしとて鎌倉北條家の時此地より移しし由あり

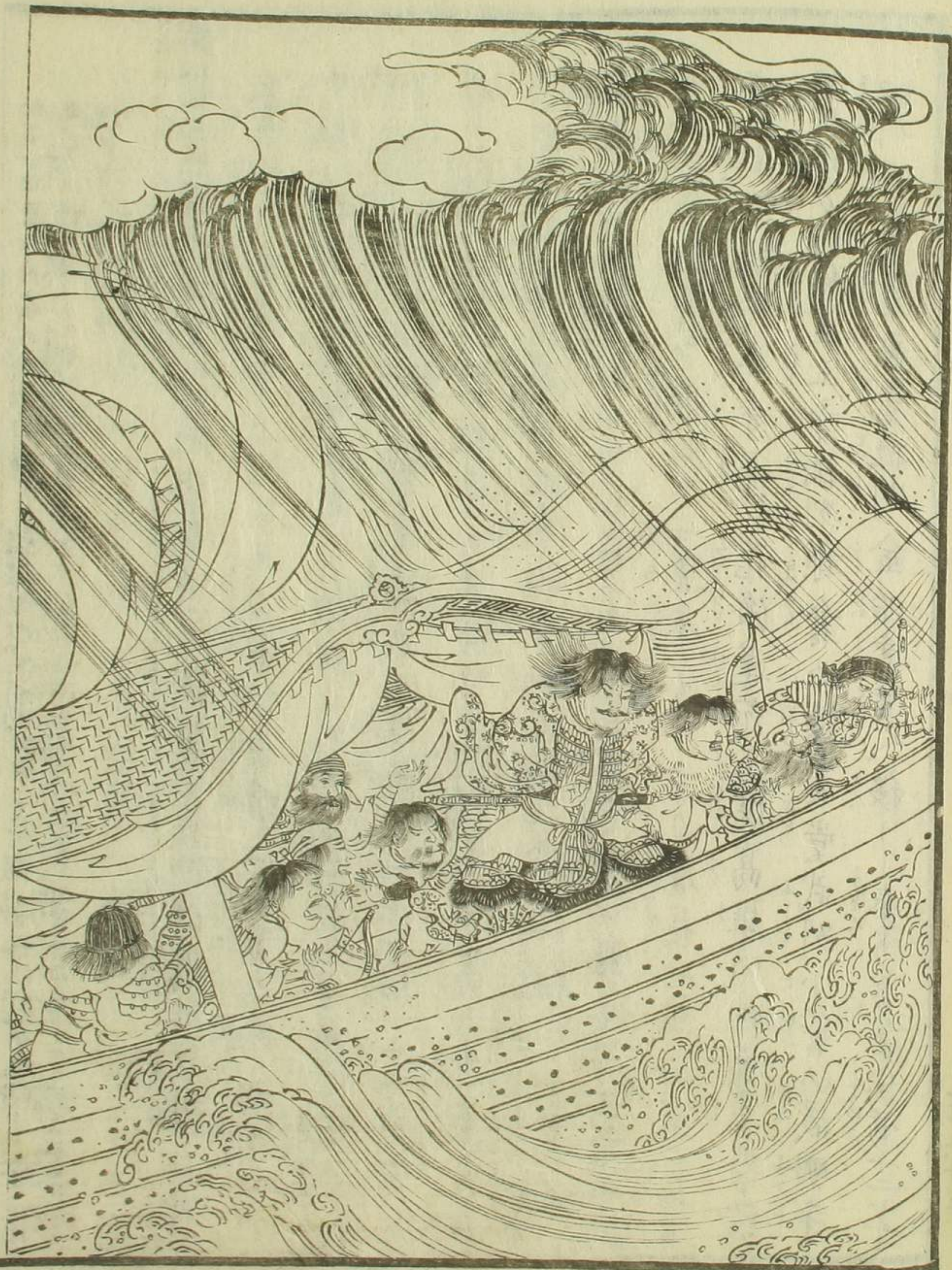
西歸山常光寺 同所二丁あり其方にあり曹洞宗の禪刹
よりて摺場徳泉寺に属し岡山の行基大士中興の勝庵最大
和尚と號す本尊阿彌陀如来の像に即行基大士の作あり
六阿彌陀尊 來迎の佛殿の前より存せり
中古火災の時當寺の本尊大燬
六番目あり

松焼松の同し此の方にあり 時として樹上へ 毎歳二月八月の彼岸
中系詣り

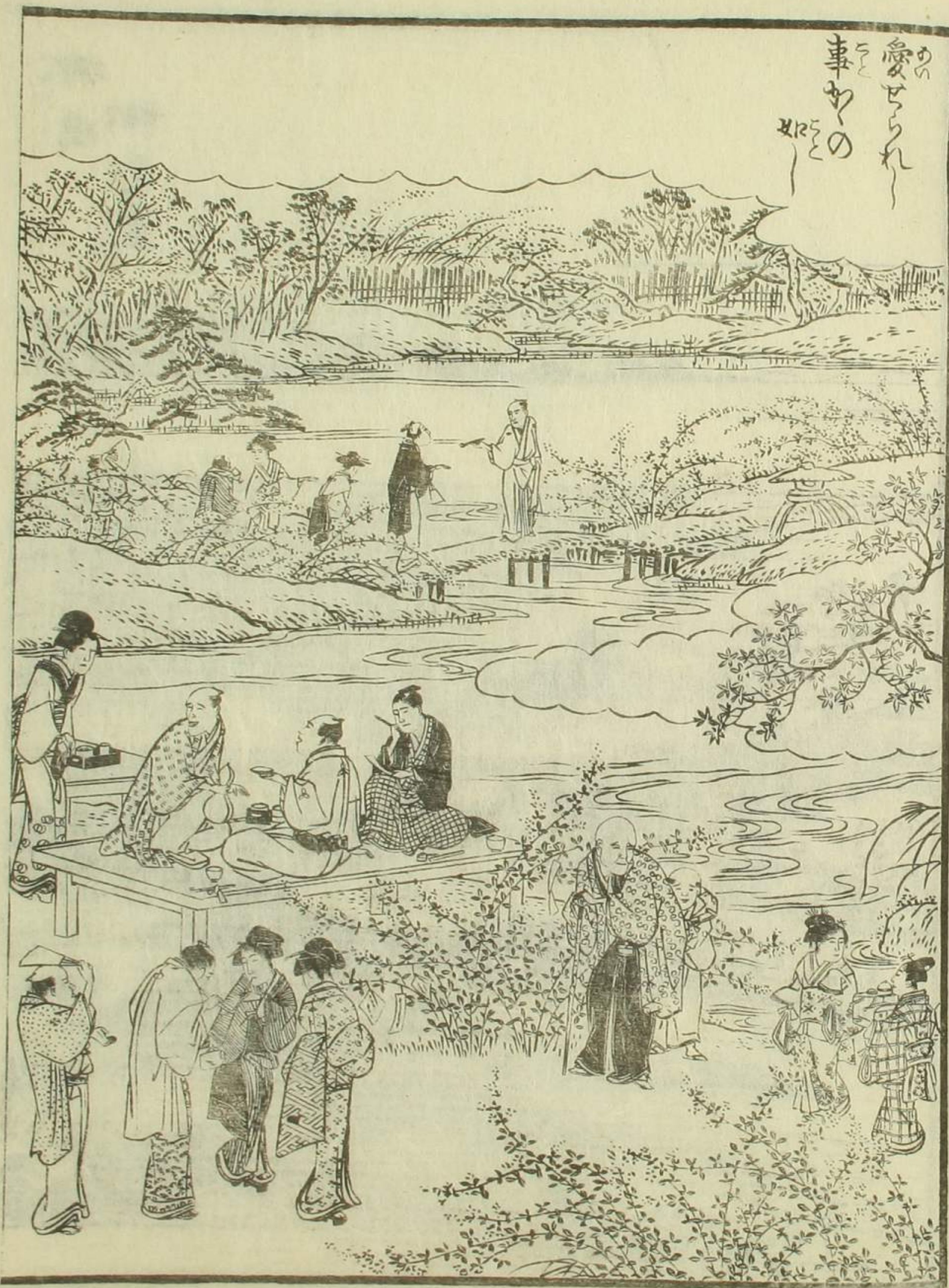
龜命山慈光院 同所十間川を隔ち向あり當寺由洞宗の
禪林より同し徳泉寺に属し永正十一年甲戌葛西出雲守

某の令室慈光院殿草創し其所の寺院なり岡山の嵐巖和尚
本尊觀世音菩薩の像に此地より東の方の土中より現
ありしとて又境内に安置せる辨財天の像に智證大師の作
ありしとて葛西出雲守某の尊信ありし靈像なりしとて

吾孀権現社 同所十間川の傍より此地を吾孀林又浮洲邊
とも號し別當の宝蓮寺あり
本社 祭神 茅孀媛命 一坐
日本書紀神代卷曰 日本武尊初至駿河其處賊
陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林
臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺
王之情放火燒其野王知被欺則以燧出火之向燒



日本武尊東夷征伐
 たすけし時相模國より上総
 國を往んとしゆひ
 其海上暴風忽ち起り
 王船漂蕩して危り
 うの幸を搦媛自の御身
 をめり贖ひ尊
 の命をたすけ
 海神に誓ひ
 竟に國を披
 て入たす
 日本紀よ
 ちり

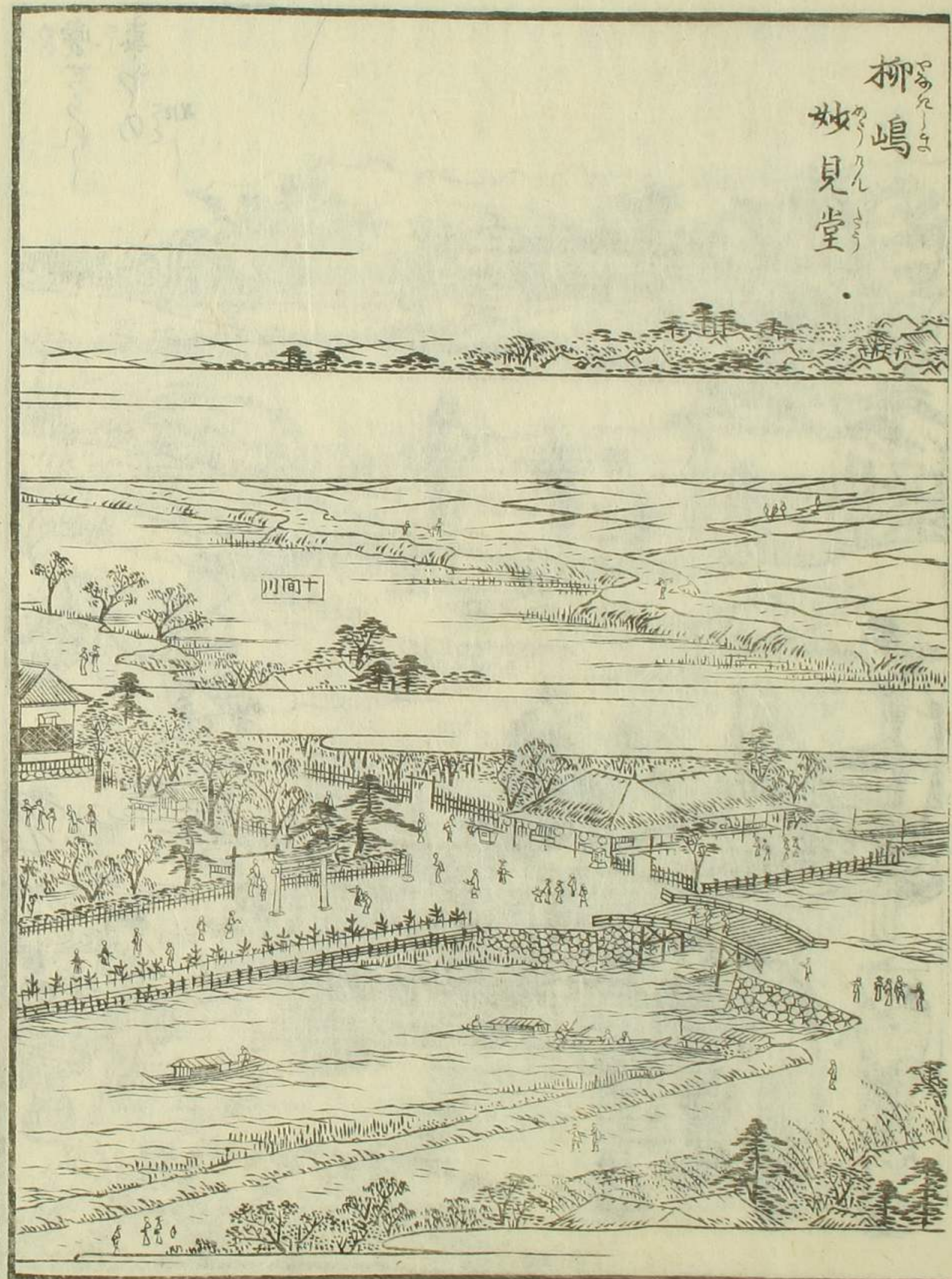
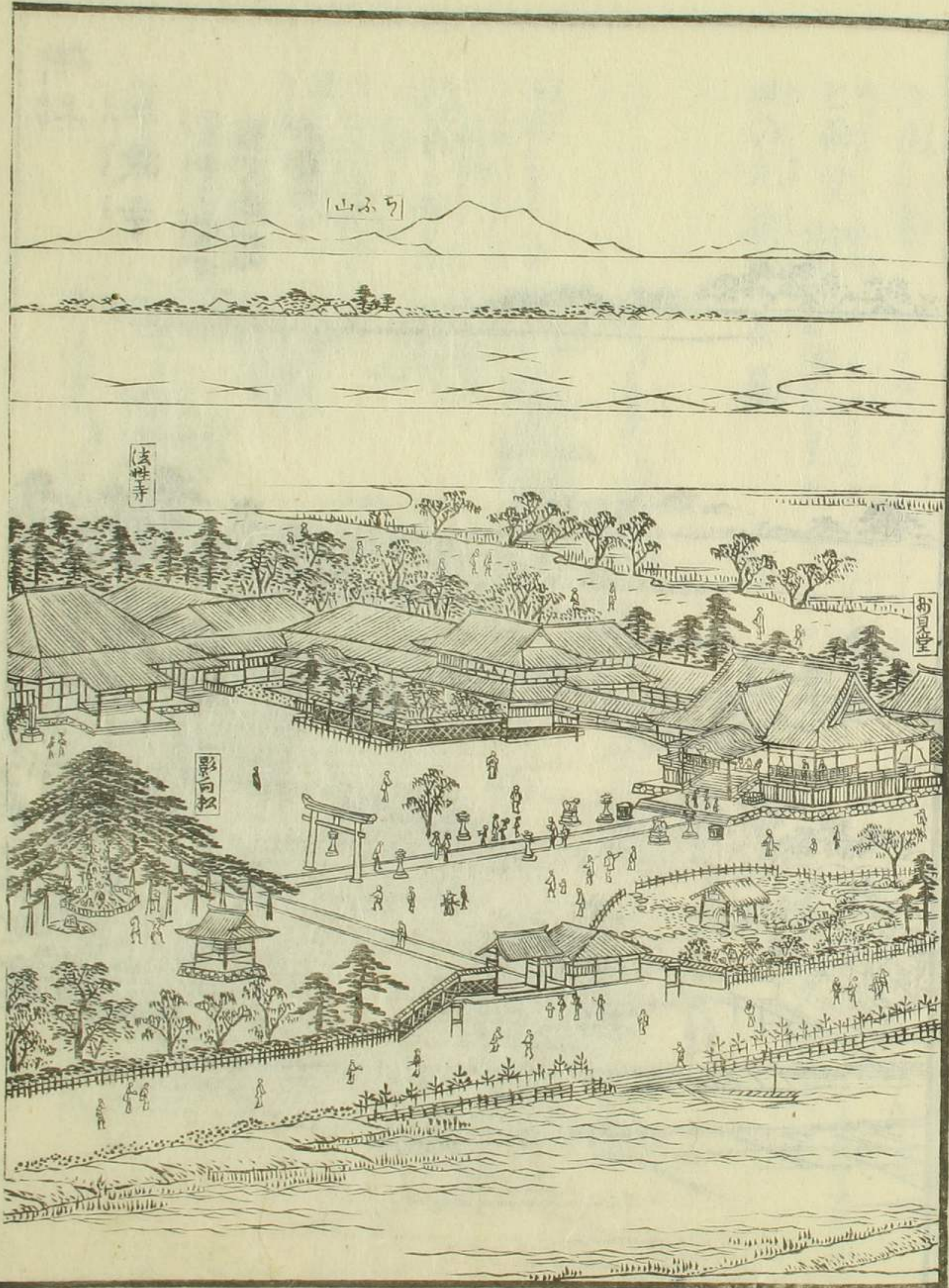


の
 愛せられ
 事やの
 如く



龍眼寺

庭中萩を多く
 栽て中秋の一
 奇観たり故に
 俗呼ぶ萩寺と
 御代に萬葉集
 茅子作和名
 抄鹿鳴草と作る
 續日本後紀に
 仁明帝兼和
 元年八月清涼
 殿に内宴と
 是を芳宣華
 の燕といふと
 ありて皇朝
 古より萩を



押上

最教寺

當寺に蒙古
退治の旗曼
茶羅あり

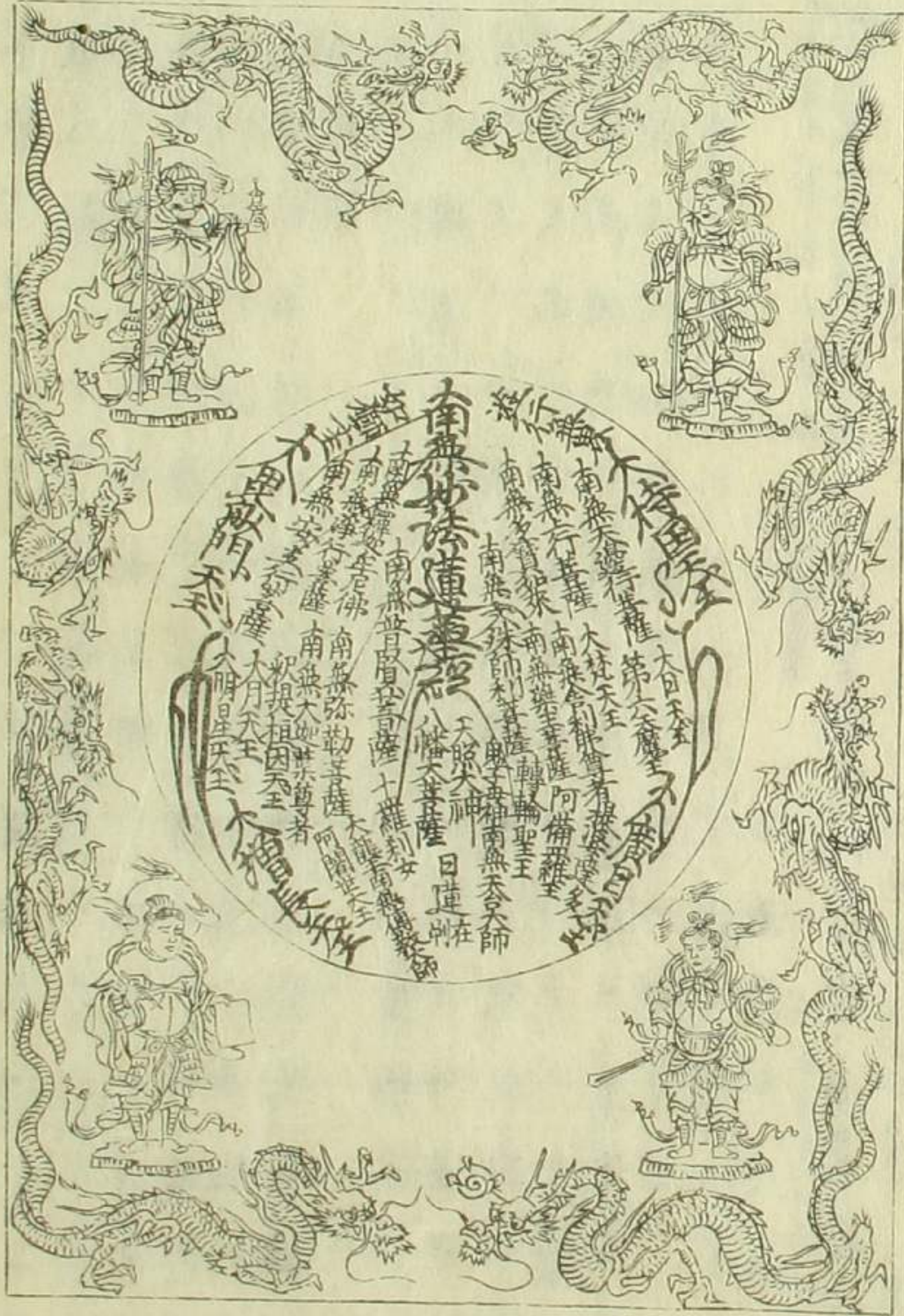


七〇六十六

のびし書しひる所の日蓮上人真蹟の曼茶羅の旗あり
境内より本山身延同所の靈像ありと云三澤流杉禱の本寺よりて當寺第二世の
七面堂 住持仙能院日宗より所二百日加行して此の傍に社殿を建てたと云
日の丸旗曼茶羅 一幅

竪六尺五寸

毎歳七月十六日
よりおれ廿二日
まで虫拂として
七面堂に掲て諸
人子供さしむ
月の丸の曼陀
羅の身延山に
あり



幅五尺五寸

西面之大旗來由記
弘安四年辛巳五月二十一日從大元國蒙古賊船
四千餘艘入數之御旗先立日向親王九人爲祈禱之
其時這八龍王御旗親王九人給時某爲
大漫荼羅令書此則日神擁護有神風吹彼賊
武之人大將等不殘破異國江靈神拂給目出度旗成故
船其人數至九則本靈神擁護有神風吹彼賊
我家是預給畢殘破異國江靈神擁護有神風吹彼賊
這西面之大旗者惟康親王所持之御旗也弘安
四年五月二十一日從大元國蒙古來八千餘人
四二萬人也于時親王此旗四方蓮聖人龍王仰而
角數四十五萬相也親王此旗四方蓮聖人龍王仰而
正書是爲持九月十月十三日蒙古武池上村是也
令正應元年十月十三日蒙古武池上村是也

蒙古退治 德曼茶羅來由 人皇九代後宇多帝御宇弘安
二年庚辰春二月 廉倉君の代に元使杜世忠を殺す

二年庚辰春二月 廉倉君の代に元使杜世忠を殺す
傳の世祖の至元年日本交永高麗人趙壽等日本國を通じ
者を擇み同二年八月兵部侍郎里の役を信郎殿弘安に命
安元年近元使の書をもとめ未だ元王憤て阿刺罕
率を以て是子代し 范文虎及竹都洪茶丘等の四將の師十萬を率

一めて日本を撃つと
度一俱一破嶋の會とと太平記
二百萬餘の兵起二十四万人とと
船東國通船戰艦二千五百艘又太平記七萬
餘艘とと縁起四子餘艘とと一なり

の二嶋及び筑前肥前に入る
元史日本傳六月海入七月平定すあり九
よ平壺とと平戸より戸壺音通とと平戸より比羅度とと云三ツツ會
飛黄鳥の作る九龍山の鷹鳴り此嶋の筑前の國あり所なり 天下の人民戰慄

の乃自九別に向つて
らむとと日蓮上人に命じて四月の旗の山中に大漫荼羅を
書し其旗を貞綱とと西海に發向せし其時同年閏七月
一日より貞綱海濱に至り彼旗を押立てる颶風俄に起り逆

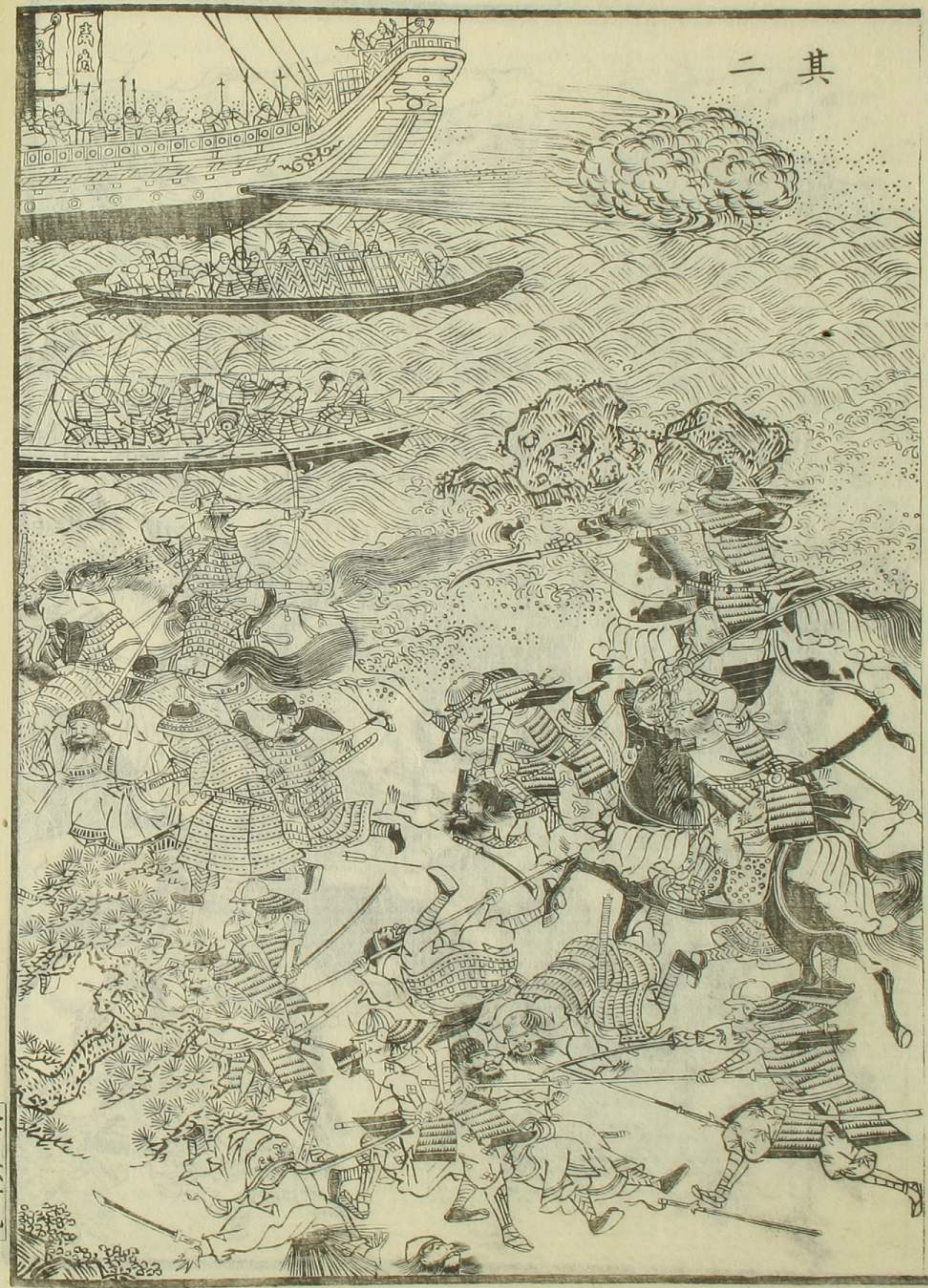
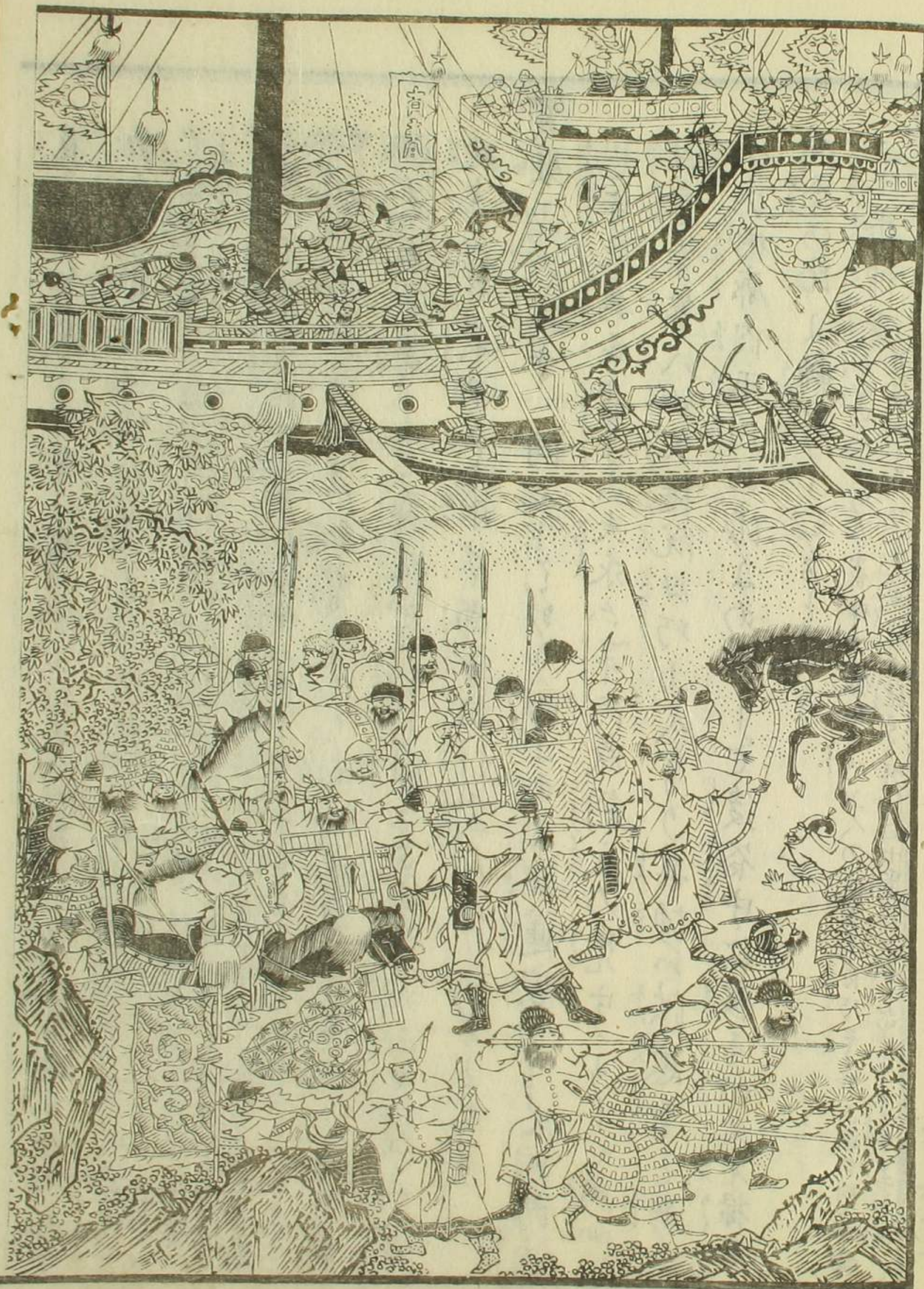
浪天を侵し賊船漂蕩し或は巖崖に觸て多く壞れ蠻軍
溺死して眞腹に葬らるるの其數を知ると元師大に敗れ
と擲する者凡三萬人悉く是れ鳥島首と其餘于閻莫青吳

と擲する者凡三萬人悉く是れ鳥島首と其餘于閻莫青吳



鎌倉將軍
 惟康親王
 蒙古夫賊
 退治の因

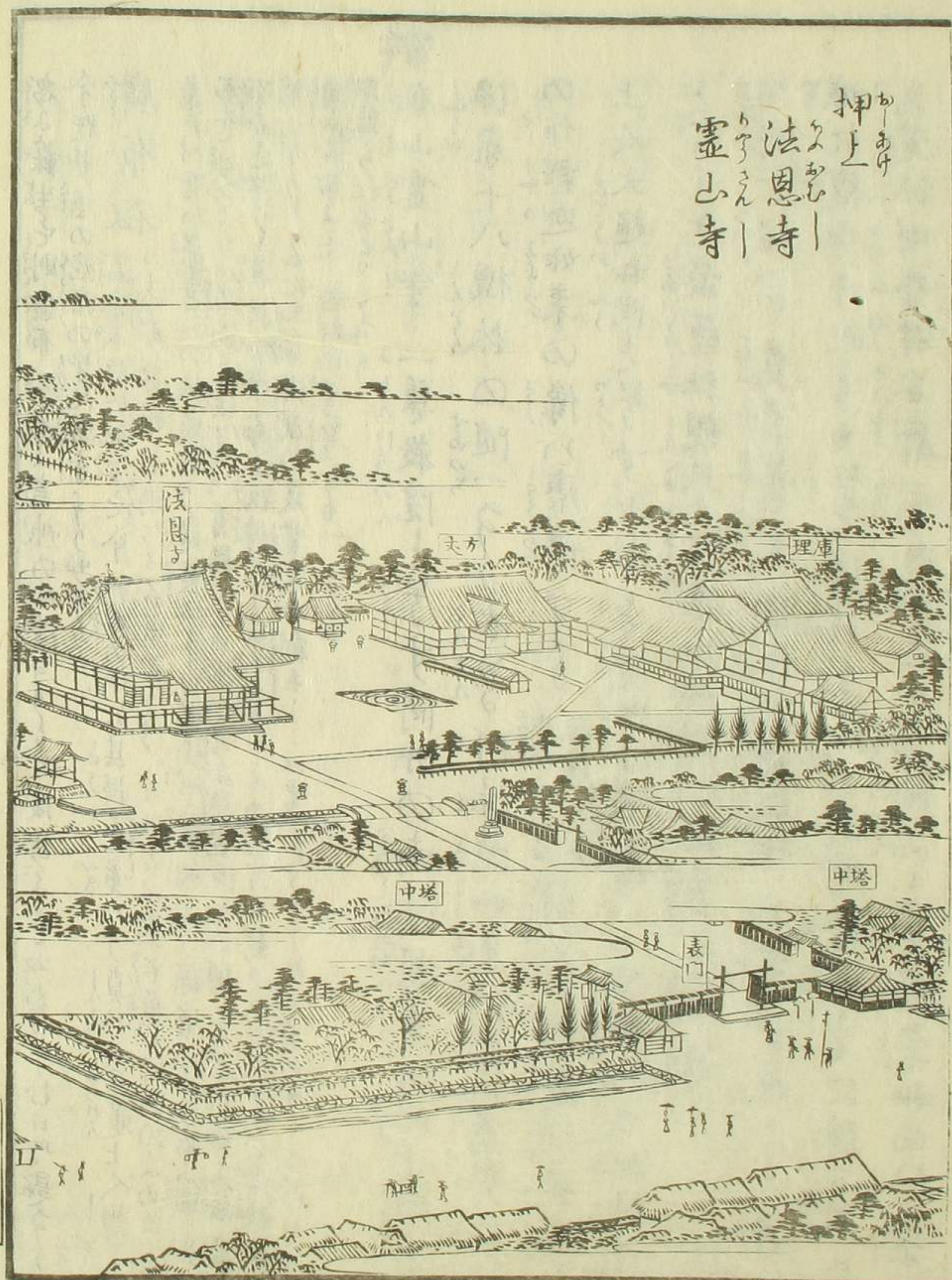
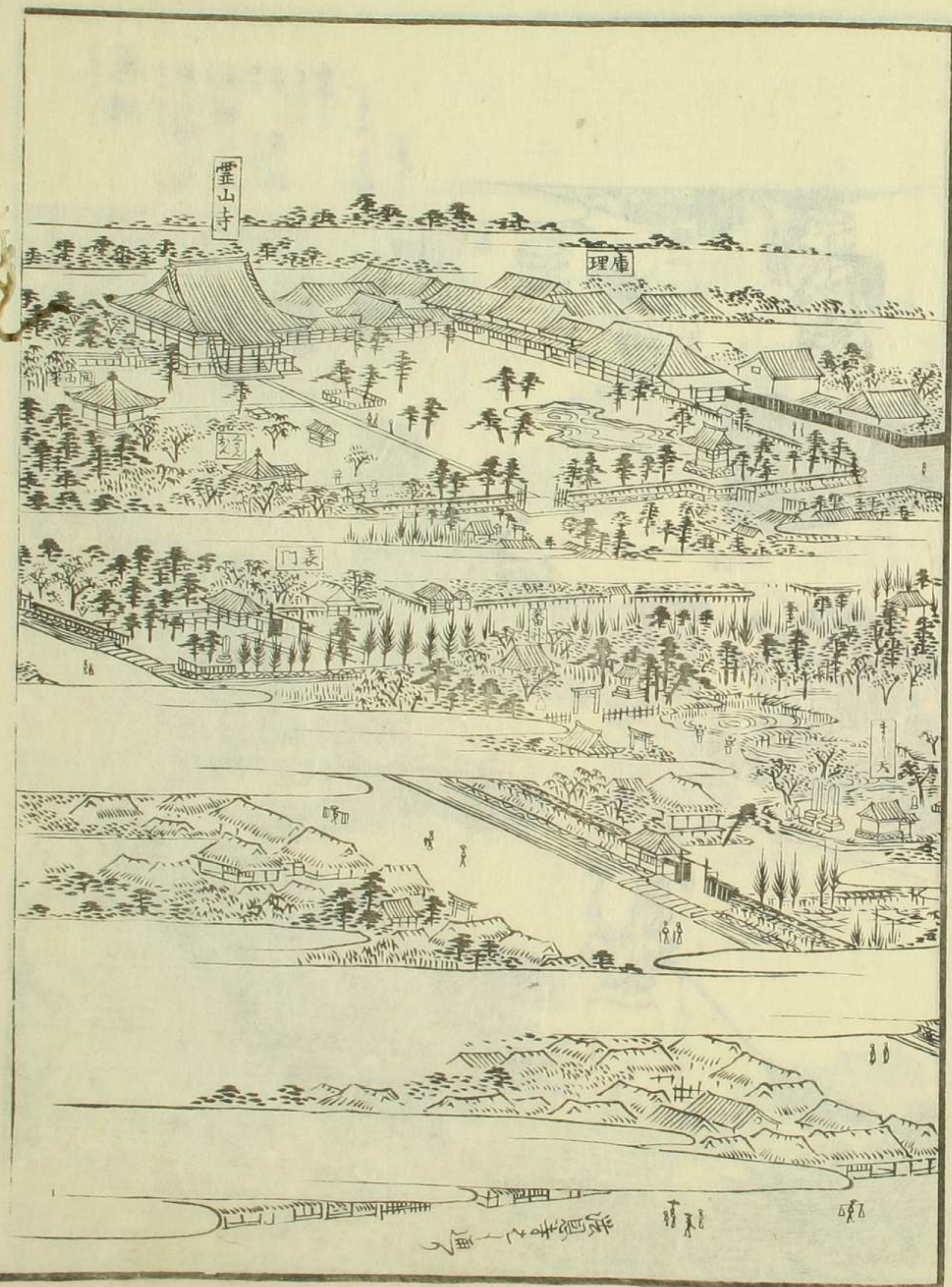


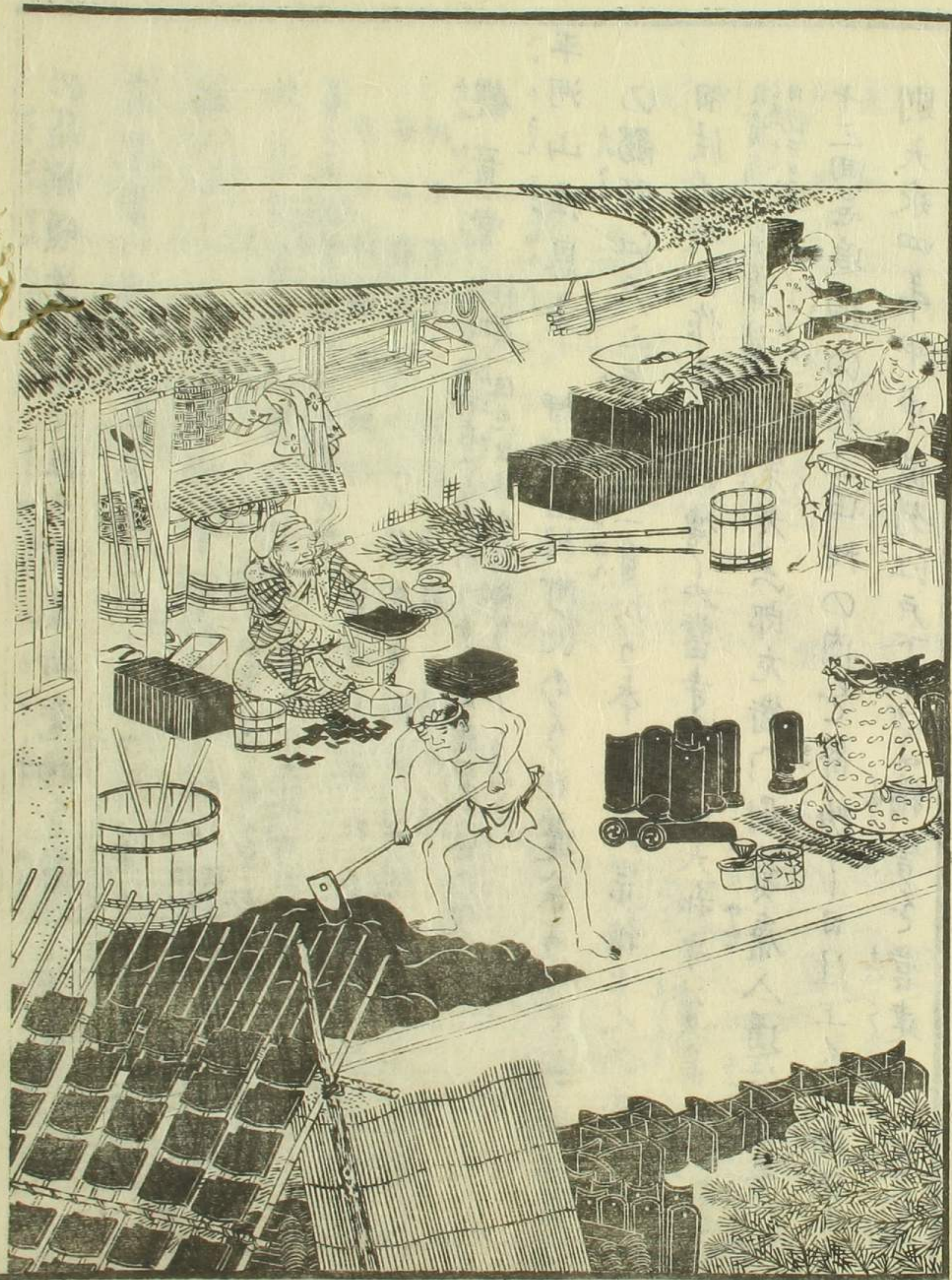


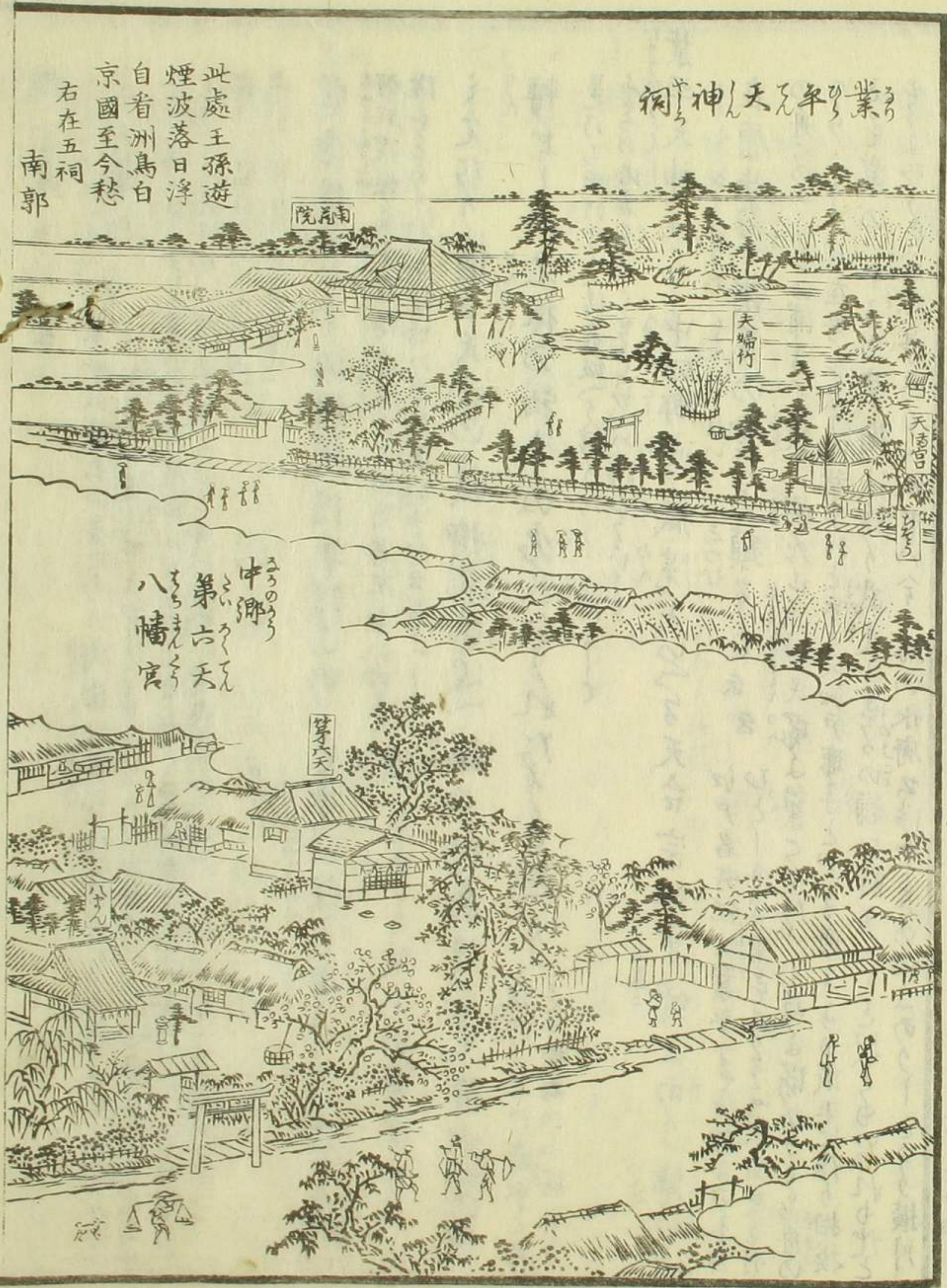
其二

萬五等を救へて國を還ししは是此事に依りて主と為らん
 ありり蒙古の敗平還るるを得る者僅に此二人のみ
云々の世祖の至元十八年日本を撃兵十餘萬海島に死せし選るるを獲る者僅に二十人とあるを異称日本傳に二十人の十の字の行なりと云々史に十萬の兵選るるを獲る者三人のことありて三人の名を著すたり曰く于闐曰く莫青曰く吳萬五等なり以上元史日本傳東國通鑑統資治通鑑綱目大學衍義補五倫書帝王編年集成太平記北條九代記當寺縁起等の
 依凱陣の後勳賞として永く此旗を貞綱と揚ぐ貞綱末由を書して身延山に納む然を當寺岡山日境上人牙延より携り来りて永く當寺の什宝ならしむるとあり
 寶聚山大法寺 同三下より西より日蓮宗よりて同所法
 恩寺に属す當寺は大永六年丙戌創立の梵宇なりて岡山の
 法恩寺第八世大権院日巧上人なり其頃の法恩寺と共
 今の御廓内平川の地より一と後谷中に移され又元禄年
 同今の地より轉りしむるとあり
 二十番神堂 本堂の左より番神の像日巧上人の作り日巧尊呼ぶ歳の時痘瘡を病既死せり又母也子抱する所に二十番神の靈ありより良き事を得て

忽ち蘇生と則廣布石を當神の加護なりとて後其を城にせしむ日巧顯るる
 今此夢想の痘瘡の守れ當寺より出せり
 廣布石 當寺本堂に秘藏今卵塔の中に其模を畫たり真物の日蓮上人親筆の法華首題と鐫たる石塔なり伊く云往來此靈石龜戸村の地よりありと龜戸村昔の鎌倉一の海道たり建長五年日蓮大外流綱より鎌倉よりありあり彼石を畫するは不面は法華の首題を書揚ひ大に廣宣流布の願を誓ひあり後廣布石と号く其後千葉赤松相傳りて千葉石とも稱せり然るに日巧上人は俗性子兼氏なり一に出家深度の後當寺を創立し此靈石を以て安んずありて巧所也又自此石面より二十番神の尊号なりと彫刻されしありとあり
 常在山靈山寺 二尊教院と号す同所の南法恩寺の北に隣る
 浄寂十八檀林の隨一あり本尊阿彌陀如来の像の慈覺大師
 の作釋迦如来の像の唐佛びりり 此故に二尊 岡山念蓮社専答
 上人 大起和尚と号す中古寺院既荒廢檀林の統脈絶ん
 とりて最蓮社親答俊應和尚深く此事を慨屢
 官府に詔して竟貞享二年檀林再興の命を蒙りて往昔の浄
 域に復せしめしむ功を後住に讓りて武別熊谷寺に隱る故に
 光蓮社明答遊安廓栄和尚を中興岡山とて廓栄和尚ハ一宗







業平天元神祠

此處王孫遊
煙波落日淨
自看洲鳥白
京國至今愁
右在五祠
南郭

中郷
第六天
八幡宮

の高徳碩堂よりして往生要集指麾抄を著し大に可く行ける
當寺昔の湯嶋妻恋坂ありしり明曆火災の後浅草了
稀りし元禄年間今の地より移る
知恩院尊空法親皇御廟
浄土傳燈系圖曰 尊空天蓮社帝譽号照満伏見
守邦親王子入于靈巖室剎染嗣法住洛知恩院元
禄元年十一月七日寂
觀音堂 淨土傳燈系圖曰 尊空天蓮社帝譽号照満伏見
平河山法恩寺 柳嶋出村町にあり日蓮宗よりして花洛本園と
の觸頭江戸三箇寺の一負たり本堂より定祖上人の像を安じ
日法上人の作り相傳り當寺の太田大和守資高
先考六郎左衛門尉資康入道法恩寺
十二回忌追悼の爲に田村の内を寄附し日住上人を同祖とせ
別大永四年甲申武列江戸下平河に精舎を營建し一家の靈

牌を居ると云

三十番神堂

本堂の前左の方北あり関東古戦塚といふ所の云傍は三十番神の堂
に資高北条家とあり里見義弘より命を承け永く豊嶋郡の地を執行せんとて是方の
記より其の前の神を奉りてを奉りて思ひ定ぬるに再々之を再々之と誓約ありしなり
平川の地ありなり

當寺往古の今の御城内平河よりありて本住院と号せしなり

所於役帳より本住院寺の三田内巻成分の地を法思寺と改し後世の
階をとり別を住院の本住院のを云ふなり
とえたり遙く天正の後柳原の辺に移され其後谷中清水坂の地へ
轉せしれ元禄の初今の地へひられしなり
是乃ち平河より遠く移りたりしなり

業平天神社

在原業平朝臣の霊を鎮ると云
中郷南藏院といふる天台宗の寺境あり傳ひ
の舟のありの浦より覆り溺死し乃里民塚に築こめたり故に塚のうら舟の
とて業の一本より業衡は作り武丈と号すの類ひ夥多しといふれ由は
是乃ち平河より遠く移りたりしなり

中郷の領今の地より移りたり又南向亭の説は中郷の業平假住の地より
按て當社の説は紛々として中郷の南郷の茶店に紙の三吉所の里の
神の相殿に業平の霊と藤村とを合せたりこれ偶田の流也
業平天神といふ稱はるるなりとあり此説の如く伊勢物語を作りたるものと
あはれ後世に附會せしめられたるなり

中郷八幡宮

同所南の方荒井町あり南番場町天台宗泉
龍寺奉祀と相傳ひ文明七年己未の鎮坐なりといふ

大六天祠

同北に隣り大川踏普賢寺別當たり當社由文明五年
癸巳の勸請なりと云傳ひ

多田薬師堂

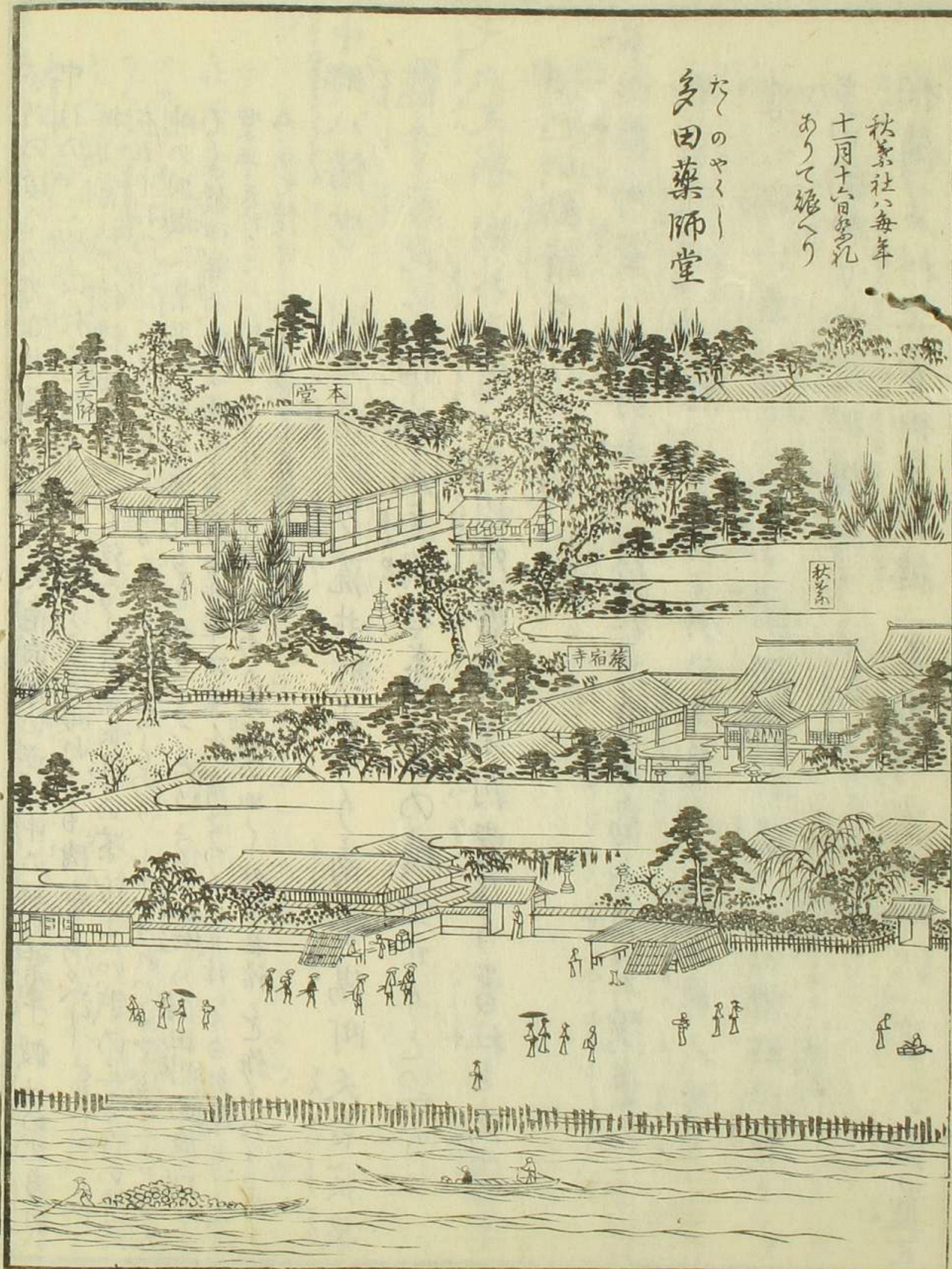
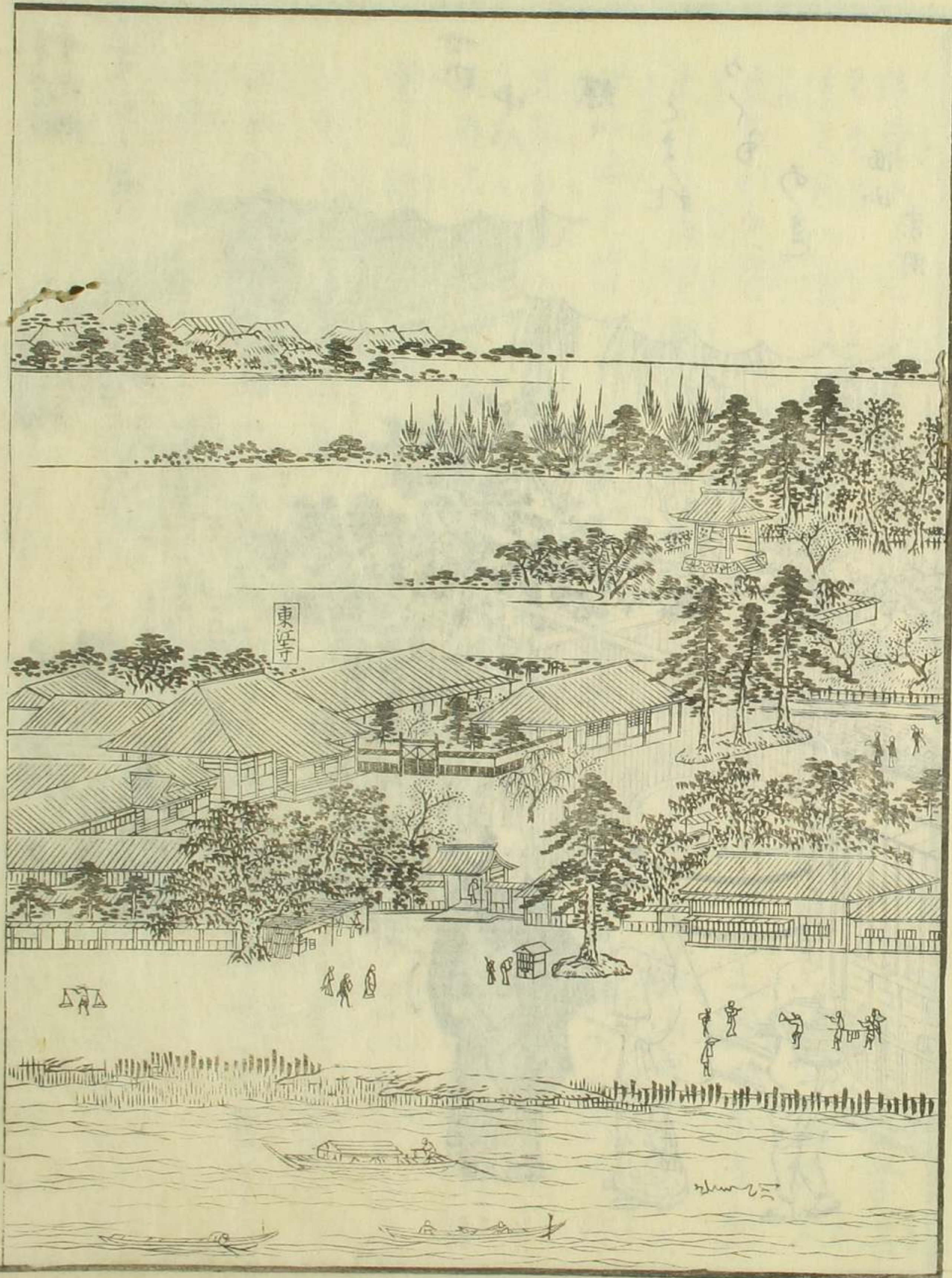
同所大川踏にあり玉島山明星院東江寺と
号す天竺薬師堂

李之錫の筆

なり奉り薬師佛の像は惠心僧都の作りて
多田満仲公の念持佛なりといふ

相傳ひ村上帝

御宇天徳二年撰別多田郷に一字の伽藍を



たのやく
多田薬師堂

秋葉社の毎年
十月十六日祭礼
ありて鑑へり

中之郷

さくら井

中の

蝶

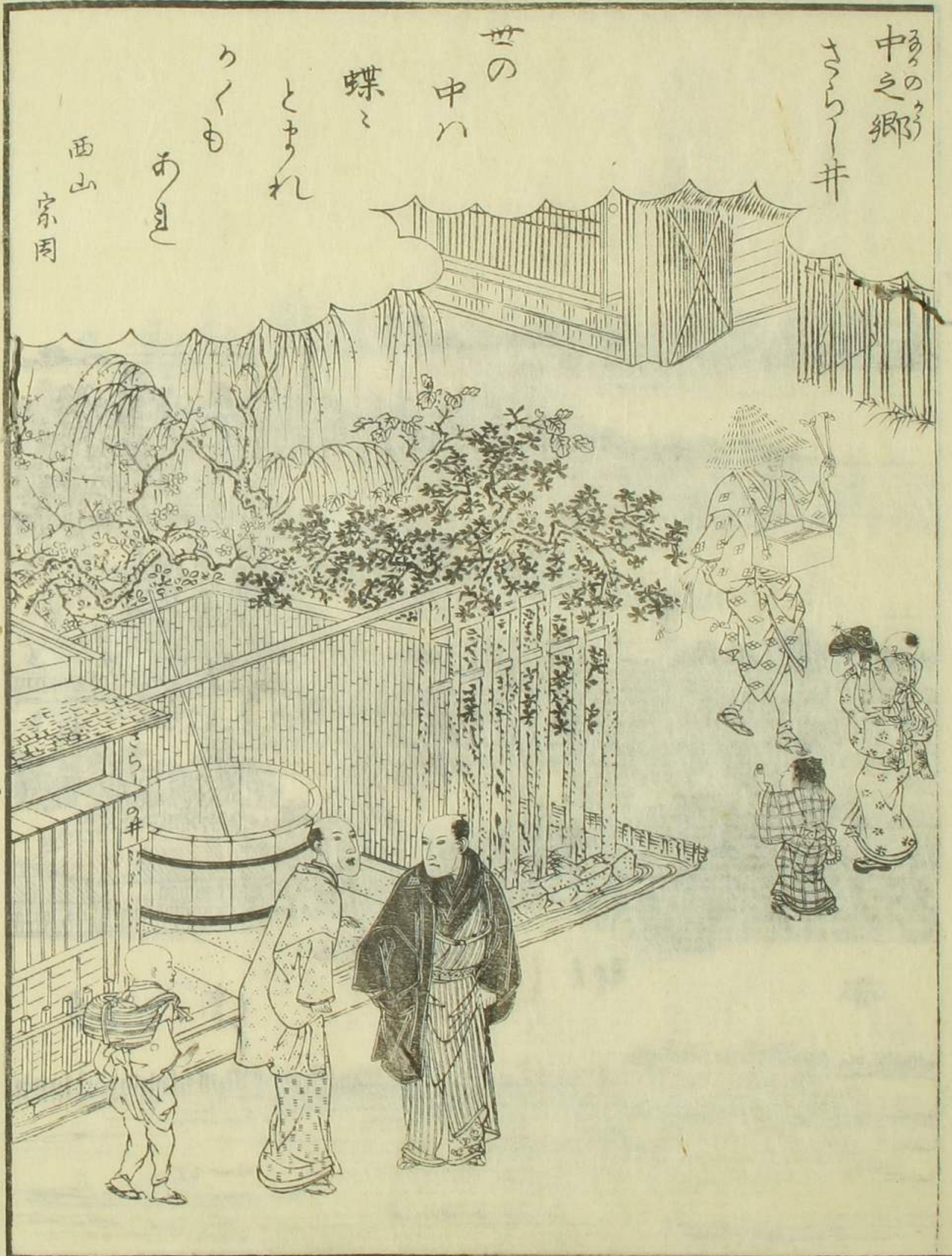
とちり

りくも

あま

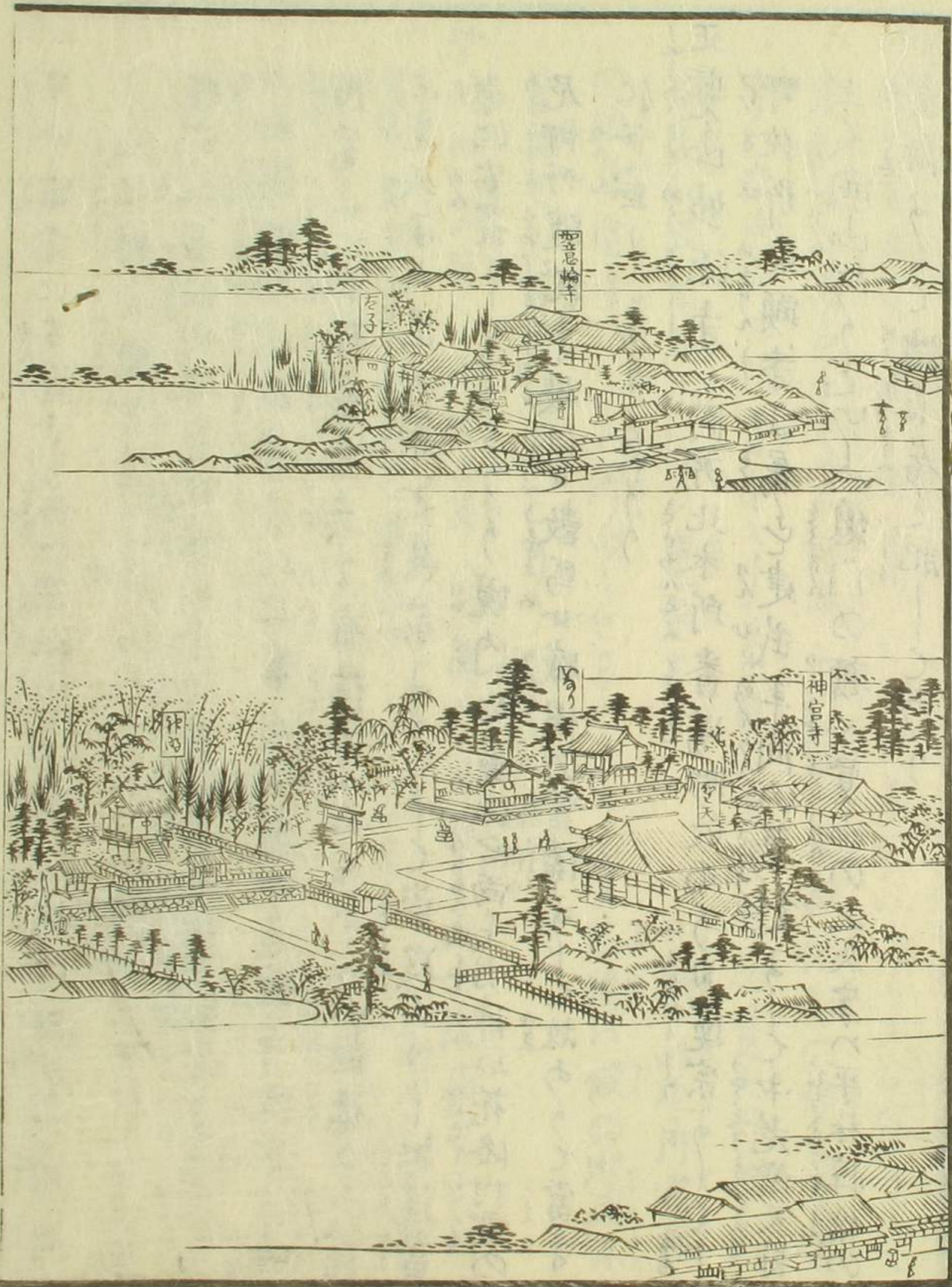
西山

宗岡

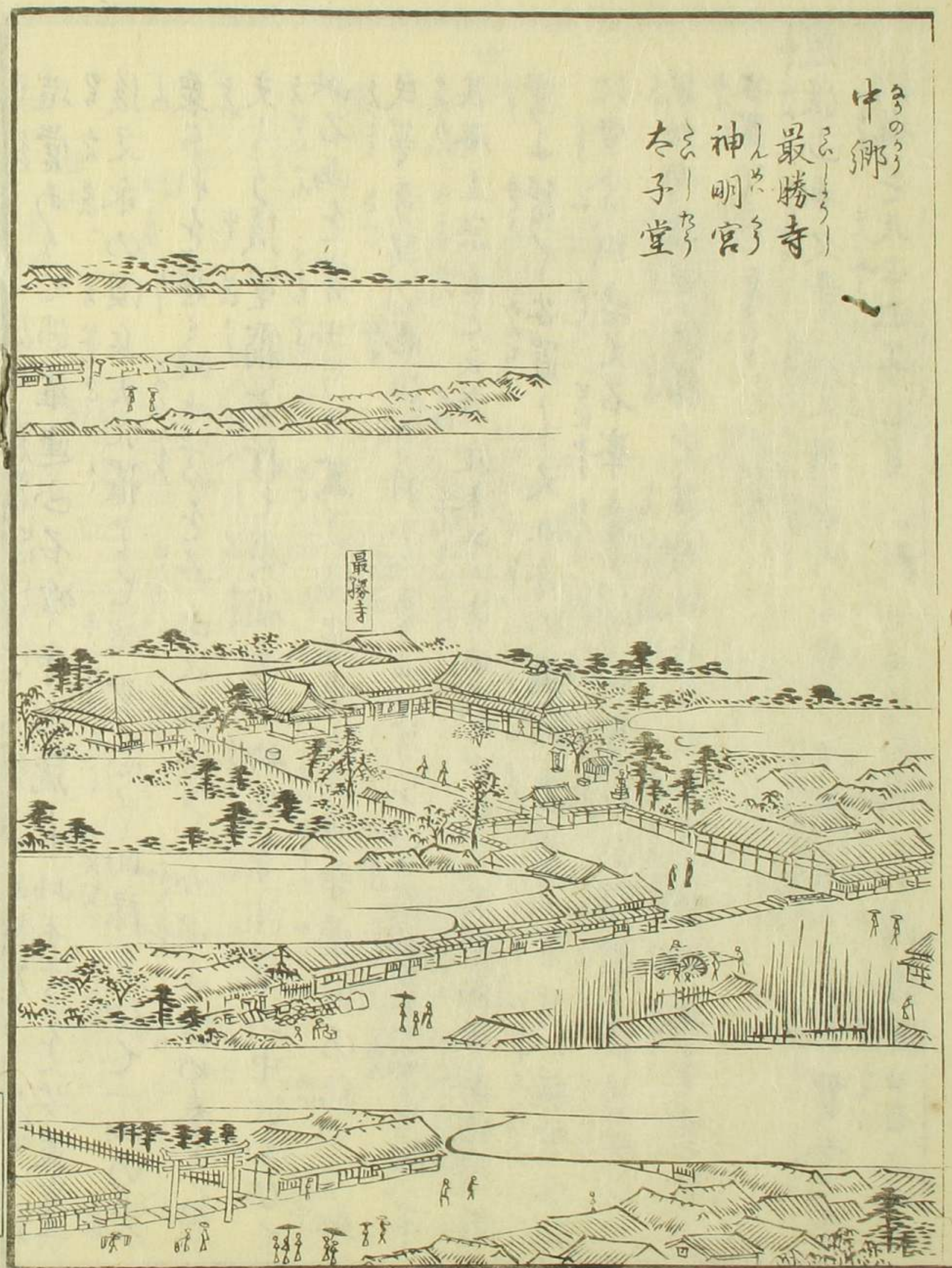


造管ありて沙羅連山石峰寺と號し此本寺を安置之其
 後文永の頃兵火に罹りて諸堂悉く回祿を依て一山の太
 衆られを悲む此本寺を石函に収め山中に理め奉り也
 夫より後星霜を經て慶長元年郷民等沙羅山中に於て
 此石函を穿出せり蓋し沙羅連山石峰寺藥師の銘あり郷
 民等奇異の思ひをこれ一處に一字を管て是を安置同八年
 其庵主宗玄と云者に本寺を告めありて京師五條の因幡
 堂に暫く安置し又五條の橋詰東の方若宮八幡宮の邊
 に堂舎成建て石峯寺と号を寶永の頃彼寺の黃檗の千
 呆和尚深草に移を其時故ありて本寺藥師佛を當寺に
 安置せり

照法山本久寺 北本所表所あり日蓮宗ありて平賀本土寺
 に屬して天正三年乙亥の創立ありて岡山清眼院日有上人と



中郷なかごう
 最勝寺さいしょうじ
 神明宮しんめいみや
 左子堂さしどう



号を當寺に安置する所の宗祖大士の像は日朗所御首を彫刻
一 日法所全體を造り添られしといふ體中三寸に六寸の首
題の札を収めたり日朗のうひ日法等の真跡なりといふり
此御影始谷中感應寺に安置を元禄四年彼寺改宗の時
檀家より八牧弥宗と云ふ有信の人ありし此影像あらひに
之光天子大黒天等と其家よりつて宗殺ありしを後當
寺に安置ししなりといふり境内安並の七面大明神の花洛村雲の
尼御所隨龍寺殿仕女數馬女感得の靈像ありて故ありて當寺
に安並ししなりといふり

正覺山妙源寺 同所北本所番場町にあり日蓮宗ありて十
野依那妙頭寺は屬を建武年間草創ありて中老僧天目
上人用山たりといふ總門の額正覺山の三大字ハ平林淳信の
筆跡ありて消日居と記してあり

牛寶山最勝寺 明王院と号し同所表町にあり天台宗ありて
東叡山は屬を本寺不動明王の像は良辨僧都の作り當
寺ハ牛御前の別當寺ありて貞觀二年庚辰慈覺大師草創
良本阿闍梨用山たり寛永年間 大樹 此辺津邊彌
の頃屢當寺ハ 入所せられしより其頃の假の所殿杯
堂構りしと云れたりといふり
牛嶋神明宮 同所並の相傳ハ貞觀年間の造座ありて別
當を神宮寺と稱して最勝寺より兼帶と
夢の伊勢大神宮虚字ありて大光月の月に微妙の御声ありて我は王女攝天の常
元海と云は法義經壽量經の文を唱へ我は伊勢大神宮ありといふり
伊勢の御神を勧誘ししなりといふり
用云牛嶋北条家の名限ありて戸牛島四ヶ村とありて富永保に郎の所取の中
あり今も本所中のの辺より須藤家の名ありて戸の古果に回向院の母牛島と記して
あり

太子堂 同所元町にあり天台宗如意輪寺に安置を本寺聖徳太子

の像（まが）十六歳（とむ）にありてその時（とき）自親造（みより）りありてなり當寺（あた）の像（まが）和
 天皇（てん）の嘉祥（か）年間（ねん）慈覺（じ）大師（だい）東園（とう）遊化（ゆう）の頃（ころ）の創建（くわん）ありて帝百
 畝（あ）の水田（みづ）を寄附（よ）りて天文（てん）の頃（ころ）此地（この）祝融（しゆ）氏の災（わざ）にあり
 とも太子（たい）の靈像（れい）の自火（みづ）燭（しやく）を造（つく）りて出（で）りて恙（や）なりり
 江戸（えと）名所（な）評（ひやう）しとあり

早稲田大学図書館

011688985007